

新納忠元勲功記

(表紙)

新納忠元勲功記

當内藏拾二代先祖新納武藏守忠元初名安萬丸次郎四郎

刑部太輔入道拙齊為舟事、永祿十二巳年より慶長

十五十三戊年迄四拾余年大口地頭職ニ而、戰國之

砌堺目相押、段々勲功之次第、且家筋之大概、

左之通御座候、

一元祖新納駿河守是久事者、家嫡四代修理亮忠治二男ニ

而、別立五代近江守忠續之為ニ者弟御座候得共、忠續

者飢肥江居城仕、其養子六代越前守忠明之為ニ者兄ニ

て、忠明と志布志江罷居、家督之兄筋に御座候間、一

族中崇敬為仕由、其上是久女者伊作家九代又四郎善久

奥方ニ相成、日新公御母堂梅窓様御事ニ御座候、夫

故是久儀、善久御親父河内守久逸櫛間居城ニ而、忠續

と被及争戦候節、久逸方少勢御座候ニ付、文明十七年

彼手(三)相付、是久戦死仕候、其子伊勢守友義、是ハ

梅窓様御兄ニ而御座候、其子左京亮忠祐、是ハ享祿元

年嫡家近江守忠勝伊東家と合戦之砌、於庄内冷水ニ戦

死仕候、其子加賀守祐久、是則武藏守忠元親父ニ御座

候、▽(四)右梅窓様御事者至極之御聰敏ニ而、歌道者勿論、

儒学を被為好、世に聞へ候御賢女ニ而御座候由、然處御女子

二人被為在候得共、御男子無之候故、金峯山江御立願有之、

三年之間丑刻御参詣有之候處、御結願に相成候夜、途中祓川

与申所ニ而白張之社人御跡先に列合候而、其方にハ文武二道

之兒を産べしと申上化し去候由、其翌夜御夢に金峯山を御覽

候處、漸々御前に近く相成、白飯与化し御懷ニ入候与御夢想

有之、夫より御娠身ニ而、日新様御誕生有之、(五)然處

日新様御三ツニ而御父善久を被為失、御九ツにて御祖

父久逸を被為失、いまた御幼稚之時分右之忠祐弟能登

守忠澄入道事梅窓様御甥ニ而候故、御守役ニ被召成、

勿論 梅窓様御事兼々大學等被為讀、人材之御目利茂

能候哉、忠澄別而正道ニ御教誡申上候故、世ニ稀成賢

君ニ被為成、其御子 大中様御代ニ者三州一統御平治

ニ而、御家之御中興迄被遊候事共之御基者、第一

梅窓様之右躰御賢慮より為相始趣、系圖系傳等ニ委敷書載

御座候、

一天文七戊年、忠元拾三歳罷成時分、嫡家忠勝居城志布

志を初拾余城領知仕居候處、飢肥領主豊州忠朝・都城

領主北郷忠相等申合、双方より攻伐仕、防禦之術茂盡

果候ニ付、同七月忠勝居城立退候節、父加賀守祐久、

嫡子忠元并弟縫殿助忠清等召列、右通之御由緒御座候

故、伊作江参越仕、祐久叔父漁隱を相頼、日新様

大中様御方江罷出、其節今一人之叔父山城守忠光漁隱弟

茂同断相頼、是者田布施江罷出、一瓢様御方江被召仕、

後ニ 日新様御家老御役迄相勤、是久子孫嫡庶共何れ

も右次第御間柄之訳ニも候哉、餘程皆御心安為被召仕

由御座候、

一同十四巳八月、大中様伊集院江被成御座時分、入来

院石見守重朝叛逆ニ付、神殿村より御人数被繰出、郡

山城被為攻砌、味方及難儀、為加勢先忠元等被差遣、

無程 御出馬ニて、御直之御下知茂有之節、忠元先

登ニ相進、山口某与切合、其首討取奉備 御覽、其折

郡山茂御領ニ罷成候、此時忠元拾九歳初陣ニて蒙鎧疵、

右通高名為仕由御座候、

一同十八酉年、大中様清水江被成御座時分、右之重朝

并東郷領主東郷重治・帖佐領主祁答院良重・加治木領

主肝付兼演・蒲生領主蒲生範清等謀叛ニ而、吉田城可

襲取と相企候節、番手として忠元等被差遣、在番仕候

内度々合戦有之、就中於興慶寺前大太刀ニ而先駆仕候先登

砌、馬場某与申者一番を争候得共、敵方より一番ハ大大

太刀持ニ候事相知れ、忠元ニ為相究由、此外数年粉骨

仕、是□を其比六年弓箭と為申由御座候、

一同廿三寅年、右之肝付兼演加治木を差上降参仕候處、

祁答院良重・蒲生範清等、右之兼演を可相攻与の企ニ

而、蒲生方西侯武藏守盛家与申者江岩劍城（勲岩劍を為守置、を為守置、

同年八月加治木ニ押寄段被聞召及、同九月 大中様并

貫明様など御直ニ為御救日當平迄御出馬、忠元茂被召

列、脇元邊放火ニ付、瘦五郎坂と申所ニ而合戦有之節、

忠元抽衆高名為仕由御座候、

一 弘治元卯正月、右（之）範清・良重等謀計ニ而、北村之者

共江申含降参之筋ニ為相偽候故、 大中様 貫明様吉

田之様御出馬ニて、同廿七日北村江被為入候處、賊兵

不意ニ起合せ御勝利無之、則被為引候折柄、忠元事（忠元等ハ

大中様御太刀相持罷在候得共、賊徒付送防方として弟

子丸播磨守等取返し討死仕、 貫明様猶茂被為及御危

難ニ候ニ付、早々忠元駈参可相救旨被仰付、則馳参候

而討退け、殿仕候故無難ニ被為引取、別而蒙 御感賞

為申由、左候而此御難戦を北村帰忠（世上申傳候由与世に申傳候由御

座候、

一 永祿三申十月、 將軍義輝公より御當家伊東家と争戦

及式拾餘年由候間、御和談被成候様御調儀（として）上使

伊勢備後守貞運被為下向、於末吉 大中様御對（願）之節

茂、忠元并樺山安藝守幸久・肝付彈正忠兼（寛二）被仰付、  
萬端御應答為申上由御座候、

一同五戌年、真幸院主北原又八郎兼守病死ニ而、院内多

くハ御領ニ罷成候得共、北原伊勢介兼正与申者、横川

城ニ楯籠候ニ付、 大中様溝邊迄 御出馬被遊、同年

六月 松齡様御太將ニ而御人数被差向候節、忠元伊集

院源助久春（入道）と先登仕、於城戸忠元鑓合仕、終ニ為

被攻陥由御座候、

一同七子三月、 近衛植家公并御子前久公御吹挙（而）ニ

大中様者修理太夫（より）陸奥守に御受領被為在、 貫明様

者又三郎（より）修理太夫ニ被為任候、 御宣旨御申調、進

藤左衛門太夫長治ニ為御持被差下候節、忠元茂御取成

可仕旨、同十三日、右之 御両公より御銘々御判物被

成下、于今家藏仕居候、

一同九寅正月十六日、 日新様 貫明様御連歌被遊節茂

忠元被召加、拾一句仕候、此等之儀者每度之事と相見

得候間、此類者逐一書出不申候、

一同十卯年、菱刈領主菱刈重猛伊東方江一味ニ而、此御

方より三之山城被為攻砌、前以彼方江為告知置候故、

御勝利不為在、其上重猛死後、其子鶴千代幼少ニ付、

同名左兵衛尉重住存付ニテ、押領之地<sup>(を)</sup>差<sup>(上可)</sup>致降參

与の相談茂為致由候得共、老臣共納得<sup>(不仕)</sup>、猶伊東方

ニ致内應候多罪難被差置、右ニ付亦<sup>(三之山)</sup>可被相攻

向ニ被觸させ置、同年八月 大中様 貫<sup>(明)</sup>様飯野江御

出馬ニテ、同十一月不意ニ被押寄せ、同廿四日城攻ニ

テ、城将井手籠駿河守重之・其子兵部少輔重房・孫弥

四郎重陣等式百餘人被為討取、菱刈之御手初ニ先一番

馬越城より御領ニ為相成由、其節忠元抽衆相働、及五<sup>(數)</sup>

度勇功を振ひ、自身ニ茂為蒙矢疵由御座候、左候處大

口地頭菱刈大膳亮隆秋等、此御威勢ニ辟易仕、曾木・

平良<sup>(本城)</sup>之<sup>(事)</sup>湯尾・羽月・平泉・山野・青木・市山之八

城、其夜皆打捨、大口城ニ為引取候間、同廿五日

大中様 貫明様馬越城に被為入、則御手分ニ而本城・

曾木・湯尾・市山江者某<sup>(夫)</sup>番手被差遣、平泉・羽月に

は出水之義虎より可被為守旨被仰付置候、然處大口城

少勢ニテ難防存、相良義陽江加勢を乞、折柄出水方不

審<sup>(之)</sup>山野等より玖摩・芦北・八代之軍兵三百餘を大口

城に招入れ、時々市山城を侵伐仕候間、同十二月廿九

日、市山守将市来備後守家利・伊集院刑部少輔久慶等、

於西原遂防戦、家利・久慶等致戦死候ニ付、其後市山

之御番可仕者無御座、其砌忠元者馬越城江御供仕居候

處、從 大中様忠元差越御番可仕、小身ニ而者難勤答

与蒲生之御藏入等拜領被仰付、尤大口入<sup>(御)</sup>手候上ハ、

直ニ地頭をも可被仰付旨、段々難有蒙<sup>(御慮)</sup>、市山城江

罷移、市来・伊集院・河邊・田布施之軍衆ニ加下知、

在番為仕由御座候、

一同十一辰二月廿八日、上様馬越城ニ被成御座、嶋津

忠長・肝付兼寛を市山ニ被遣、大口城可被相攻御相談

忠元江被仰聞、被罷帰砌中途伏兵茂念遣敷、且兩將敵<sup>(兩城之)</sup>

物見をも、城之物見茂可被致ニ付、忠元等小苗代迄送參、互ニ相

別候、已後忠元儀者薬師堂江立寄、暫致徘徊、徒然に

牡丹花下睡猫心在飛蝶と申文句を壁板ニ案書仕、折柄

敵不意に駈出、物見之兵を追立、就中竹添丹後と申者

杯一番間近<sup>(可)</sup>馳參由ニテ、忠元家来久保勝八行重馳来、

早々覚悟仕候様申聞せ候得共、右文句可書取含ニ而、右文句ハ勿論、年月日

迄可書取含ニて、忠元性心少茂不相動、尚静ニ書訖候を、丹後者幸レして堂下ニ驅付、直ニ鑓を以左脇を突

詰候故、勝八側より見兼、則忠元を引落為申由、夫故右之染書筆先キ引捨候なりにて、其板葉師堂江相納有之候處、

先年出火有之、焼失為仕由御座候、△其節忠元初而刀を抜き、忽向敵を切拂、別而防戦仕砌、川畑藤七兵衛・春成外記等馳續、抽衆相救候得共、敵多く相増候

付、能程ニ相戦可引取与見計申内ニ、市山江留守仕居候鎌田老岐・税所右衛門兵衛・四元源太兵衛等迎とし

て馳来、相共に抽戦功、其節忠元敵三人、三人を打候、其内一人ハ東藤右衛門与申有名之士杯討取、又於上之原茂式人討取、自身ニ茂六ヶ所為蒙疵由、

扱又此日忠長・兼寛も於中途敵ニ出合難儀之躰候故、馬越城より新納右衛門

佐久饒・鎌田尾張守政年等人数召列させ迎ニ被差遣、皆能為被引取由、左候而此度忠元戦功并数多蒙疵候事

共 大中様被聞召上、則三原右京亮・長谷場織部佐兩使を以、右之御褒美且手疵之御尋共難有為被仰下由御

座候、其後菱刈・相良之大将共、澁谷方江茂加勢頼遣、

同三月廿三日、澁谷方より多勢を曾木城に差遣攻掛候得共、宮原筑前守景種・佐多常陸介久政等在番仕居、

手強ク相防候付引取、直ニ市山城ニ寄来、其比迄者忠元手疵いまた平愈茂不仕候得共、則甲冑ニ而進出、吉

田治部・西田主馬ニ士卒相付、敵を白坂ニ為拒置、且間藤田本田掃部兵衛・河野玄番・問世田刑部左衛門・鎌田外

記・長野民部・濱田右京・上床源六兵衛・日高甚五郎・伊地知新三郎・長谷場弥四郎等を永福寺ニ差遣、為致

在番候處、本田・河野・長谷場等殊ニ防禦仕、追却ケ為申由御座候、

一同十二年巳三月、去々年羽月城之警固者義虎ニ被仰付置候得共、大口城より敵兵度々寄来、外曲輪等攻破候

付、番手御断被申上、致在番人無御座候故、忠元并肝付兼寛江被仰付、市山ニ者中書様御在番ニて、忠元等

ハ羽月城江被召移候処、敵兵猶相侮、却而掠取企相聞得、忠元・兼寛申合、伏兵ニ而不意ニ討勝外者無之と市山江參謁、中書様ニも示談仕置、同年五月六日大野

駿河守忠宗・宮原筑前守景種人教ハ人衆召列、未明より打

立、稲荷山と諏訪山に相伏罷在、忠元ハ戸神尾ニ忍居、

兼寛ハ白木河内ニ相扣、何れ茂相圖を待合罷在、左候

而中書様釣手之人數被召列、市山城より御忍出、數百

之人馬ニ兵糧を付させ、堂崎より平泉城江付越躰に被

為下知候處、如案大口より足輕共馳出、道を相遮候付、

中書様御打出被追拂候得者、敵茂為可相救大軍駈續候

ま、暫被為相戰、能時分ニ偽て被為走候處、敵弥乘勝

戸神尾之西迄追掛參を見計、中書様御返戰有之、其時忠元

螺を吹せ、忠元螺を為吹、是を相圖に忠宗・景種一時に起り、互

に鬨を合候塩合に、忠元横より切出、兼寛も亦突出、

前後より挾て相擊、敵首百三拾六討取、大口城も此敗

軍より餘程兵勢為相減由御座候、左様ニ成立候故、同

八月十八日猶大軍を被遣、大口城被為攻圍候處、菱刈・

相良茂必至与困窮仕、和降之願申出、御許容被為在、

同九月十日相良帶刀・深水太郎左衛門兩人を質として

差出候付、同十四日困茂被為解、攻摩方之軍衆も退去

仕候故、同十八日 上様皆城中江被為入、鎌田政年江

被仰付、勝吐氣取行ひ、左候而御兼約且是迄多年之軍

忠至極之御感賞ニて、忠元江大口地頭職且菱刈兩院之

惣押迄、四拾餘年為相勤茂、此日よりの事ニ御座候、

但右之相良方菱刈加勢として大口江為馳籠節者、誠

に一大事之御難儀ニ成立、義虎番手之御断為被申

上時分、山野ニ者喜入撰津守季久江在番被仰付、

其節季久被存候者、此度於無御勝利者夫限御家ハ

可被為絶、然者 貫明様茂大岳様之御血脉ニて、

其儀者季久茂同前候間、若禿申事候ハ、何卒御家

者御永續被為立、其替喜入家御禿可被下趣、伊勢

并愛宕社江誓願被申上、右通御勝利被為在候付、

其立願之一筋を以、季久者則私領喜入四拾町其外

諸所懸持迄茂皆 御物ニ差上、嫡男龜次郎者出家

為致、老母妻子者鹿兒島唐渚江為致借宅置、元龜

元午六月より打立、伊勢と愛宕江致參詣被罷帰候

處、 貫明様立願成就被仕候、御感賞不斜如本御

家老被仰付、私領茂本之通被成下、直ニ嫡子龜次

郎茂還俗ニ而三郎四郎と名茂為被下趣、季久子撰

津守忠政書留ニ相見得、是ニテ其比之御難戰恐察被仕候処、前件之通忠元等雄略を以御勝利有之候

間、右通為被仰付御感賞之程茂被奉恐察事ニ御座

候、且忠元市山城江在番仕候砌、諏訪之鎌一刃、

自何方共不相知飛来、大口城御領相成節も亦同様

飛来、旁之奇瑞ニハ忠元茂別而感悦仕、本より麓

江諏訪社立居為申由ニ而、其側ニ奉勸請、鎌飛取

訪大明神と崇敬仕、廿九日 每年七月廿五日祭方為仕事、

代々例祭にして、今以内藏家より年々不忘祭来事

ニ御座候、扱又菱刈両院と申義者、本城・馬越・

湯尾・曾木を太良院と相唱、即隅州菱刈郡之事(三)

御座候、(文)大口市山旧名・羽月・平泉・山野を牛

屎院と相唱、是ハ薩州伊作郡之内ニテ、其餘者那

答院ニ相付罷在候間、太良と牛屎ニ付居候地を菱

刈両院と唱来候筋ニ御座候、左候而其院と申詠ハ、

上古一郡之内ニ而、山川等有之百姓共便利不宜處

江ハ、郡司共役所を双方ニ相立、年貢等收納仕、

其役所を某院と相唱、其支配ニ相付為申場所、右

通相分れ候間、只今何方組与蔵付郷を被分置候仕  
来共、此遺風ニ可有之与申事御座候、

一元龜三申五月、松齡様飯野御在城ニ而、伊東勢を木

崎原に被為迎、御大利之節茂忠元承付、直に大口より

人数差立、御加勢為仕候由御座候、▽◎右飯野御城御移

徙之砌、御祝として忠元も被召呼候ニ付、大口より吉松般若

寺越を參候處、途中ニ而盜賊取懸候ニ付、其者共を仕詰參候

て、御祝之御席余程延引罷成、松齡様殊之外御待被遊候處

江參上故、遅刻之詛 御尋ニ付、盜賊切伏罷通候次第申上候

得者、別而御賞美ニ而、其刀者何様之刀ニ而候哉与御尋ニ付、

先年 拝領之溝有之刀ニ而候与申上候得者、御移徙之御祝ニ

火之唱を避申候き、忠元者武事ニ不限、萬事ニ心入有之段、

詛而御稱賛為被 遊由申傳候、△

一同四酉二月、是より以前肝付河内守兼續入道省鈞謀叛

にて、祢寝領主祢寝右近太夫重長等與黨仕、此比拾式(迄)

三年御敵對仕難被及手時分、極御内分八木越後守昌信

を寶持院に被添遣、蜜々重長ニ遂面會和降を申勸置、◎可成和睦を申勸め置

猶又忠元并伊集院右衛門兵衛久治・上原長(門)守尚常茂



同様渡海被仰付、是亦重長江致面謁、必肝付方を相離

れ可被盡忠節儀第一之後榮ニ可相成与細々申論候て、

重長致信腹候ニ付、同廿一日忠元等三人直に誓文相渡、  
(取)  
(誓紙)

其上同廿六日 貫明様御判物并御家老喜入撰津守季久・

伊集院右衛門太夫忠金・平田美濃守昌宗よりも誓文被

成遣、同三月重長降参仕、同十日右馬頭征久・圖書頭

忠長大軍被召列、祢寝城に御討入、段々肝付方と被及

合戦、彼表茂御領に罷成、其手初ニ者忠元等右通勲勞

為仕由御座候、

一天正二戊正月、去冬より肝付方安楽備前守兼寛、牛根

城を相守候ニ付、金吾歳久様〔歳久様軍衆〕杯軍衆被召列、平床迄御

出陳被成居、此月十八日被為備困候得共可落鉢ニ無之、  
〔攻〕

何卒見立ハ無之哉、貫明様より忠元江御意被為在、

則為召列人衆之内逆瀬川奉膳兵衛武安・本村筑前守・  
〔長〕

久富伴五左衛門ニ申付、嶮岨之岸を堀穿、城内に道を

通し可攻入手段仕候處、備前守兼寛も是ニハ難得防、

同廿日弟彦八郎兼貫を人質に差出候間、是よりも忠元

嫡子刑部太輔忠堯を城中に差入、互ニ取替相濟、兼寛

〔和陸候て〕  
等和降ニて下大隅之様退去仕、同廿二日忠元城内に打

入、城祝共為仕由、左候而此牛根之御領〔牛根之城御領〕に為成事共ハ

珍敷知謀と、餘程其比茂稱美為仕事之由御座候、左候

而此比者肝付茂省鈞并嫡子左馬頭良兼茂死後に相成、

其弟三郎四郎兼亮代ニて、右之牛根計ニ無御座、前年

正月ハ住吉原之軍に北郷時久より肝付勢四百三十拾余人

被討死、其上前文通祢寝重長も御降参仕、只下大隅之

領主伊地知重興と日州之伊東義祐計肝付ニ與黨仕、兵

勢茂餘程弱目に成行、折柄肝付方之親族同名越後守兼

純之母と忠元之母茂浄光明寺其阿西嶽とハ皆兄弟ニ而

父者新納周、其阿者其以前高山之道場ニ罷在、兼純者重

興之輩、彼此縁引茂御座候ニ付、忠元等申出、其阿を

御使僧ニ被仰付、重興と兼純江篤与申論置、兼亮茂和

降可仕旨申勸させ、此年二月重興下大隅五ヶ所差上御  
〔も〕  
〔降〕  
〔参〕

降参奉願、下之城一所被成下、同廿五日嫡子伊地知三

郎九郎重昌鹿兒島御内江参謁仕、御禮申上候故、兼亮

も押領仕居候内より市成・廻〔今之〕福山・恒吉三ヶ所を差上、

御和陸之願申上、其通為被仰付由、此等之諸所御領ニ

為相成茂、右通忠元ニ縁引為有之故、手初為仕筋御座候、此年 貫明様御武運長久之誓願ニ、忠元十躰愛岩愛岩社を大口里村ニ建立仕置、今以毎年二月廿四日例祭有之由御座候、

一 同四子四月 近衛龍山様御下向ニ而、 貫明様初上御

歌會被為催候節、忠元茂為被召加由御座候、同年八月皆様御出馬ニ而伊東方之高原城被為攻囲、同十六日城

中より茂防出合戦有之砌、忠元嫡子刑部大輔忠堯、其歲式拾三歳ニて、大手之城戸口より片手者小楯をかつき、打刀計にて詰入、其日冠頭之合戦仕、数多為蒙手

御詰合

疵よし、左候て伊東勢茂防方難及手、同廿三日落城仕時分、城中足輕大将漆豊前介と申勇名之士、先一番に忠堯之姓名問尋致面謁、無比類御働感入趣致褒美候て立退為申由御座候、右之落城より三之山・温水・須木等之七城茂皆引拂退去仕、同廿八日於三之山城川田駿河守義朗江被仰付、勝吐氣被為執行候節茂、忠元儀ハ諸一所持衆持參太刀之列ニ而、御太刀進上為被仰付由御座候、

一同五丑春、右之城詰ニ肝付勢乍致出陣立見仕居候ニ付、

伊東方と合戦不仕内者降參為仕詮茂無之旨被仰出置、相應之爭戦成立、伊東勢福島迄押寄せ可攻取風聞内場

へ相聞得、追々駈續、志布志迄ハ御出馬茂被為在、福島邊ニ大軍馳集候故、伊東勢茂難叶為引取由、其節肝

付之家督三郎兼護後者左馬助兼道と申候へ者高山一所被残置、其餘之領地始良・大始良・内之浦・串良・北原・鹿屋・百

引・平房・松山・大崎・志布志・福島等ハ被召上、御

領に為相成由、右之内志布志之儀者忠元先祖已來之旧

領等ニ而、譜代召仕候家来筋之子孫、俣木某与申者共

相殘罷在、忠元拾三歳にて立退候以後者、初而討入、

右筋目之者共ニ茂面會為仕由、此等之子孫今以彼地に

罷在、當分者又木と書、家来ニ仕置候茂御座候、同年

十二月、 貫明様初上、何れも様伊東退治として日州

江御發向、同十一日 伊東義祐居城佐土原を打捨、豊

後之様出奔有之、其節茂嫡子刑部大輔忠堯罷立、忠元

儀者玖摩之相良義陽兼々大口之隙を被竊居候付、玖摩

堺御番為勤居由御座候、

一同六寅十月、豊後國主大友宗麟大軍召列、伊東氏を案内として新納院高城ニ押寄せ、地頭山田新助有信等山田新助有信を攻囲を攻圍候段、鹿兒島江相知、同十一月 貫明様初上、御兄弟様御救として 御出馬、同十二日右之城下ニて被大軍討破、耳川迄追撃被成、敵六萬人為被討取節茂、忠元儀者前条同断玖摩界御番ニ付、嫡子忠堯江御供為仕候て参陣不仕、出水領主嶋津義虎茂同断ニ而、肥後口警固ニ付出陣無御座、其比玖摩より日々大口を相窺申事故、忠元計策を以義虎并嫡子忠堯と平和泉地頭伊地知民部少輔重康等ニ致示談置、忠堯と重康を両手に相分け、何れ茂人衆召列山野之内ニ伏置、忠元釣手之人數召列、玖摩界迄出張候處、玖摩之物頭早牟田城之介人數引立追掛候付、忠元偽走、能時分取返候を見合、忠堯・重康茂一時に起合せ、右之城之介を中ニ取巻、主從七人為討取由、此方ニ者出水之伊地知左近將監重範蒙手疵、重康中間老人城之介より為被討由御座候、一同七卯春、此前より天草城主天草尾張守入道紹白より、先祖代 大岳様之御時、御隣好為申上一筋茂有之由ニ

而、忠元迄書中且彼地之来迎寺を使僧として申上趣有之候得共、出水之義虎と不和成天草ニ候間、為致和平可然旨忠元江被仰付、其頃来迎寺大口ニ為致滞留候事も有之、彼を以先天草方を申論置、左候而忠元并般若寺為御使出水江罷越、出水と天草を為致和平、其時分又大友宗麟行儀不宜、篠下ニ段々心替之者有之由相聞得、此御方江者將軍義昭公より大友退治ニ付御沙汰も被為蒙候得共、肥後路差支候ニ付、忠元鎌田寛栖と申談、達貴聞置、先義虎に申合、天草入道紹白・志岐彈正忠入道麟泉・上津浦上総介鎮貞・栖元上野介・大矢野某迎、其比嶋衆五人と相唱候城主を出水江招寄せ、忠元より篤与申論、五人共皆 御家江可致御奉公旨、降服為被仕由、是肥後國初而御領為相成開發にて、専肥後國御領忠元・寛栖等之勲功と申事ニ御座候、一同八辰五月、肥後相良領寶川内城者大口ニ致隣接、兼々此方之隙を相窺居候場所ニ御座候間、嫡子忠堯并早水金右衛門・山下伊賀・山下早左衛門・有村隼人等に平日忍申付置、菱刈・牛屎之人衆ニ而可攻取手段見立、

貫明様江成行申上、同十五日忠元本村十助・園田掃部

を案内にして進發仕、其折御使平田又次郎到着有之、

忠堯同伴にて城中に攻入、忠堯一番に鎧を合せ、又次

郎者討死仕、此時伊地知重康も其子小次郎重堅と平泉

衆中を召列出陣、野伏之手ニ罷在重堅等分捕にて敵三

人討取、蒙深疵何れも相働候故、城之主将東某茂右城

打捨退去仕、其勢ひに柵野城茂攻取、岩牟礼城茂捨去、

皆其御領ニ為相成由御座候、

一同年六月、是より以前肥後隈本城主城越前守親賢親政とも

入道一要、同國飽田・託磨託摩・河尻邊迄掠領候處、大友

宗麟軍衆を隈本に遣、海陸取塞、隈本難儀ニ付、町便町役

を以此御方江御加勢頼上越候ニ付、忠元等彼を降服為

仕度、松原式部左衛門与申者ニ而吉田洞庵迄申遣、洞

庵より一要江申含納得仕候付、貫明様江申上、先物先

見切見物として鎌田寛栖ニ人衆三百餘差添、隈本江被遣、人

氣之向背被聞合せ候処、相良義陽と阿蘇惟前之黨猶致

敵對、其餘一要扨者愈御奉公仕御奉公仕候ニ付、同十月忠元并、此月佐多常陸守

久政・河上三河守忠智等を加勢ニ被遣置、同十月忠元

并鎌田寛栖・伊集院抱節等ニ被仰付、隈本江差入、一

要并息男十郎太郎右京亮久基トモ越中守等ニ面談之上、老臣

共ニ茂聞合、其比阿蘇之旗下三船城主甲斐民部入道宗

運方ニ與黨為仕矢崎城を可相攻吟味之折柄、一要等之

取成にて宇都城主伯耆守顯孝も御味方仕、此等之

人衆にて同十五日矢崎城を攻囲、火を掛焼立候處、城

兵必死に防出、忠元為乘塵取追忍追忍付候者有之、丸田

久右衛門討取之、其外ニ茂久右衛門敵五人討取、何れ

茂粉骨相働候故、城主中村一太夫自殺仕、翌日又網田

城に押寄攻圍、是ハ城主中村二太夫和降を願、阿蘇家

之様立退、両城共御領相成、然處同國合子城主合子藏合志

人親重等大友方ニ而敵對仕候間、同十一月忠元・抱節

等何れ茂軍衆を引列、彼表江討入、窪田千町致放火引

退折柄、合子方之大将天津山城守四千計にて追駈、三

百計集居候隈本勢ニ討掛、及敗走候間、忠元・忠堯大

口之軍衆ニ加下知、其餘之大将佐多氏等何れも相働、

右之越前守以下敵百三拾餘人討取、就中抱節者役人大

津源左衛門と申者討取、左候而皆如隈本引取、於町口

勝吐氣取行ひ、同十二月何茂開陣ニ而為罷帰由御座候、  
一同九巳八月、相良義陽此前ニ者北原被為退治候節、後

詰いたし、又菱刈被為攻砌茂加勢を遣、又耳川御出陣

之留主ニ者大口を伺ひ、此節又隈本等之番手共舟路不

自由付、芦北邊陸路之相談も許容無之、御懸之思召、旁御懇思召、

此月 貫明様初上、御兄弟様三州大軍被召列御攻伐

被遊、同十七日先陣芦北ニ打入、同十八日 貫明様御

出馬、大口小川内巧ガ尾に暫御陳所被相建、同十九日

先勢を以水俣城被為取圍、其節忠元儀御談合衆ニて大

口人衆召列、先陣中書家久様御手付被在、罷在日夜戦功相

勵候内、寄手と城中連歌之贈答有之、

おちて皆又秋風の木の葉かな 薩摩方瀧聞美作守

よせてハしつむ浦なミの月 相良方奥越前守 イ奥野

真砂路をとひ立馬の峯越て 薩摩方新納武藏守忠元

右通にて、其後者城中より句茂不得仕由 此事他國ニも申

有之、秋風にミなまた落る木の葉哉、武藏、よせてはしつむ浦波の

月、宗雲と相見得、且水俣の城主茂名字失念、入道して宗雲と為申

由書記候得共、勝目聞書江右通相見得申候、左候而義陽城中

間、三舟の甲斐宗運と聞誤為申ニ可有御座候、  
之難儀を見兼、芦北七浦之内水俣城・津奈木城・湯浦

城・佐敷城・市之瀬迄五ヶ所進上ニて致和降度、息男

四郎太郎等兄弟を人質に差出被相願、同廿日困茂被為

解、同廿六日義陽佐敷江参謁、貫明様被為逢、此時

勝吐氣之儀ハ、忠堯と川田駿河守義朗ニ被仰付為相勤

由御座候、

一同十月二月、義陽右通降服被仕候得共、證據未相知候

間、甲斐宗運江一戦可仕旨、此御方江被申上置、人衆

召列三船城江發向候而、堅志田園ヶ原ニ而被屯居候処、

宗運二男甲斐相模守親乘与風忍寄、義陽を為討取由、

右ニ付八代之騒動無申計、則老臣共より大口迄成行申

越、忠元直ニ大口・羽月・曾木・馬越・平和泉・本城・

山野・市山・湯尾九か所之地頭衆中を召列、不移時日

八代ニ打入、其佩城を受取在番為仕由、左候處八代者

本宇都領ニ而于今望も有之、又甲斐宗運茂望を被掛場

所ニ候間、八代両城・樋脇城・関之城・谷山城・高塚

等、皆薩摩より御番可然旨、八代古老養田信濃守・東

宗芳・犬童美作守等衆中一統より再三被申上趣有之、

其節より此御方御知行相成、八代地頭之儀者 松齡様

又者平田美濃守光宗江被仰付候得共、皆御断ニ而、伊集院右衛門太夫忠棟江後者被仰付、同十五年迄為被相勤由御座候、

一 同年十二月、忠元吉利下總守忠澄・伊集院美作守久宣と肥後表江在番仕候節、大口衆有村隼人佐忠正・蘭田丹後守等江申付、三城衆伊地知丹後守重政・逆瀬川豊前兵衛武安等与日平城を三四夜相忍せ、同十日忍落、翌十一日安楽城者打捨退去仕候間、兩城共御領為相成由御座候、此年冬合子城主合子藏人親重・三舟城主甲斐宗運●限本・隈庄城主甲斐上総介・有馬城主有馬修理大夫鎮貴・筑後國田尻城主田尻中務太輔鑑種等御旗下為被罷出由御座候、

一同十一未五月、是より以前龍造寺隆信、有馬領之島原深江を乗取候ニ付、有馬鎮貴此御方江御加勢被申上候処、此月六日深江・安徳之兩城主茂御味方仕度申上越、其時分忠元には病氣ニ而、忠堯井川上左京亮忠堅に被仰付、人衆召列有馬江罷渡、安徳城江致在番候処、深江城ハ謀叛にて、却而此御方之隙を窺候間、同六月十

三日忠堯等押寄相働、終戦死仕候、時三拾歳、貫明様被聞召上、則懸命之地として大口青木村之内江寺地拝領被仰付、菩提所として泉徳寺と申寺を建立仕置、今以忝反四畦廿八歩之御免地ニ御座候、同十月七日忠元并諸軍衆堅志田町ニ打入、破却為仕由御座候、

一同十二申三月、貫明様佐敷ニ被成御座、有馬方救として中書家久様ニ人衆三千被召付、有馬江渡海にて、鎮貴と御相談之上嶋原城被為攻圍、隆信六萬之大軍にて致後攻候時分、中書様者別に五百之人衆被召列、子息●又四郎又七郎忠豊惣勢被召列、忠元江後見被仰付、此月廿四日於嶋原被遂合戦、乱軍ニ紛入川上忠堅隆信与戦ひ、其首を討取、肥前方別而及敗北、其節忠元者右通忠豊ニ付添加下知、敵三千餘討取候而、大口衆之儀者二男弥太右衛門忠増召列加下知、自身太刀始をもいたし、大口衆ニ者白坂駿河入道など殊ニ相働、鎧を合せ有名之士三拾六人討取、切捨者不知数由、左候而其場江武藏戰場与高札迄相立、若相疑人於有之者可承与為書置由候得共、批判仕者無之由、右ニ付森山・三重城・大

野・平良・神代・仮福六ヶ所御領為相成由、左候而同  
年秋忠元江肥後限府地頭職被仰付、勿論大口地頭者本  
之通ニ兼務仕、同十月境目之物見可仕旨、忠元并伊集  
院下野守久治・山田新助有信・猿渡越中守ニ被仰付、  
同八日何れ茂人衆召列三池ニ打入、高瀬町ニ陣を取、  
在郷諸所打破、此邊茂降參為仕由御座候、

一同十三酉三月、是より以前嶋津出羽守忠明八代義天孫  
羽守有久御子に大口三百五拾町一所之地ニ被下置候時分、菱

刈大和守重續等忠明之居城に押寄討取、其前年忠明之  
子次郎四郎明久を大嶋村に討取、兩靈を西原八幡と同  
社ニ奉崇為有之由候処、段々奇瑞御座候由ニ而、

貫明様より忠元江被仰付、西原より神躰被為相分、此  
月二日大嶋村戦死之跡に奉崇移為申由、則今之若宮八  
幡ニ御座候、

一同年八月、松齡様肥後江御出陣、忠元茂罷立、同十

一月阿蘇旗下之限庄に押寄せ及合戦、敵五百百被討取、

同十三日甲佐・堅志田之兩城「攻」ニも帰寄せ抽戦功候処、

同十六日隈庄城主甲斐上総介者勿論、矢部城主阿蘇惟

前迄茂降服為仕由、然處其以前相叛キ罷在候合子城主  
合子藏人親重茂降參、如此肥後國中段々入御手候謀之  
初ハ、横島ニ加藤上野と申者致敵對砌、忠元何角申論、  
大口に為列帰置事有之、夫より漸々降參不仕者無之様  
為罷成由、左候而同九月、松齡様御帰陣被為在、忠元  
儀者在陣仕罷居候処、同十一月六日從、貫明様御感状  
被成下、此年三船地頭職も被仰付、前文同様兼務仕、

暫大口江罷帰居候処、其比高森城内々大友方ニ相付候  
事相知れ、稲留新助長辰・阿蘇役人仁田水左衛門御与を人  
質為可取置、高森江差越、却而仁田被捕得候故、長辰  
者漸為遁帰由、且津守地頭伊集院肥前守久春留守之際  
を伺ひ、同十二月津守城を為乗取事、大口江注進御為申来由御座候、為申  
来由御座候、

一同十四戌正月七日、右ニ付忠元市来下総守と家来立本  
玄蕃等召列、大口打立、九日三船江參着、則致手分ケ

家来式人を板梨「坂」ニ遣、新納四郎左衛門御四郎左衛門忠秀  
入道・大口衆

有村隼人・藪田丹後守御隼人忠正御有田を矢部に遣、野心之者共何れ茂

加成敗、其時野尻城に陰謀之聞得有之、新納慶雲と有

村隼人忠正を差遣、城主之親類を人質に取置、左候而

此月廿三日高森城可攻崩日取吟味之節、伯圍様御日

柄不宜と為申人茂御座候由、然共 伯圍様者誠に軍神

御座候間、却而御擁護社可有之与忠元より申論、終其

日ニ一決ニ而為被攻取由御座候、

一同年十月、大友家之儀、此前ニ者伊東方救として日州

高城を取囲、却而被及敗北、今又大閤ニ訴へ、借其力

薩摩へ可討入企被仕由、就而者被滅置可然与の御吟味

中に、豊後住人入田丹波入道宗和・志賀入道道益等近

隣之士と致内談、此御方江頼上、却而怨を大友方ニ相

報度所存有之由、八代住人養田信濃守・高橋駿河守等

承付、此御方江御注進申上、貫明様御感悦思召、則

忠元江何卒可廻知計旨被仰付、直ニ仙鏡坊与申山伏を

入田城ニ差遣、一先聞合させ、其後忠元家来中馬源之

丞と三船住人勘丞と申者を右之城中に差遣、猶又令探

聞之、自彼方も吉良甲斐守と阿南勘解由とを八代迄差

上、忠元取成ニ而 松齡様江御目見迄被仰付、左候上

榎木右京亮と家来中馬源之丞を志賀城に遣、右之實否

を聞合為仕、自彼方も大塚右馬助・新野新助を差上、

弥御奉公可仕旨申上、盟約之證書等被為取替、左候得

共入田方夫程真實之手形見得兼候付、又候大口衆有村

隼人佐忠正に檢使平田豊前守宗祇・濱田民部左衛門經

重を被差添、入田城ニ被遣、其上 松齡様より忠元江

被仰付、兵道之作法共取行ひ、野村與三右衛門と忠元

家来尾崎彦兵衛・中馬源之丞を志賀城に差遣、右秘法

之釘を為埋置、左候而此月中旬 貫明様八ヶ國之大軍

を被為催置、豊後江 御發向、松齡様 中書様先陣

之大將として、肥後と日向之兩路より御討入、忠元儀

者 松齡様ニ相付、肥後路より豊後之南部に致乱入候

處、志賀・入田之兩氏茂千餘之兵を召列内應仕候間、

此等を案内として、同十二月廿一日高城を攻取、玃珠

表ニ打入、其比忠元病氣差起候故、二男弥、太右衛門忠

増ニ人数相付、平田豊前守宗祇等と先に為致進發候處、

權現城・城ヶ尾・那女利城等に押寄、皆為攻取由、今

一手ハ大口衆有村隼人忠正ニ人数三拾六人相付、房ヶ

畑城・舟ヶ比良城に押寄せ、皆共攻取、小嶋刑部左



衛門等戰死仕、此手茂四五ヶ所為攻取由、左候而房ヶ  
畑ハ隼人江在番為仕置、其年者 貫明様ニ茂於日州塩  
見城一説御超歳、 松齡様者朽網城、 中書様者府内  
ニて新年為被迎由御座候、

一(ハリ紙)『天正十五云々』  
同十五亥正月廿六日、 貫明様野神城江御陣を被為移、

其比城主計降服ニ而、志岐之黨類不相隨者打込罷在、

忠元ニ被仰付、阿蘇之人衆と攻寄せ、敵餘多討取御番  
為仕由、同三月大關秀吉公大軍ニて肥後口より、舍弟

羽柴秀長ハ豊後口より被攻入事相聞得、同十二日

松齡様御引陣之御相談として府内城に被為入、 松齡

様者日向路より、金吾歳久様者肥後路より被為曳ニ相

決、忠元茂其手ニ相付、同十五日府内打立、同廿日北

里ニ到着、然處桂神祇忠助・大野七郎久高・樺山太郎

二郎・玖麻衆犬童美作守休意并子稲留將監等、致在番

候坂無城に、岡之志賀氏等豊後衆と押寄せ致後切事承

付、忠元并町田出羽守久倍・伊集院肥前守久春・其子

源左衛門等相談、忠元家臣田中藏之丞等を聞合として

忍ニ遣、同廿五日北里出立、夜中ニ押寄せ、同廿六日

曉於宮之路遂合戦、敵七百餘人討取、同四月五日忠元

右之衆と坂中出立、肥後之様ニ立退、忠元ハ隈本城、

新納右衛門久饒者合子城、伊集院久春ハ津守城、右馬

頭征久者八代城に打入、夫より三船城相見廻引取折柄、

松浦筑前守堅志田衆と谷山城より付ヶ送候間、忠為乘

馬を引返し、久春等と人衆に加下知、谷山城ニ切入、

何れ茂碎手、松浦者山中に遁隠、又尾牟田にて肥前衆

と茂合戦、是亦討破、八代之内関之城ニ到着、同十七

日忠元桂神祇と花見に事寄、八代地下之子共を人質に

取付、同十八日月之出に八代出立、阿世知山より右之

質人共者差返、同十九日忠元等之立跡に京勢為討入由、

左候得共同廿日無事ニ玖麻江到着、爰ニ而深水某心替

と承、忠元即人衆三百人を召列、人吉城に差越及直談

候処、表裏無之、玖麻川迄堅固ニ送来別れ為申由、同

廿一日忠元者大口城に帰着、同廿三日桂神祇茂平佐城

に帰着、各籠城之手當仕居候處、 太閤者秀長於日向

口為被得勝利事最早被為聞出、出水口より被為入、出

水領主又太郎忠辰一言茂此御方江不奉伺、存外川内迄

致案内、同廿五日泰平寺ニ御着陣、則小西撰津守行長・

九鬼大隅守嘉隆・脇坂中務少輔太輔安治等を將として、同

廿八日平佐城ニ押寄せ被攻囲、神祇忠助三百餘之人衆

ニ加下知拒之、城中に致内應者忒三人糺付、悉致誅伐、

志を皆一致にして致防戦候処、日向之御陣所より致下

城候様被仰下、同廿九日忠助小姓海老原市十郎・大田

治部左衛門を人質として、九鬼・脇坂之陣所に差出、

太閤より忠助を泰平寺ニ被召出、御目見且脇差一腰拜

領為被仰付由、左候処日向路の方へ、四月六日秀長忒

拾萬騎ニ而高城・高鍋之間ニ被討入、高城地頭山田新

助有信等堅固ニ城守いたし罷在、然處京勢之先陣宮部

善祥坊等、一萬五千騎ニ而根白坂ニ陣屋相立、同十七

日 貫明様 松齡様忒萬餘騎ニて都於郡より御出馬、

於根白坂御合戦利あらず、三郎次郎忠憐等三百餘人戦

死ニ付、都於郡迄御退陣候處、高野木食上人興山と一

色駿河守昭秀等御陣江来謁、和平被相勸メニ付、御許

容被為在、同廿一日伊集院右衛門太夫忠棟と平野六郎

左衛門政友を人質として、木食上人に被付遣、其時山

新助有信 田新助も高城より致下城、則人質として山田千代太郎

後者民部少輔有榮 喜入式部少輔久道・平田太郎左衛門増宗・

本田内藏允親孝等を桑山修理亮陣所に被遣、暫御安堵

之思召ニ候處、同五月二日比 太閤川内江為被討入事

初而被聞召上、俄ニ北郷一雲・喜入撰津守季久・伊集

院下野守久治・本田下野守親貞・鎌田出雲守政近等を

御前江被召寄せ、一大事之御吟味ニ而、一雲者是非在

所庄内江御越被遂一戦御開運可然与遮而被申上、季久・

政近・親貞等者、太閤川内迄於被為下向者最早大勢鹿

児島迄為討入筈、今夜中必御出立、太閤之前ニ御差出

御切腹可然、秀長之和平茂心中難計と為知候方茂有之、

智略ニ被為乘候而者残念之至と申上、其晚御出立、

貫明様者鹿児嶋江 松齡様者飯野江被為帰、北郷一雲

茂野尻迄者御供ニ而、返々庄内江御光越被相願候得共、

御聞入不被為在、霧嶋越にて鹿児島江御帰城、即川内

江御差出と聞得候得者、御供之軍衆も在所ノニ罷越、

御供衆頓与無之、御老中喜入季久・町田久倍・伊集院

久治等諸士纒七拾人計被召列、同六日伊集院迄御越、

御母堂様御寺雪窓院ニ而御剃髮、龍伯様其時分ハ、日述様共

御改名、左候而御出被遊茂、夫丸等走失せ、御輿可昇立

人茂不罷居、伊集院衆安藤左近・春口土佐守・中馬十

郎左衛門・市来豊前守・大迫佐渡守・上村宮内左衛門・

河添千助・小田原但馬守等御輿を奉昇、同廿八日泰平

寺江御參謁、佐々陸奥守成政・堀左衛門佐秀政等取成

ニ而、思召之外被為通様被 仰出、御僧服被為召二王

門被為入候處、番人御供を為差留由、然共御太刀持川

上左近將監久辰是非と申、無理ニ為罷通由、然者季久・

久倍・久治等者可罷通旨被仰出、皆罷通、貫明様脱白

砂ニ御差出御拜伏候處、太閤よりは江ノと御意、

縁煩迄被為進候時、義久慰敷之至、腰之廻淋敷迎、御

自身被為帶候御腰物大小備前包平三条赤近手自御拔被為賜之、

且御小袖茂御拜領、左候而御相立、其時此酒可被召

上哉御疑之心被浮候処、太閤疾二其機被為察、盃

事何そ酒を不及盛と御意有之、別而 貫明様茂御感服

為被遊御事之由、其上翌九日薩摩薩摩國一國之御朱印茂御頂

戴、其節御供被仕候喜入季久等茂御前江被召出、何れ

も御小袖一重ツ、拜領、且御手自御茶迄被下、汝等者

此度義久於致切腹者供ニ可切与為存欵、義久彼等ニ目

を能可被懸、我者左様之節可腹切者一人も無之と、殊

之外御感為被成由、尤此時分御老中伊集院右衛門太夫

忠棟・平田美濃守光宗・本田下野守親貞・嶋津圖書頭

忠長等も追々御目見為被仰付由、又兵道役者野村兵部

少輔良綱・御陣僧長寿院盛淳・御右筆八木越後守昌信

等も為被召列由、左候而石田治部少輔三成鹿兒嶋ニ差

入、龜寿様人質御差出候様被為催促、直ニ京衆佐々孫

十郎・平塚三郎兵衛を御迎ニ被遣、依之同十五日日本田

下野入道・平野丹後入道等御供ニ而御出立、伊集院江

御一宿、同十七日泰平寺ニ御參謁、御拜領物等有之、

直ニ太閤より伊地知右京亮重春・原田伊豫守・蓑輪

丹波守重（ト）・長谷場筑後守純辰等江御惟子一宛拜領ニ

而、大坂迄之御供被仰付、當日御乗船、脇坂安治船奉

行として川内御出船、本田平野等者御暇にて奉別、不

及落涙者無御座由、左候而翌十八日 太閤泰平寺より

平佐城に御陣を被為移、夫より山崎城に被為入、又鶴

田城に御陣を被移、三日程御滞宿、是より以前 松齡様ハ五月初方日向路より飯野に御帰城被為在、金吾様御方と籠城之手配等被仰通、入来院要嶮之城候間、典厩征久被差籠度、真幸・菱刈者日州筋京衆之往還ニも候間、一入手強可被相防御手當可為肝要、祢答院者金吾堅固に可持對与之事ハ乍承、一所計ニ而ハ少勢候半、伊集院肥前守等被差添可然、飯野ハ随分手強踏答可申、乍然埋草杯ニ而於攻寄者、城惡候而可及大事、庄内方江重疊被為頼越事可為第一、今迄ハ味方と相聞得候ま、彼是御賢慮可目出度、忠棟者從日州出船之由、何方ニ堪忍候哉、預示度認掛候折ニ使罷帰、関白様江御差出之筈と承、是ハ誠に一大事、就而者福智三河守欽石田治部少輔之間一人質ニ被為留置、御指出候様御調儀可為肝要、返々茂一大事ニ候条、御指出不被為在内ニ能ク御立願可為肝要、尤此度日州於御安堵者、宮崎又者高原迄茂霧嶋江可有御拜進御祈念可被為在儀肝要思召趣之御披露状、同七日 松齡様飯野より本田下野守迄被遣置、其後右次第御和平被為濟候事御聞及、同十

九日松齡様ニ茂野尻城に御差出、秀長ニ御面謁、即人質として赤塚三右衛門佐・谷田寛右衛門を桑山修理亮陣屋江被遣置、左候而 太閤鶴田城に御留之時分、同廿六日比 一唯様と御同伴ニ而御参<sup>上</sup>、太閤御目見相濟、此日大隅國御拝領、其内肝付一郡者忠棟無親疎被思召、最前より為被下置趣之御朱印御頂戴、一唯様ニ者諸縣郡御拝領之御朱印被為賜之、自其御陣を曾木城に被為移、此時宮之城領主金吾歳久様案内を被為出、太閤之大軍を九尾之嶮難人馬も難通山路ニ導参候故、乍漸曾木に御着城、五ヶ日程御滞陣、然處忠元儀者此より以前大口に帰城ニ而、菱刈表伊地知備後守重康・同子民部少輔重堅・木脇三右衛門祐吉等、其外大軍之軍衆者不及申、庄内表又者志布志瀧聞越後守宗清・土持大膳亮綱家・二階堂阿波守<sup>ツバサ</sup>等、有志衆に申通、大口に楯籠可遂防戦手配等疾に相備置、大軍之京勢数月之遠陣、兵糧盡果候事を能聞取、忠元使者を以米一俵を細川幽斎陣屋に差贈、京勢糧迫及困疲と承及、必是を被食せ、我大口城に押寄せ被勵忠戦度、

随分御會尺可仕と為申遣由、然者幽齋を初京勢一統感  
激仕、⑧即太閤之茂被申上、太閤迄被申上、太閤茂忠元之大膽ニ者別

而為被為感事之由、左候處伊集院忠棟石田三成を致案

内、菱刈に差向、本城より大口に致推參間、忠元加下

知鉄砲打掛為防候処、⑨忠棟を不見知哉、汝等忠棟を不見知哉、暫相止候

様申參候故、⑩致面調、出迎及面調、然者貫明様・松齡様最早

御和陸被遊、自分を人質に初發より被差出置、龜壽

様と又一郎様茂御質として御差出被遊候間、必忠元

茂下城可仕旨為承届候得共、忠元合点不仕、此國中一

箭茂相防者無之ハ無男子も同然、夫故吾京勢糧絶及難⑪辰

儀事聞取居候間、城下に寄せ付一戰討勝事胸中ニ有之

候間、必々以此旨御吳見可被申と、防戰一圖に相定、⑫一途

中々承引不仕、忠棟・三成茂難及力ニ一先引去候處、⑬引取候處、

同廿四日大閤茂御馬を被為出、先勢曾木之天堂ガ尾

迄着陣、洪水之故川者未渡候砌、貫明様よりハ新納

右衛門佐久饒、松齡様よりハ伊東右衛門佐を以、度

々御下知被為在、其趣者御人質様京方ニ被為出候上於

致弓箭者、即可為御敵被思召旨被仰出、忠元も此上ハ

不及力、誠に口惜乍存出頭に相定、一味之衆ニも成行

申越置、自其大口之成就寺に至り、致剃髮拙齋と改名

仕、洪水にて馬越之様相廻り、天堂ガ尾之陳屋に參謁

仕、其時秉燭之比候得共、即太閤御前に被召出拜伏

仕候処、太閤御直ニ武藏々此上茂可敵我哉と被仰

掛、忠元畏り、主人義久さへ思立候者幾度茂敵對可仕、

乍然如此御和陸為仕上者、義久も表裏仕ましと尊答仕

候得者、太閤別而御感賞被為在、兼而被聞召及候忠

勇ニ少茂相違無之旨御意ニ而、御長刀一柄⑭一振無銘鞘柄梨地

被下之、忠元拜伏乍仕拜戴仕、面を拳不申由、然處何

卒忠元顔色を御覽被遊度思召、又々御道服一領被成下

候得共、是亦拜伏之成ニ而拜領仕、始終面を不孝由、

其節太閤⑮一説幽齋御發句是ハ御酒被下候時共申説御座候、

鼻のあたりに松むしそなく

忠元打笑、其時初而頭を挙て

上ひけをちんちろりんとひねりあげ

と尊答仕候得者、⑯猶々御感心為被遊由、御感為被遊由、然処其夜直ニ天堂ケ

尾御出立、羽月・園田を被為通、其節も忠元騎馬にて

罷出、御通筋より遙敷町之所に相扣罷在候処、相扣罷候処 太閤御覽被為在、騎馬之士を御使ニ而被召呼ニ付、忠元即

下馬仕、御輿之傍に拜跪仕候處、御手自被為持候御

扇子表總金龜桐裏金砂龜菊拜領被仰付、謹而頂戴仕、御近士ニ相付

右之御禮且御帛鞍を為奉賀由、此年忠元六拾貳歲ニ御

座候、今以右之品品々内藏方江多者内藏方江格護仕居申候、

右之通取しらへ、忠元大口地頭職四拾餘年相勤居

候内ニ而、天正十五年迄者纔拾九年之勤勞御座候、

二御座候此以後八十五歲病死仕迄之勤功、猶外ニ式拾三年分相殘、其事長ク、數冊之旧記文書等に

致散見候事蹟、其年急ニ埒明不申也拾寄せ、彼此考合せ書

綴申事御座候得者、埒明不申也、明日御出立無

之内に右脉之綴方難調御座候間、先しらへ濟候分

差上置、跡者追々書綴、出来次第後便より差登せ候様可仕候間、

差上候間、左様思召御覽可被下候得者、追々書綴

左様思召、此分御覽被置可被下候、以上、  
後便より差上候様可仕候、以上、

寅十二月廿三日

新納弥太右衛門

▽海老原宗之丞様△

一同年右様忠元奉送候以後、太閤者大口止神より平泉・

上場を被為通、肥後之様御引陣有之、其比連歌之

宗匠紹巴書述為申記行に、新納忠元与云鬼武者あり、

吾領内に乱入者あらハ大口に食んとすと書置、餘程其

時代より名高く為申觸事之由、左候而

貫明様茂其年六月十五日鹿兒嶋御發駕ニ而御上洛被遊、

御案内者者木食上人被相勤、同十六日日共大口小河内

に御着到、忠元儀者前以より御中途迄罷出奉迎之、直

御供仕候処、則御前五被召出、此度之忠節寔に無比

類被思召上旨、御直ニ奉蒙御感賞、其上剃髮名も為

舟と拜領為被仰付由、自其以前忠元事ハ御一族其外大

身衆同前ニ人質可差出旨太閤より被仰出、二男弥太

右衛門忠増を差出置候處、貫明様御供ニ被召列上洛

仕、同年九月二日初而聚案江聚案江貫明様御登城御登城被遊砌茂御供為仕

由、但其比迄者左京亮と申時分ニ御座候、忠増茂左京亮与

一同年十月、此夏太閤御開陳之節、佐々陸奥守成政江

肥後一國被成下、隈本城に罷居、其外國人之城地等持

衆茂不少由候処、成政檢地申付、右之面ニ領地茂不渡、加之自分妻之弟相良方江者八代七浦を令配分、其外百姓等迄茂非分申付、亦大坂江御届も不申上、隈部但馬守親泰居城に取懸、旁無道ニ付、其子式部太輔等山鹿城ニ走入、城主宇動左衛門其外三船城主甲斐掃部助并其弟甲斐相模守・同弟林兵部太輔・隈部城主甲斐上総介等之歴々多者致一揆、隈本ニ取懸、成政及難儀事 太閤被聞召及、諸候江上使且軍衆可被仰付候得共、先為見聞毛利右衛門頭輝元等被差下ニ付、貫明様御供ニ而、在洛候伊集院忠棟入道幸侃茂同様被差下、就夫肥後表之儀忠元等存分も可被聞召、旁為見聞細事忠元江被仰遣候間、忠元事茂能々示談仕、何篇 松齡様御下知次第可相働旨、段々成政罪科之次第茂被為書、此月廿一日 太閤御朱印并長岡兵部入道玄旨・石田治部少輔三成之奉書相付、皆武藏守宛にして被成下、依之 松齡様則忠元江先手之大方大將被仰付、人衆召列、肥後表江出陣仕候処、相良方八代七浦を相固メ、通路無之、彼是仕内ニ安藝之安國寺惠瓊、右之一乱に隈本及

事候ニ付、  
難儀事聞付、筑後より為被駈着風聞傳承、同十一月七

日忠元より使僧を以致書問趣有之、同廿六日惠瓊返翰

南之関に打入、隈本通路切明、成政無恙候間、和仁邊

春等桶箆候一城取巻、五日中ニ者可及落去、次ニ者山

鹿宇動城ニ茂可取詰、京都御下知於有之者、必軍衆差

出、隈本ニ可有加勢旨武藏守宛ニ而被申遣、右ニ付同

十二月廿日 松齡様飯野より大口迄御出馬ニ而、段々

御下知為被遊由御座候、

一同十六子正月十三日、貫明様御在洛、忠元江御直書

并御扇子尅對・御珠数一連、兼而致信心候間祈願可仕

旨を以被成下、此月中旬 太閤肥後一揆ニ付、猶又淺

野彈正少弼長吉・生駒雅楽頭近親・蜂須賀阿波守家政・

戸田民部少輔勝隆・福島左衛門太夫正則・加藤主計頭

清正・毛利尅岐守元成・黒田勘解由孝主・小西撰津守

行長ニ上使被仰付、都合式三万之軍衆召列八代ニ被討

入、山鹿城主宇動右衛門佐・三船城主甲斐掃部助兄弟・

隈庄城主甲斐上総介、其外田代宗傳・津守光永・木山

左近將監・隈部式部太輔内空閑某下野守等、無御下知

ニ成政を可討与企候者共悉被為誅伐、其比宇土城主伯  
 著伯著守顯孝之弟顯廣ハ出水江遁參、薩摩守忠辰ニ被  
 仰付被為討之、左候而成政儀者右之上使ニも不構、惠  
 瓊と同伴上洛有之、<sup>其化</sup>其他歴々多者遁去、國中及平均候  
 間、忠元等茂人衆召列大口に罷帰、依之同二月 松齡  
 様茂大口より御帰城、右ニ付同五日忠元より長岡玄旨・  
 石田三成迄成行之御届申上候処、同四月廿三日玄旨・  
 三成返翰ニ而肥後表江人数被召列、 松齡様御働、殊  
 ニ忠元先手為仕故一國平均いたし、御手柄之段褒詞等  
 被申遣、同廿六日 松齡様飯野御立御上洛、忠元三ノ  
 山<sup>今之</sup>迄奉送之、同五月十五日肥後表<sup>上使</sup>上使衆淺野長吉・  
 加藤清正・福嶋正則・小西行長・黒田孝主・毛利元成・  
 戸田勝隆・蜂須賀家政・生駒近親連判ヲ以、肥後之悪  
 徒遁去候者共御領内相改、於罷居者加成敗注進可仕旨、  
 武蔵守宛ニして被仰遣、左候而同<sup>同</sup>壬五月十四日成政者  
 右旁之罪科ニ而於摂州尼崎被為誅伐、其比肥後より北  
 里某<sup>大藏太輔事</sup>与申者、大口江<sup>忍</sup>隠居罷在、忠元申上様宜  
 敷茂候哉、本領安堵ニ而肥後江為被召帰由御座候、

一 同年二月廿八日、筑前國主小早川左衛門佐隆景より年  
 頭祝詞として、太刀・馬代三百疋忠元江差贈、隣國ニ  
 候間可預入魂旨懇書被遣、同四月廿一日 貫明様御在  
 洛永々之御事ニて、忠元笑止ニ奉存、為可奉伺御機嫌  
 使僧差立、細川幽齋ニ茂右次第ニ候間、何卒早御暇被  
 為賜向之取成頼遣、且忠増御暇も同様頼遣候処、同五  
 月十日 貫明様より、御國之儀 松齡様も御立留守ニ  
 候間、何篇忠元御家老中江も申談、堅固ニ相勤候様御  
 頼被遊旨御返翰被成下、同十一日幽齋よりも、長々御  
 在洛、乍御窮屈國家之御為候間、 松齡様御上洛之刻  
 三成申談可取計、次ニ御息在京茂國主御為ニ候、談合  
 之上御取成旁油断不被致趣之返翰忠元江被遣、同六月  
 松齡様大坂御着、四日 太閤御目見、十五日侍從御任  
 官、七月廿六日羽柴称号御拜領、八月三日、去夏  
 一 唯様御拜領之諸縣郡御朱印も又候 松齡様江御頂戴、  
 其以前大口者 貫明様御居城に可被為築旨、 太閤被  
 仰出置、 松齡様御立前、御家老中又者忠元ニ茂御普  
 請之事被仰付置<sup>御立寄</sup>、<sup>御普</sup>請之事共被仰付置旁ニ付、同七日從 松齡様忠元江御



賜書を以、勤番者勿論菱刈兩院ニ申渡、御修築之事共御頼被為越、且右之彼是并忠増事迄茂段々難有蒙御吹聴為申由、右ニ付忠元丸田仲右衛門等主取にして、兩院之人衆を以、雨晴無構大口御城普請出精為仕由御座候、同九月三日 貫明様京都御立、大坂江御着、八日忠元江御賜書を以、御國元御仕向且真幸境之儀共狼成事共無之様堅可申付、若致油断於事仕出者拙者越度ニ可罷成旨為被仰付由、同十三日從 松齡様茂伊勢彌九郎貞昌忠元外孫被差下、忠元江御賜書を以 貫明様御下向之御祝儀被仰下、且飯野御留守ニ忠元節々見廻上、諸見舞、且諸所公役等所公役等天下之御法通入念申付候様、別而御頼被思召外無他事旨被仰付、同十月四日 貫明様細嶋江御着船十四日鹿兒島御内ニ 龜寿様御同道ニ而御帰着、去夏皆様俄ニ被為登、諸人一統笑止ニ奉待上罷在候處、御機嫌能御下向被遊候御事、上下萬人歛持仕、皆共為奉恭賀由、其比大口を御居城ニ可被遊管与心得、忠元等以前より御普請入精大形周備為仕由、左候得共 貫明様不被為好無御移由、同十一月十日 松齡様より又御

賜書を以、諸縣郡之内ニ而相應成城地を見立、御父子様御居城ニ被遊度思召候間、忠元乍辛勞御家老上并次郎左衛門秀秋と諸城見合、宜方可申上旨御頼思召旨被仰付、同十二日又御賜書を以、諸縣ニ移衆之配當茂、忠元飯野江参越可加下知旨御頼被為越、彼此馳廻御用相勤、勿論御居城之儀、栗野城を為奉伺由御座候、同十一同十七日正月十七日、從 貫明様忠元江御使書を以、御嘉利年首之御嘉詞且大口方之消息可被聞召上、倍賢慮を用ひ候様被仰付、様被仰付、同晦日從 松齡様茂御賀札忠元江被成下、一唯様茂忠増等質人之御暇被為盡御手不相濟、左候処右馬頭征久以久者、石田家老安宅三郎兵衛取成ニ而相濟、不被得其意御事候得共、直ニ御朱印為被下人ニ而被任公儀之由、大口御城普請之儀、去夏以來入精肝煎致周備候御褒詞御下國之上可被仰謝、併 貫明様ニハ不被為好哉ニ被聞召上候由、又飯野御留守ニ節々見廻上、大慶被思召上、弥御頼思召旨段々難有為被仰付由御座候、一同年五月廿四日、此前 大關西征之時分より、伊集院幸侃挾野心、京方ニ内應仕、一箭も防戦不仕、表向者

忠義之躰ニ馳廻、和降之御取成仕、其身質人として敵陳ニ馳入、御三殿様より却而先に肝付一郡を致拜領、其上舎弟御舍弟家久様迄茂京方ニ構讒殺之、漸々寡權威、其子源次郎忠真に御家を為継度心底有之事、貫明様松齡様疾に御覽付被為在、諸人見及候茂乍有之、致言上者一人も無之、結句幸侃ニ追從申輩数多ニ而、容易ニ御内談難被洩、其比志嶋紀伊守國貞・鎌田出雲守政近兩人前後を不願言上為被仕由、然処從 御兩殿様忠元等江被仰知せ、御内密為被仰付儀共有之、追々無二之忠臣被為吟味、第一諸人幸侃江合躰不仕様密々可廻計策旨、三ヶ条之御内用被仰付、尤幸侃一味之方ニ洩聞得候而者不相成事ニて、前書ニ茂一ヶ条被仰聞、愚意申上候儀と書出、其事ハ態与不書載由、此日忠元并本田因幡守正親・八木越後守嘉竺・比志嶋紀伊守國貞・鎌田出雲守政近・伊地知解由左衛門重元・宗員・嶋津圖書頭忠長・阿多掃部介忠辰・平田左馬介増宗・平田左近將監藏宗・伊地知伯耆入道増也・平田豊前守宗位・村田雅榮助經宣・吉岡藏人久延・山田越前入道

理安・稻留新介長辰・伊勢雅榮入道任世・川上源五郎久辰・平田美濃入道舜蘆、式拾人連判之起請文奉呈上、則 貫明様并 松齡様茂御袖判迄為被加置由、右ニ付同六月廿六日 貫明様より一ヶ条被仰出候處、懇切之返答殊ニ墨付差上、乍案中御頼母數御喜悅被思召上、弥向後無別儀可抽忠節趣之御感状被成下、同八月廿四日鹿兒島 御發駕、九月廿四日大坂 御着、左候而其秋 松齡様御下向ニ而、飯野御城より栗野御城ニ為被為移由御座候、

一同十八年寅九月、松齡様御上洛、其節被召列候哉、忠元嫡孫次郎四郎忠光事、兼而被仰付置上洛仕、御近習ニ為被召仕由、左候而二男忠増事者其節御暇被下、同十二月十九日 貫明様大坂御出船、同廿七日細島江被為着、忠元も被召列候哉、此比為罷下由御座候、

一同十九卯正月六日、從 松齡様忠元江年頭御書被成下、次郎四郎忠光近習相馴、入精致御奉公、石田殿御對客未相濟、御笑止思召趣、且忠増ニ茂心得候様難有被仰下、其比奥州伊達政宗未被為上洛、御人衆可被差向世

評ニ候處、同二月四日与風上洛有之、京地靜謐、頃日

忠光・治部少輔殿御對客相濟、同十六日鎌田政近被差

下、又忠元江御賜書を以、彼表屋形作并其以前御借財

返弁、且一唯様御夫婦御續祈等能々致首尾候様ニ与

之可遂吟味、栗野御留主ニ茂萬端心添可仕旨被仰付、

左候而忠増ニ茂御傳筆、忠光事茂右通難有□<sup>(被)</sup>仰下、同

八月忠元鹿兒島江參謁、貫明様神文拜呈仕、然處同

廿六日神文差上、雖不新候一段神妙被思召上、御鬱憤

之事ニ付而者、弥向後可為御同意趣之御褒翰忠元江被

成下、此神文茂幸侃惡逆之御内密ニ可有之与申事御座

座候、

一同年十月二日、此時分御國より被為差出候人質を、右

田治郎少輔三成番組被相分ケ賦書、貫明様 松齡様

御宛にして被差上、一番者嶋津左衛門入道殿祇院院領

孫子、肝付中將加治木領主親類并年寄之子二人、

新納武藏入道大口地頭忠元實子、左京亦太右衛門孫次郎四

郎次郎兵衛、二番者嶋津又四郎殿清水領主實子、種子嶋

左近太夫種子島領親類并年寄子二人、入来院又六清數領

親類并年寄子二人、三番者嶋津圖書頭殿申良領主忠實子

根占七郎根占領主重張親類并年寄子二人、喜入式部太輔喜入鹿

久實子、每番三人宛、三組之内ニ本田下野入道道三省、

町田出羽守久倍入道存松・平田左近將監藏、其比之御家老三

人間ニ老人ツ、繰合在京ニ而、右之一組宛ニ相加、四

人宛にして七ヶ月交替可為質人、其上 貫明様 松齡

様 一唯様御三殿間ニ御老人ツ、御在京被為在、左候

而右組合外ニ北郷讚岐守都城領主忠虎實子・伊集院幸侃肝付郡主忠棟

新納武藏守此三人之質人ハ別段常詰ニ被仰付、前文人

數、皆古来一所持且御家老衆ニ而、何れも大身耳ニ御

座候処、忠元一人只大口地頭共仕居候身分ニて右列之

番組ニ被召入、殊ニ御國中第一大身成都城、又者肝付

郡主扨同様常詰ニ為被仰付事ハ、兼々 太閤忠元武勇

被為感居、別而被入御念、右通為被仰付趣、三成

此年十月書中ニ御座候、

一同年秋之比、太閤御朱印を以、来春朝鮮征伐被仰出、

肥前名護屋江御陣所被相立ニ付、諸大名被為召寄御普

請有之、就夫同十月 貫明様茂鹿兒嶋御出馬にて、限

城迄被為立候處、御病氣被為起、折柄 松齡様ニも朝

鮮御渡海ニ付、此年九月比御下向被遊居候間、則為御

名代同十一月名護屋迄御參陣、同十二月廿八日 太閤

御朱印ニ而 貫明様早速御用意候而、淺野彈正同前可

有御渡海、武藏事も妻子者京都江差上、其身者御渡海

ニ被召列候様、段々ケ条書を以被仰渡、旧冬写上置候

文書中ニ御朱印全文写載置候間、此場江者略仕候、

一同二十辰十二月文  
録と改元二月廿七日、 松齡様 一唯様御同

道、朝鮮為御征伐栗野御出馬、御供之軍裝未相揃、僅

式拾三騎為被召列由、同三月三日 松齡様者大口御城

迄、 一唯様者馬越城迄被為着、忠元皆奉恭迎、

一唯様ニ茂大口江被為入儀奉願、同四日 御兩殿様江

忠元御錢別仕、和歌一首奉獻候由、

為舟

あちきなや唐土までもおくれしと思ひしことも昔成

けり

御松齡様

松齡様御返歌

唐土ややまとをかけて心のミかよふおもひを深きと

ハしる

同五日、御兩殿様大口城御出馬、次男忠増大口人衆召

列御供仕、忠元茂大口城より西之方牟田口と申所迄奉

送上、此時忠元六拾七歳罷成、別涙頻ニ為相催由、左

候而同廿日名護屋迄御着陣為被遊由、同四月此前より

太閤巢鷹就被為好、御朱印を以 貫明様江可成尋出候

様被仰付置、去年茂落合新八郎重次被差下、忠元出合

御用為承由、左候処此年二月八日 太閤忠元江御朱印

被成下、日向巢鷹尋方として新八郎被差下候間、案内

者相添尋出差上候ハ、御悦可被思召、尤逗留中旅宿旁

茂御馳走仕候様被仰付、然共巢本多者椎葉山ニ有之由

ニ而、彼邊迄罷下、此月二日新八郎使札を以大口方巢

本之儀者被頼遣、右之御朱印茂為持被遣候而、忠元頂

戴為仕由御座候、

一同年三月廿一日より四月六日迄 松齡様 一唯様名護

屋江御在陣、其間忠増并桂忠實・敷根藤左衛門頼(74)

伊勢雅楽入道任世四人ニ奉行被仰付、毎日石垣・木屋

普請等夜白辛勞為仕由、然處御國船宅艘茂不廻来、

御兩殿様幸侃又者數根藤左衛門船持御借入、五六端帆

船杯

やうく拾艘ニ而、人衆者船と廻迄被殘置御渡海、誠

ニ御外聞之至乍被思召、第一 貫明様又者御國家之御

為ニ被為渡、老岐ハ兵糧等不便利御心遣ニ被思召上、

且此度御軍役并替米首尾等難調事共、石田治部少被聞

及、懇意を以 貫明様江家老安宅三郎兵衛被差下ニ付、

同六日 松齡様より忠元江御書被成下、右之成行能々

形行

得其意候而 貫明様江申上、是非相調候様可有才覚旨

被仰付、尤忠増儀其節被殘置衆之由候處、小者一人ニ

而成共御供仕度奉願、為被召列事迄も被仰下、同日從

一唯様茂御賜書ニ而、御留守中御國諸事任世ヲ以被為

頼置候得共、名護屋迄罷出哉ニ被聞召及、病中太儀思

召趣、且御借船被為渡事前文同様、次ニ者忠増普請ニ

辛勞仕事迄茂難有被仰下、左候而同七日 御兩殿様名

老岐國

護屋御出船、一艘國ニ御渡海、忠増御供、猶も船と不

相廻、餘國之大名小名何れも乗船飾立被相渡折柄、右

躰御借船ニ而泊々茂御忍如くにして、同十七日 一唯

様數根船を御座船ニ被為借一説者幸侃船、御供ニハ中野

を被為借共

甚右衛門・五代助太郎・伊地知民部少輔重堅・曾木弥

重賢

五郎重久・平山作右衛門忠續・大乘坊・村尾与五郎重

良等僅七人被召乗せ、老岐より對馬迄御渡海、其船行

帰迄茂御座船遅参ニ付、同廿一日 松齡様茂御同様被

為借、御供ニ者鎌田勝右衛門政重・上床藤左衛門國寄・

土持権兵衛・伊東弥九郎貞昌・大田吉兵衛忠好・山崎

勢

助右衛門重有・東郷源四郎・古郷新六等七八人被召乗

古江

せ、對馬ニ御渡海、其節忠増等者無船為被殘置由御座

候、右次第御領國ニ不被為應、哀成御出陣ニ而、何程

御催促被仰遣候而茂、世間差勞れ御軍役不被為調ニ付、

忠元等申談、其身も差當外ニ術計無御座候付、先々為

被下置大口地頭職高其儘奉返上候處、同廿八日 貫明

様御感狀ニ而、拙齋事者累年粉骨及度々、誠ニ吳他義

無吳義

候得共、軍功相除衆并差上心底尤御感悅不淺、於向後

聊御忘却不被為在趣、屹与御證判被成下、同五月三日

御兩殿様對馬より朝鮮國釜山浦江御渡海、其節茂船無

之、忠増等者同十九日對馬ニ相渡、廿六日釜山浦ニ罷

渡、日々御陣を尋参、漸追付上御供為仕由御座候、

一同年五月四日、貫明様、町田出羽守久倍・平田美濃守光宗・新納武蔵入道拙斎・川上参河入道肱枕・本田因幡守正親・鎌田出雲守政近・税所越前守篤辰・山田越前入道理安・新納旅庵長住・本田右衛門佐親(ア)・伊地知伯耆入道増也(宗也)式拾人を鹿兒島江被召寄、段々精密被為遂御熟談、依数年之御在京國家雖令困苦、高麗兵糧・名護屋并京都之續料、或船手之事共、夜白無油斷可相調事、段々御直ニ被為頼、若不相調候ハ、御家可及一難題事候間、御自身様ニ茂國家之御為ニ者善惡御同意可被遊ニ付、弥才覚專一被思召上趣、右式拾人宛ニ御判物被成下、依之同日忠元等右之人數と申談、何れ成不被為調候而難被為叶事共拾式ケ条書立、條々不事濟内者何様之私用有之候共致婦宅間敷向ニ約束相定、左候而忠元并川上肱枕・山田利安・鎌田政近ニ鹿兒島御留守番被仰付、右之條々相決候後者式番ニ被相分ケ、直ニ式人宛相勤致交替筋ニ被仰付、其御條書之端ニ御袖判迄被為加置、左候而同八日 貫明様名護屋為御參陣鹿兒島御發駕、伊集院御泊、鹿兒島ニ者忠元

等御留守番、同九日串木野御着ニ而御船待、同十八日串木野船朝鮮より帰帆、御兩殿様初而為被遣去ル六日御書御到来、同廿四日 琴月様栗野より忠元江御賜書、鹿兒嶋御留守永々可為辛勞、御兩殿様御左右相知候ハ、即刻可申上旨被仰付、同六月五日 貫明様此間串木野より甕嶋迄御渡被為入、此日名護屋江御着陣、未諸陣御見廻茂不被為濟砌、梅北宮内左衛門國兼・田尻但馬守等構逆心、朝鮮渡海之者共を君命と相偽薩肥之中途ニ狩集、彼是二三百騎ニ而加藤清正領内肥後佐敷城ニ取籠企一揆候由、御國元より告来候事被聞召上、別而御驚被為糺候得者、梅北より為差上使と申ニ付、即其者兩人被為殺害、早々 太閤ニ被遂言上、其後諸家よりも追々注進有之、別而立腹ニ而、貫明様ニも暫者御難題ニ被為及候得共、皆様御留守中之義ニ而、自然与無御存知事 太閤茂被為晴疑候由、左候而一揆之討手ハ淺野彈正長政ニ被仰付、未着陣も無之内ニ堺善左衛門と申者廻謀計、國兼以下式百餘討取、隈本より同十八日長政江為申遣由、左候得共長政父子者肥後

江罷通段、貫明様江も申上置、八代迄出陣為被仕由、右旁ニ付薩隅御置目為可被改、細川幽齋を上使ニ被差下、此時分 權現様御取成ニ而朝鮮御渡海茂御許容有之候得者、貫明様御案内被遊候様被仰付、御同道ニ而七月朔日大口ニ御着、則比志嶋紀伊守國貞を大口ヨリ御使者として宮之城ニ被差遣、右次第之形行ニ付細川殿御同伴御下着候間、晴養茂必鹿兒島江御出頭候而病躰をも被懸御目ニ、又此度之一揆茂無存知由被申置度被仰遣、晴養御返詞、吾一人ニ而御家又者御國之為ニ罷成候ハ、兼々捨一命御奉公可仕御心底心躰候間、随分腹をも可仕ニ付、正直ニ被仰聞候様ニと被仰候得共、其通ニ者有之間敷と國貞茂申為被帰由、其比梅北徒類を忠元留守之大口衆相働為搦捕由、則被刎首、同五日名護屋江被差上之、同六日 貫明様鹿兒島ニ御帰着、自其三日相後れ幽齋茂鹿兒島ニ被為着、貫明様、幽齋迄極内分晴養幼孫袈裟菊儀者何卒被立置被下度被為相願、幽齋受合、彼一族之納得ニも可相成迎、誓詞迄被相渡、町田出羽守久倍ニ被仰付、瀬戸口藤兵衛を宮

之城ニ被差越、右之誓詞茂けさ菊ニ被相渡、是非晴養者急キ御參候様被仰遣、折柄兼而之中風ニ又腹中被為煩、誠ニ乍笑止之躰、伺公不致候ハ、兼而之心底茂徒ニ可相成迎、縱令於中途空敷成候共覺悟之前と被仰、同十日宮之城被為打立、孫之けさ菊等ニ被為別節、我者再帰候事有之間敷、然者けさ菊身上者御兩殿様御兩殿御下知次第奉頼、萬事有油断間敷旨被仰置、鹿兒島江参越為被成由、然處此日 太閤又名護屋より 貫明様江御朱印被為賜、是迄段々晴養之罪科を被為數、今度高麗江被相渡候ハ、其身者御助可被成、彼家中ニ惡逆之棟梁可有之、十人茂式捨人も刎首可致進上、若高麗江不相渡、此方江於罷在者、是又刎首可出之、自然相滯候ハ、御人数被差遣、彼在所者勿論隣郷迄悉撫切ニ可被仰付、右之内一途無之候ハ、御檢地之奉行も被遣間敷、猶幽齋方ニ茂為被仰遣趣被仰渡、其御朱印相達、猶又貫明様奉始、皆共至極御驚嘆ニ而十方ニ被為暮、則御一族其外宿老被為召奇、何様被盡御吟味候共、可被為救道筋頓与無之、何れ御誅伐之外者有之間敷と御吟味

央ニ、晴養御出頭被為在、諸人顔色平日と為相変事を  
 忽御見取、直ニ御立、其夜脇本指而御出船、瀧(應)ケ水ニ  
 被為乗入、則一人忍を宮之城ニ被遣、上意ニ茂候哉、  
 無存掛所江人衆被差懸候間、我者致生害候、定而跡茂  
 同前ニ可有御扱、然者汝等女童と者乍申、最後者必靜  
 くと可仕旨申遣置、書置(辭世も)辞世も被為認置、同十八日  
 御生害、其段者世人茂為存事故略仕候、左候而同廿日  
 比志島國貞を又御使者として大村迄被差遣、けさ菊事  
 ハ御取分ケ可被助置段、跡家内ニ被仰渡、然共家内よ  
 り御意辱者御座候得共、晴養被為召禿候上者被助而茂  
 不入義ニ候、只同然之御扱奉願趣返事為被申上由、其  
 後又福昌寺天海和尚ニ被仰付、華舜軒と楞嚴寺を使僧  
 にして、猶又段々被仰聞せ候得共、家内返詞同断御座  
 候故、同八月比忠元并福昌寺天海和尚を宮之城ニ被差  
 遣、必貴命ニ被為隨可然と頻ニ為申論由、然共辱者乍  
 被為存、晴養存生之内正直ニ被仰聞せ度、御家之御奉  
 公ニ捨一命候事ハ兼而之心底ニ候旨返々被申候得共、  
 左様ニハ有之間敷と國貞茂被申ニ付被為打立候處、中  
 途ニ而被召禿候儀者餘り謀計等敷被成方、近比残念之  
 至、其上被致生害節、跡家内最期之心得迄被成遣候得  
 者、其身も跡者無之方ニ存詰生害為被仕事候間、被助  
 生殘候而茂其詮無御座、夫与申茂存命中に京儀不被及  
 是非候間、何れ生害可仕、左候上者孫之儀者御助ケ可  
 被下与被仰聞せ、其身も為致得心上之事ニ御座候ハ、  
 無申迄茂難有義候得共と返詞被申上、其時忠元等随分  
 左様ニ被仰知答ニ而御使僧被差遣、上意之趣為可相達  
 瀧ケ水江行懸候得共、中々難寄附故、不被及御力ニ茂、  
 畢竟 御家又者御國之為ニ社如此ニ被為成候処、女と  
 ハ乍申別而愚知成申分、左様ニ餘り被為申募候ハ、  
 斯迄晴養被為捨一命候御奉公之程茂徒ニ可罷成、子細  
 者幽斎御扱不埒明迎、此上又淺野彈正被差下者案中、  
 左候ハ、宮之城者勿論、隣方悉薩摩惣鉢致一変事差知  
 候旨申達、其時家内茂屈服ニ而、於其儀者知行所者如  
 何と被申ニ付、忠元天海和尚と、是者決而改易ニ可相  
 成、何れ宮之城者無下城而者難被為叶旨申達、左候ハ、  
 家内生而も不入事、知行所ニ茂相離れ、家来一人茂不



召仕、見苦敷為躰ニ而者誠ニ無生甲斐候間、被召禿旨被相願候故、只今京衆下着被居候儘、先其恐れとして一節者是非下城可然、左候而、京衆被登候上者、本之姿ニ可被召立と申達、猶夫ニ而茂被相疑、只為致下城候計之御約束ニ可有御座与被申出、其節忠元向後けさ菊殿身上ニ付而者少茂別儀無御座、尤御詫被為申節者武藏談合可申上、左候而若哉御願違無之候ハ、其日武藏茂御暇申と迄堅約束為仕由、其節乍漸納得有之、同十一日宮之城終ニ下城ニ而、入来之様為被立退由御座候、同十六日一唯様朝鮮より忠元江御書被成下、為御留守鹿兒島江相詰候由被聞召及、可為辛勞、随分無緩様御番可仕御頼思召趣、且忠増別而御奉公ニ辛勞仕候事迄難有被仰下、此月十五六日迄ニ者、當五月御渡海後、御國之便も不被為聞由候處、其時分大口其外諸所之人衆参着ニ而、御左右被為聞候由、同廿日松齡様も御書被成下、此度御在陣少人数ニ而、被對諸家御外聞無之、併左様之御恥辱も不被為願之故、御家も御無難候半、自是大明國ニ茂可被向御馬由候處、今

躰之人衆ニ而者逆茂御軍役難被為續候間、今一涯被入御精、人数等被立遣、是迄之御辛勞無ニ不成様可相肝粟旨、且梅北悪行ニ付無御心元被思召候処、右之餘徒を大口衆為搦捕由被聞召及、當時忠元鹿兒島江相詰、地頭所乍留守も兼而申付様行届候故、右之仕合御褒美思召段茂、當人ニ可申聞置、又忠増堅固ニ勤居候間不及心遣ニ、母江茂申聞候様難有被仰下、同九月朔日一唯様又忠元江御賜書、太閤御威光彼表ニも普く、山ニ遁入、武士共山中ニ遁入、大方為相濟躰不及心遣候、梅北逆心者無是非、國家之始末弥可然様可頼入魂旨、御使者を以被仰付、同十月其前方石田家老安宅三郎兵衛罷登ニ付、忠元より孫之忠元より三成江孫之次郎四郎忠光長々在京仕候間、何卒御暇被下度、細々口上ニも申合、且書状茂及両度頼遣置候處、此月十三日、三成忠元江返翰ニ而、尤乍去只今高麗御陣ニ付、中國九州杯より人質被召上時分、御暇申出儀者難成、其上實所御事者、先度御朱印ニ茂別而被入御念被仰出候条、難致取成旨被仰渡、是則三ヶ國大身之歴々より忠元一人を太閤も一番御念

遣思召、高麗御渡海之御朱印ニ茂、忠元事ニ付而者別段ケ條立を以被仰渡、且人質番組ニ茂一雲・幸侃・忠元三人者、別段常詰之列ニ被入置候事ニ相當可申、左候得者其比より餘程天下ニ名高く、薩摩親指武藏と世上ニ為申觸事共之證據も、此等之事ニ可有御座と申事御座候、

一文祿二巳八月、去年以來御國中寺社勘落ニ而御蔵入被仰付旨、太閤より被仰出候處、諸士之配當ニ相成、一唯様御附之面々、知行茂同様上地相成哉ニ被聞召候由にて、一唯様思召ニ不被為叶、山田利安ニ帰朝被仰付、此月三日忠元江御書被成下、利安と申談、諸縣之内ニも右躰配分於有之者令没収之、去年并當毛堅固ニ可納置旨御頼思召旨被仰付、左候而無間も同九月八日於唐島 一唯様御逝去為被遊由、右之御左右、同廿七日栗野江御到來有之、忠元并嶋津右馬頭以久・伊集院幸侃・川上上野介久隅・鎌田出雲守政近・喜入大炊介久正・新納旅庵・伊勢弥九郎貞昌・吉田美作守清存等申談、此上者 琴月様御相續被遊茂御當然与御談合

被為在候處、幸侃何欵入組為被申由、然共忠元并鎌田政近宜向ニ為申分由、左候而新納旅庵・吉田清孝兩人清存を以て、右之趣 貫明様江奉伺之御内意も相濟居候處、石田三成より 琴月様早々御上洛被遊候様、義岡藏人久延被差下、就夫閏九月九日旅庵京都御使被仰付、同十一日栗野打立上洛、左候而此月弥御相續ニ被為定候由、依之同十一月 琴月様茂栗野御発駕、同十二月十三日大坂江御着為被遊由、但旅庵日記ニ右通幸侃入組被申候と計被書置候事、不分明義ニ者御座候得共、

琴月様御家督ニ被為立候御談合央ニ幸侃逆心之内存ニ而、何と欵為相妨ニ者有別儀間敷、然者右之御砌ニ茂忠元・政近抽忠勲候事有之哉ニ推考被仕事御座候、此年忠元弟五郎左衛門忠佐人質として上洛仕、忠光事者御暇被下為罷下由御座候、

一同三年三月廿日、 琴月様伏見ニ御登城、 太閤御目見被為濟、今年 貫明様茂御上洛、細嶋迄者陸路被為通、忠元茂上洛ニ而、同廿三日首途仕、四月十二日大口出立、十五日佐土原より乗船、五月大坂江參着、

伏見城ニ罷上り、 太閤御目見被仰付、 旁仕合宜敷、

弟忠佐ニも御暇為被下由、 左候而此等之左右、 朝鮮ニ

茂相聞得、 同六月八日 松齡様より忠元江御書被成下、

太閤御前江被召出、 宜都合ニ候事共被聞召及、 御満足

被 思召段御歎<sup>〔上〕</sup>被仰上、 彼表御軍功ニ付而者、 誰人ニ

茂不被為劣御事候得共、 何分ニ茂御無人ニ而、 小身衆

ニも却而御劣候事御無念之至、 細事伊集院下野入道・

比志嶋紀伊守江被仰遣候間、 右御状拝見可仕趣、 且其

比迄者忠増左京亮と申候処、 弥太右衛門与改名ニて弥

精勤仕候間不及心遣、 母ニ茂宜預傳達旨茂難有被仰下、

又先便より忠元和歌一首奉拜贈置候処、 御面談同前被

思召出候迎、 別而御謙退之御詞書ニて、 御書中ニ御返

歌被成下、

たゞへやる君かあたりの言葉をあひみるハかりな

めこそすれ

同十日ニ茂御一首御吟味被遊方も彼表ニ者無之候間、

忠元奉加占削差上候ハ、 連日之御窮屈も可被為散旨、

御書被成下、 同八月 琴月様茂為御渡海京都御立、 同

廿五日名護屋江御着陣、 同十月八日名護屋御出船、 都

合拾弐艘、 同九日老岐風本ニ御着船、 同十四日風本よ

り對馬府中ニ御着、 自其諸浦御汐掛ニ而、 同廿六日同

州星之浦御出船ニて、 朝鮮國釜山浦江御着船、 左候而

同十一月廿四日京都江就御用、 上井神五郎里兼帰朝被

仰付、 就夫 琴月様より忠元江御書被成下、 遠境之故

被及御無音、 寒天在旅可為艱難被思召上、 貫明様御

機嫌之程も被為相伺、 彼表難被為在付國ニ而朝夕御床

敷思召、 委曲者神五郎口上ニ為被仰含旨難有被仰下、

同廿五日神五郎彼國出船罷登、 此時分忠増在陣、 去年

已来相煩、 療醫無之ニ付為養生方一先帰朝被仰付、 就

夫同廿八日 松齡様より忠元江御賜書ニ而右之形行被

仰下、 能々致養生、 得快氣候ハ、 又可令參陣、 老母江

も宜心得候様難有被仰下、 其節一旦ハ罷帰為申由御座

候、

一同年七月、 石田治部少輔三成、 任御朱印御領内薩隅諸

縣為御檢地、 黒川左近・中小路傳五・大橋甚右衛門等

数十人被差下、 九月十四日大口より竿打被相始、 其節

忠元孫次郎兵衛忠光忠元与伊地知隼人佐重、右之京衆案内者被仰付、忠光主従式拾人ニ与力大口兩人召列、隼人も同断ニテ諸所案内為仕由、左候而翌年末二月廿九日迄御檢地相濟為申由御座候、

一同四末二月、忠元在京、此時分奉對御家惡逆之者有之、世上無心許御時節ニ而、貫明様 松齡様別而御心遣被遊ニ付、奉初 琴月様御兩殿様江御誓詞三ヶ条被差其砌ニ上御砌ニ可有御座、忠元も奉對 貫明様、今度談合仕候人衆、私之隔心差捨御奉公之本意相守可申、外ニも同心之衆於有之者遂言上熟談熟談可仕、世上轉變仮令数年不懸御目候共、不奉忘御高恩候て御時節可奉待上、尤向後何様計策之族有之候共、曾以同意仕間敷、此衆御成敗於承付者、上意次第上洛申分可仕趣三ヶ條神載を以申上趣御座候處、此月廿八日 貫明様より忠元江三ヶ條神載被頭心底、寔ニ御當家且御自身様之御為、旁神妙被思召上旨御神文被成下、同日同案伊集院抱節ニも被成下、是又幸侃惡逆ニ付、御用心之御密約に可有之与申事御座候、

一同年三月、此比忠元并町田出羽入道存松・本田下野入道三省、其外吉田美作守清存・喜入大炊介久正・平田豊前守宗(ト)・是枝大善坊快(ト)・肥後新左衛門等御供ニ而、在京仕候衆銘々朝鮮ニ進上物差上、松齡様江御機嫌伺申上候處、此月七日三省・忠元・存松宛書にし

て、右之御挨拶御書被成下、彼表新儀無之、大明之便も不被為聞、何れ可為長陣、急便別書難被下、右之面々ニ茂御祝着思召趣相心得、各在京辛勞仕段茂宜御頼被遊旨被仰下、同比忠元兼而詠置和歌三十首、細川玄旨ニ致持参高評願置候處、此月廿五日玄旨手翰を以忠元江右之一卷被為返、墨を被付候事者憚候得共、御知己之故難被打立置、御沈吟之上御存慮被為註候趣、叮嚀被仰遣、左候而十六首御点有之、尤被為褒候一首、時雨之和歌ニ御座候、  
晴くもるひかりハ空に定して夕日をわたるむら時雨定らて  
かな  
一同年春、御檢地相濟候付、四月十二日 太閤御朱印ニ而 松齡様江御用被仰渡、同五月十日唐嶋御出船、六

月五日大坂御着、則伏見城に御登城、太閤御目見、同廿九日薩隅兩國并日向諸縣郡御檢地御目錄等御拝領被為在、七月 琴月様朝鮮より鹿嶋右衛門尉國(ト)帰朝被仰付、同十一日忠元江御書被成「下」、松齡様御上洛被遊候間、何篇御熟談、皆々辛勞仕筈、御國中配當如何調候哉、御兩殿様被入御念御時節候付、思寄候儀者無用捨申上、御家御為可然様可預入魂、猶右衛門尉可申趣被仰下、此月 松齡様京都御立、忠元并長壽院盛淳東寺迄奉送之、同十九日大坂御出船、同廿四日細島御着、同廿五日辛便御聞付、右之御左右忠元江御書被成下、此時分次郎兵衛忠光事ハ船造奉行として河内ニ在勤、弥太右衛門忠増儀者行歩不自由ニ而、以使者祝共申遣、何茂無吳儀不及心遣旨被仰下、同廿八日栗野城に御着城、同九月十日 琴月様又朝鮮より忠元江御書被成下、長々在京老躰辛勞可為窮屈、御國移替ニ付、貫明様 松齡様御心遣御遠察被為在候処、宜折柄 松齡様御下向之由御祝着思召被仰下、同十月貫明様ニ茂御暇被為賜、京都御立ニ而御下國、忠元儀

者御跡江在京本之通被仰付、同廿六日 琴月様朝鮮より忠元江御書被成下、貫明様御下國御祝着被思召趣、且右ニ付忠元在京可為辛勞、何篇入念御置目等弥稠敷申付儀肝要思召、自然緩之儀共於有之者可為曲事、彼表者不及心遣旨被仰付、御留守詰に在京為仕由、左候而此月 貫明様鹿兒島より富隈江御城普請ニ而被為移、鹿兒島者其時不被為入候得共、琴月様江御讓被遊、松齡様者栗野より帖佐ニ被為移、此儀早竟辛侃より太閤江申上、石田三成と致談合、奉始 御三殿様、御一家衆一所一所一持衆其外地頭持・諸士小身ニ至迄、御國一統移替被仰付、殊ニ何れも本領之知行より令減少、幸侃其身者庄内都城ニ罷移、太閤御朱印を以高八萬斛致拝領、振威勢為申由、其節忠元ニ者清敷地頭職被仰付、折柄在京仕居候付、嫡孫次郎兵衛忠光大口より罷移、大口ニ者御城代として町田出羽入道存松被召移、左候而清敷者少人衆ニ付、忠元奉願趣有之、山崎士肝付隼人兼里并子右助兼政、其外大村・中津野・長野三ヶ所之人衆為被召移由、同十一月廿四日 琴月様朝鮮

より忠元江御書被成下、来春奥入被 仰出、御國元御  
仕置連々御治定無之ニ付、御軍役可被為調程合御氣遣  
被思召上、旁為御談合嶋津圖書頭忠長・鎌田出雲守政  
近ニ帰朝被仰付候間、細事口達承之、御留守居別而入  
念可相勤儀、御頼思召外無他事、且忠元進退之儀茂委  
細忠長江被仰舍候間、定而可然様可相成趣被仰下、同  
十二月廿一日 松齡様帖佐より御發駕ニ而御上洛為被  
遊由御座候、

一 同五申十一月廿七日正月十三日、松齡様大坂御着、其

比忠元ニも在洛仕居候、同二月九日 琴月様朝鮮より  
新春御慶書忠元江被成下、遠方ニ而御音信稀ニ有之、  
御想像不断御想像被遊御事計候間、 貫明様御機嫌等節々被  
聞召上度聞召度便宜委可申上、洛中春景御羨思召、彼地邊鄙可  
奉察旨被仰下、同三月 太閤忠元江御暇被下、此度在  
洛中、忠元隙々ニ者近衛龍山様江參殿仕、歌道之御講  
說拜聞仕候付、内々奉願趣為有之由候処、伊勢江庵取  
成ニ而、詠歌大概抄と申御書物御深秘被成置、御窓外  
江未被為出御本ニ候得共、忠元執心之者ニ候間、寫方

御許被遊旨被仰聞せ、難有書写、此月七日終筆為仕由、  
左候而同十一日御庭前糸核盛ニ付、御前江被召寄せ、  
終日御酒宴、其節忠元帰國仕候由被聞召上、御詠歌拜  
領被仰付、

せめてさはこの春はかりいとさくらたひたつ人を引  
もとめはや

右ニ付、忠元頓作ニ而、御當座に御返歌為仕由、

いく春もかけてやにはふいと桜君かよへひに華もひ

かれて

自其忠元京都罷立、▽卯卯月廿二日細嶋江着船、夫より  
參着、又帖佐江茂參上仕、五月二日初而△御國江罷下、地  
頭所清色ニ差入、尾迫と申所江新宅相構為罷居由、嫡  
孫忠光事者、此年為人質又々罷登、在京為仕由、同五  
而此日 二月二日 琴月様朝鮮より忠元江御書被成下、今度御國  
諸士改易知行支配等之首尾不審之至、忠元忠元茂不顧自己  
之安危累年奉公為仕忠節無比類事候間、 貫明様  
松齡様御談合茂被為在、宜被加御意、若猶無其儀者  
御両殿様江御申調、進退可然様御取持可被下御賢慮被

為在候間心安奉存、可抽忠貞旨難有御證判被成下、同

らなん

七月 近衛信輔公御歸洛ニ付、貫明様庄内都城迄被

忠泰

為送、御歌會被為催、忠元も被召加、詠松蔭新涼和歌

かり初の別れなからも年月のへたてぬと思ふ名残か

一首為詠置、

なしも

沙弥為舟

同廿三日 松齡様久見崎ニ被為下、同廿八日御出船、

すミよしや西に秋風松吹は涼しさよするおきつ白波

五拾餘艘、四月十九日朝鮮加徳島ニ御陣、此年夏忠

同年九月 松齡様再朝鮮御渡海被為蒙仰、同十二日

元清敷より飯野江地頭替被仰付、為罷移由御座候、

太閤御目見、寒天ニ者御老躰御太儀被思召上候間、先

一同三戌十月廿二日 琴月様朝鮮より忠元并町田出羽入

人衆被遣置、来春可有御渡海旨、御懇之上意等被為蒙、

道存松・平田太郎左衛門増宗・山田越前入道利安・比

同廿三日大坂御出船、十月十日濱市御着、自其帖佐江

宛にして御書被成下、自大明國大軍打出、蔚山・順天・

御帰城為被遊由御座候、

泗川之三道ニ人数相分ケ、就中御番為被遊泗川江大勢

一慶長二酉二月廿一日、松齡様帖佐御首途、弥太右衛

相賦、普州表ニ為被召置番手共ニ和睦之懇望依有之、

門忠増被召列、同三月十一日御夫人實窓様茂為御質人、

小西行長・寺沢正成江茂被遂御相談、和平之御沙汰有

帖佐御發駕ニ而御上洛、同十九日 松齡様久見崎御乘

之間ニ、自敵方令違変猛勢操寄、去月廿七日古館ニ為

船ニ而、御船待者於隈之城被遊、忠元茂右所迄奉送之、

物見少々為被召置人数を取巻可討果と仕候得共、各碎

此時大島出羽守忠泰茂御供ニ付、忠元為詠遣由、

手切通、泗川御城ニ引籠、少々戦死ニ而敵者引退、味

為舟

方より茂少々被討捕、和平表裏之鬱憤未被為散處、去

今こぬと別ゆく□□七そちのよハひの名残おもひや

和約

朔日已刻、大明國より十萬四川御城ニ押寄、誠ニ夥候

間、永々及籠城者諸卒等勞、却而防戦可及御難儀と御

評定被為在、善惡安否茂不被為計、被逐御合戦、大軍

被為切崩、數萬騎御討捕、不慮ニ御勝利被為得、於三

國被為振御名譽候事不可勝計、松齡様者不始于今御

事、御自身様如此様者始而之御仕合、非人力之所為、

御家御代々殊ニ御両殿様御信心被為碎故ニも御座候

哉、惣別彼地ニ平生不相見得白狐・赤狐奇妙ニ走出、

軍兵得勇猛勢容易被為打果候御事、偏ニ神力且者諸卒

之粉骨御筆舌ニ茂難被為述、連々抽懇祈候寺社中江可

申渡、尤此御方右通大御勝利ニ付、順天・蔚山を為取

巻敵も悉引退、且此中海陸より順天を取巻候番船も為

可被為討、寺沢正成江御相談候而兵船御調被為押懸候

処、最早敗軍ニ而、一二艘相後候船を被為焼捨、何方

茂静謐ニ相成、在高麗之諸大名より御使者多、誠ニ御

面目被為播、其上敵方より無事之使官此御方江差上候

付、小西・寺沢ニ茂御談合被為在、具ニ被仰含被差返

候間、於事済者頗而可為御帰朝、今少ニ被為成候故、

御留守居衆弥遂熟談、納殿杯一人無油断、宮仕共定衆

と少茂無聊尔様、旅庵以下鎌田兵部等ニ稠敷申付、何

篇無緩旨別肝要被思召上趣被仰下、左候而同十一月三

日徳永法印・宮木長次郎渡海ニ而、日本勢惣様御引陣

被仰渡、御両殿様茂同十日泗川御陣御出船ニ被為定、

諸所ニ借船被成、大小式百八拾艘、其内ニ而御跡拂之

下知衆として伊地知民部少輔重堅・白濱七助重・勝

目甚右衛門・谷山次郎右衛門ニ人衆六拾人相付、乗船

式艘被殘置、其餘者皆出船、興善嶋ニ御着、同十六日

右之衆茂迫着、然處明國大將陣隣等約束相交、順天在

城之小西撰津守行長・大村新八郎喜前・五嶋孫右衛門

尉純玄・有馬修理太夫正純・松浦式部卿法印鎮信等五

家之衆を為可討取、順天海口に番船を掛、帰路を遮居

候事被聞召及、彼衆打捨御帰朝被遊候而者可為日本之

瑕瑾と被思召上、御両殿様より立花左近將監宗茂・

宗對馬守義智・寺沢志摩守正成・高橋主膳正元種等ニ

被仰合せ、同十七日南海ニ御乘向、同十八日番船と御

合戦、諸兵碎手、此御方御手ニ六艘被為切捕、右之伊

諸卒相勞

勇猛容易

御方大御勝利ニ付

敵方から

分別

陣隣

日本之瑕瑾

御談

式被



地知重堅・桂兵吉忠次・二階堂與右衛門重行等番船ニ  
切乘、粉骨討敵、何れも敵より船を被燒戰死為仕人数  
不少、

松齡様御船ニも敵船打掛、別而被為及御危難、其節亦

太右衛門忠増・種子嶋左近將監久持・川上四郎兵衛尉

忠兄・同姓久右衛門尉久智・大田吉兵衛尉忠綱等放銃

炮而防戰仕、皆沖之方江為追拂由、此等之隙に小西等

五家之兵戰者、皆其沖を漕廻無難引取、松齡様唐嶋

之瀬戸口に御船陣被遊居候所江小西行長等參謁也、實

及感涙為奉謝由、左候而同廿一日寅刻唐島御出船、其

日酉刻對馬之西灣之浦ニ御着、自其諸浦被為廻繋、同

十二月六日壱岐之風本ニ御着、同十日筑前之博多ニ被

為入、同廿七日大坂江御着、忠増ニ茂被召列、直在伏

見為仕由御座候、

一同四亥三月、此前 松齡様 琴月様御帰朝不被遊、御

留守中御勝利之為御祈禱、有淳和尚と申僧へ法華千部

奉真讀候様被仰付、加久藤御城下一本杉之本ニ本傳庵

申庵を被召立、文祿三年より同五年迄ニ成就仕候處、

右通古今無比類被為得御勝利御帰朝被遊候付、此月為  
御願成就供養塚御建立有之、御名代忠元相動、為法衆  
為詠和歌に御座候、

はるかなる驚の高ねの雲ならん御法の庭の花のけし

きハ

返歌

君ならて心もつけし驚の山の雲を御法の花の色とは

同九日、於伏見御屋敷 琴月様伊集院幸侃を御茶室ニ

被為召、御手討被遊候、然處石田治部少輔三成立腹ニ

而、大閤御直ニ御朱印迄為被下者を御届も不被為在被

為誅候事を申立、高雄長谷寺ニ御動座為被遊事御國元

ニ相聞得候節、閏三月朔日、忠元并鎌田出雲守政近・

比志嶋紀伊守國貞・山田越前守理安・平田太郎左衛門

増宗・種久島左近監久時・新納休閑斎旅庵・伊集院下

野守抱節・町田出羽入道存松・樺山権左衛門久高・桂

太郎兵衛忠助連判ヲ以、伊勢兵部少輔貞昌迄右之御左

右奉承知、皆共驚入仕合、乍去幸侃罪科之事者治部少

輔連ニ御存ニ候間、定而被聞召分ケ御都合能可被為成

与、早々御吉左右奉待罷在候間、此段宜預御披露旨為

奉捧一輪由、又同三日忠元并ニ比志島紀伊守國貞・喜

入大炊助久正・休閑旅庵①休閑旅庵・伊集院下野入道抱節・町田

出羽入道存松・北郷作左衛門尉三久・相良新右衛門長

辰・鎌田出雲守政近・山田越前守入道利安・平田太郎

左衛門尉増宗・樺山権左衛門久高・桂太郎兵衛尉忠詮①忠詮・

上井甚五郎里兼連判を以、此度幸侃御成敗ニ付、御談

合等於御隱蜜事者毛頭洩申間敷、況彼子伊集院源次郎

を始として、右縁者親類雖有之、曾以庄内江通用仕間

敷旨起證文書調、田代神介①甚介・阿多甚左衛門宛にして

貫明様御方江奉拝呈之、左候處都城ニ茂右之左右相聞

得、源次郎忠真拾式之外壘を取構、其身者都城に楯籠

同廿日比より庄内・福山之通路を差塞キ致謀叛聞得有

之、此夏①此度 貫明様より忠元并山田越前入道理安江被仰

付、各人衆召列、庄内境諸所警固之手配等仕置、早打

を以伏見江被為及御注進、本より伏見江者幸侃妻并次

男小傳次・三男三郎五郎・四男千次等為人質罷在候間、

川田大膳亮國鏡・吉利左右衛門を以幸侃逆心ニ付被為①被為

誅候得共、右妻子ハ 誅伐、妻子無御構旨被仰渡、屍之儀者伊地知甚左衛門

重辰宰領ニ而被為届候処、幸侃妻大に立腹、泪も不流、

皆々嶋津屋形ニ可切入と致下知、子共召列鞍馬山に走

入、其後加藤清正ニ訴企謀叛事相聞得、則本田助允親

貞・平田五兵衛・宇都藤左衛門宗昌・細田寛右衛門・

大井七右衛門等に見聞被仰付、何れも新納旅庵相付誓

文差上、左候折柄庄内籠城之事相達、 琴月様 松齡

様と被仰談、 權現様江被仰上候処、同五月 琴月様

御暇被為賜早々御下國、此頃ニ候哉、忠元人質茂蒙御

免、嫡孫忠光為罷下由、御供之事者分明相知不申候、

同六月忠元等人衆召列出陣①同廿一日出陣、須木地頭村尾源左衛門重

候入道笑栖人衆召列、同廿一日須木を打立、酉刻高崎

ニ相着、諸侍①諸侍と談合いたし、其夜直ニ出立、廿二日早

朝皆々庄内に打入、酉刻東霧嶋に参着、佐土原城主

嶋津中務太輔忠豊も来着、何れも此に陣屋取立、忠元

等諸侍①諸侍と評定仕、同廿三日寅刻より、忠豊は北郷家衆

本田弥左衛門・関屋豊前・岩満利右衛門を案内者ニ被

召列、須木地頭村尾笑栖者筑地内蔵介・乙守筑前・釘

村源左衛門を案内ニ召列、高原地頭入来院又六重時・紙屋地頭相良新右衛門長泰・倉岡地頭丹生備前守信房等諸縣之將士と山田之新城に押寄せ、皆々城中ニ攻入、敵方ニ有名中條右近將監・井畔平左衛門等を討捕為申由、忠元茂北郷衆森淡路・多田伊賀・塚田式部を案内ニ召列、薩州之諸將と相共に、山田之本城野頭に當る荒神か尾より攻登り、城中ニ討入、碎手相戦、其時忠元七十四歳之老武者ニ而、塵取ニ打乗、先一番に昇進せ、諸卒に加下知、何れ茂盡粉骨、城之守將長崎休兵衛尉・同加番中村與左衛門等を初として於大手口討取之、彼是合而数百人討捕、其日已刻計ニ者遂為乗取由、同廿二日恒吉城〔城主〕茂申良地頭嶋津圖書頭忠長・志布志地頭樺山権左衛門尉久高・松山地頭柏原將監等押寄為相改〔攻〕由御座候、左候処同七月三日 琴月様より忠元江御書被成下、今度其表江罷立、別而之軍勞御祝着被思召上候、老躰之在陣太儀ニ者乍思召、御氣遣之御時節ニて、近日御出馬可被遊、今少之事候ニ付、其間相詰罷在、各無越度様可申付事肝要ニ御頼思召趣被仰下、

此時分從 權現様 貫明様江御使者被成下、何分にも庄内之儀、御存慮次第御談合可被成下旨為被仰下由ニ而、同廿八日 貫明様より忠元并入来院又六重時・平田太郎左衛門増宗江御書被成下、其地在番辛勞無申計、此間より御無音〔所存之外ニ候〕御所存之前ニ候、御使者下着ニ而右之向ニ被仰下候間、即時勝利之儀弥廻賢慮事專一被思召上趣被仰下、此月小西作右衛門より為御加勢鉄砲衆三百人被差遣、大口迄来着、同十一日 琴月様より以御書被謝之、同八月五日 松齡様伏見より忠元江御書被成下、其後御無音御心外ニ被思召上候、京都御静謐、其表源二郎于今榎籠、先度ハ山田城為被攻崩由玆重被思召上、當時者少將様御在國侯間、別而御奉公可仕儀肝要ニ被思召上、且忠増無恙御奉公、御無人ニ而昼夜辛勞仕候事迄も被仰下、同廿日恒吉城落去被為取之、同九月九日、忠元加下知、人衆敵地に差遣、當毛為取取、同十日又差遣、都城近邊一里計之間當毛惣様為取取候処、敵兵走出鉄砲手強打懸、去共無何事候処、野〔野〕之三谷・高城・志和知三城之賊徒續来合戦ニ成立、

此方人衆相働、悉野之三谷迄追込、外垂前垂三重程取破、

敵武三拾人討取、味方ニ茂六七人戦死為仕由、此比高鍋城主秋月長門守種（平）日州福島迄出張被為居、庄内表

之事為可被聞せ、同十一日忠元預書翰、則右之趣返書為遣由、同廿九日九日琴月様庄内ニ御出馬、前件山田城

為被乘取時分、上野隼人忠則・逆瀬川豊前等為奉行新敷御修補被召加、御本陣ニ被為立、又森田御陣茂御普

請有之、同十月五日二日又御陣を森田に被為移、志和地城を被為相圍、同十二月四日城外に間之垣を結廻し、

堀茂為堀、打菱を蒔、仕寄を付、兵糧之運送被為相絶候由、此日松齡様伏見より忠元江御書被成下、就庄

内御行之義ニ昼夜相詰致在番由、寒中極老之出陣誠ニ前代未聞、可被仰御詞茂不被為在、不被為及被仰付御

事候得共、亦可廻賢慮義此時と被思召上趣、且忠増奉公少茂無油断、然共痔病ニ而騎馬御供難仕、早竟貴所

若輩之砌、若衆數寄ニ而多人数ニ迷惑為仕掛報（初）早茂廻來、於今者可為後悔と御戲言迄被仰下、同八日賊等

兵を安永口に伏置、山田城之兵を偽引躰、老功之者共

見取、可成差留候得共、若手人衆駈出、百人計及戦死

候由、此時分入田左馬入道并其子孫右衛門氏泰繩瀨迄参越、先年忠元等ニ相付於豊後為抽忠人ニ而、勤番之

場所より預使僧趣有之、同十七日忠元相良長泰と成行御老中迄可遂披露旨返簡為仕由、同廿四日權現様よ

り重而庄内和降之御調儀として、山口勘兵衛直友被差下、貫明様琴月様御宛之御判物被為賜、右ニ付同

二十五日從松齡様樺山久高江茂御賜書ニ而、諸法度無油断可被申付、於其儀者御勝利案中候趣被仰下、左

候而直友彼表打立為被為下向由御座候、一此年迄忠元人質諸大名同様常詰ニ在京為仕、天正十五

亥年より都合拾三年、其内忠元者勿論、松齡様より茂段と被為盡御手御願為被下事候得共、始終太閤御

許容無之、薨去後前件之通忠光ニ御暇為被下由御座候、（初）一同五子正月四日、賊等志和地より暗夜に忍出、間之垣

を打破、城中に兵糧を為運入由、同十六日城兵又出候得共、味方為追籠由、同十九日城責有之、児玉四郎兵

衛實相等力戰、渡邊茂右衛門と申者討取、同二月六日志和地城中兵糧盡果、乞降候者多相成、皆一命者被相助、悉落去為仕由、同十六日山之口城茂被相攻、伊地知民部少輔重政・谷山次郎右衛門・四位大藏行盛・大山稻助幸綱等碎手粉捕仕候由、然處賊等頼【手】而可相防衛茂尽果、同廿九日高城・山之口・勝岡・梶山・野之三谷・安永六城打捨、皆退去為仕由、折柄山口勘兵衛尉直友【下知】下着ニ而和降之御取次被申ニ付、此日 貫明様琴月様御血判を以、忠真事當家ニ者堪忍難仕居旨以墨付寺澤殿江為申儀、別而御遺恨思召事ニ者御座候得共、權現様御愛ニ候条被差捨候間、罷出御奉公仕候上者無吳儀可被召仕趣之起請文、直友宛にして被成遣、直友持越、忠真ニ拝見為仕候而被申論候処、忠真茂畏り、勿論其比母方より茂致和降被助一命候事第一可相考向に為申越由、旁ニ付都城・財部・梅北・末吉之四城を差上降服仕候而、同三月十日直友御取次を以可被召出旨蒙御哀憐、御高恩不知所奉謝、偏御奉公可仕旨、喜入大炊助久正・税所越前入道休心宛にして請文差上置、

同十四日富隈ニ罷出、和降之御礼被仰付、依之同十五日 貫明様 琴月様都城ニ被為入、岩切三河入道ニ被仰付、勝吐氣被為執行候、左候而同十八日軍衆皆御暇被下、忠元等【人衆】人数召列罷帰、同廿日 貫明様者富隈ニ御帰館、同廿二日 琴月様者鹿児島に御帰城被為在、同廿四日 琴月様より御感状ニ而忠元江御脇差一腰幸光拝領被仰付、今度永々相届在陣、寔老後之軍勞無比類被思召上被下之趣、御判物被成下、同四月十一日 貫明様・琴月様より末吉住吉神社江御奉納為被遊由、忠元も右之人数ニ被召加、為詠和歌于今有之由御座候、

▽【梅】△ 為舟  
梅かゝの袖にしとまる物ゆへにしはしわれかと身を  
たとる哉

詠松間時鳥和歌 沙弥為舟  
よろつ代の聲やそふらむすそたてる松の梢や山ほとと  
きす【たれる】

▽【】是より以下、上方表之儀、忠元御國江罷在、其場へ者携不申事御座候へ共、御國第一之御大事専忠元江御評儀被仰付、

且又其身茂掛而心苦仕候儀ニ而、其上次男弥太右衛門忠増

松齡様江始終奉付御奉公申上候而、忠元罷居候茂同前之儀ニ

付、勲功之内江相込委曲相記候、△

一 同年五月、權現様長尾景勝為御退治奥州御進發就被

為催、松齡様御事者伏見城ニ御留守可被遊旨、御

直之 上意被為蒙、仍同五日 琴月様江御書を以被仰

進せ置、同六月十七日 權現様伏見御首途、松齡様

山科迄御見送、其節伊奈圖書頭・山口勘兵衛尉ヲ以、

忠真弟共三人并母早々可為下國、頃日大坂御城ニ三日

母詰通御直訴迄申出申出候得共、何も口上通兼不被聞召届、今形

差置候而者又禍之階梯ニ候旨、御叮嚀被仰出、依之直

ニ御差下ニ成候由、同七月十四日 松齡様鹿嶋太郎兵

衛國明被差下、人衆被為續候様被仰下、其頃石田三成・

毛利輝元・浮田秀家・小西行長・大谷吉隆等景勝と示

合せ、權現様を双方より狭可奉討と之企仕、三成等

より以使札右之密計早々景勝江申遣、就夫 松齡様ニ

茂被為對 秀頼様可被抽御奉公御事此時に御座候旨被

勸上、然共松齡様前文通 權現様御懇切權現様前文通御懇切為被仰付置御旨茂被

為在候間、川上久右衛門久智を伏見御城ニ被遣、御直

為被仰付置事ニ候間、御城ニ相詰可抽御奉公旨細々被

仰遣候得共、鳥居彦右衛門元忠・内藤弥次右衛門承諾

無之、大坂御城ニ者 松齡様御夫人實窓様 琴月様御

夫人持明様實明様御三女御質人として被成御座、其上兼而為

被捧置御神文茂被為在、旁御断茂難被仰切、若被仰切候被仰切候

得者差付御質人様方御難題不被為遁、無是非茂被為懸

其意、同十五日景勝ニ茂同様御書通為被遣由、夫故同

十七日長束正家・増田長盛・徳善院玄以より飛札を

琴月様ニ茂差上、御同様為被勸由、左候折柄既ニ伏見

城被相改段ニ成立、此御方者遠國ニ而御人衆不續參、

御無勢を以平場之御獨立茂難被遊、責而今千茂罷在候

ハ、被成候様も可有御座と御嘆息為被遊由、就夫新納

旅庵鳥居殿坏者知人御座候間、今一往私御使ニ可参迎

伏見城ニ為參掛由、左候得共城内ニ不差通、剩鉄炮打

掛、難達空數為罷帰由、夫より大坂方ニ御一決ニ而、

則御使を并尻弥五助ニ被仰付、御書を以 權現様御方

江被仰上趣有之、同十九日寄手ニ被為加、初而伏見御

城を被為攻、①攻させられ、同八月朔日落城、忠増罷立、同八月朔日被攻落之、▽②此

時弥太右衛門忠増任寄奉行被仰付、朔日之未明より城戸に付鳥銃を打掛、伊東甚六・財部傳内・川侯仁兵衛等桶をつぎ攻寄候處、城中より石を投、甚六か甲を打破り候得共、具足之上ニ而痛之薄く候を、帖佐土山崎助左衛門扶ヶ来り、敵五六人を追拂ひ、甚六を陣中へ列帰り、其身ハ本之仕寄場江立帰候、其砌佗國之仕寄より弥太く城内より敵切出かと呼知らせ候由、弥太右衛門是を聞、衆を勵し攻寄せ、終に松尾口より攻入り、五代舎人・松岡勝兵衛先登城、遂に陥候由、△

同十五日 松齡様澤山迄御進發、自其大垣に御着陣、大垣より又宍里計洲之侯に忠豊と御同道ニ而御陣被為取、同廿三日 松齡様忠増并入来院又六重時・喜入撰津守忠政・川上久右衛門久智等拾餘人被召列、石田三成・小西行长等と六兵衛に御出會被仰談事御座候処、

③「久川」關東勢岐阜城を、④六之渡台徳院様關東勢を以て岐阜城を被攻落、石田人衆七千⑤七拾一本三計を竹か鼻一本⑥一本に被為討取、乘勝右之渡瀬に押寄せ、洲之侯に可追込と被為打懸候処、三成相畏れ、早松齡様茂被為引大垣城に被為籠候様被申上、其時

此御方人衆者何れも洲之侯に被召置候間、皆無殘繰曳不濟内者立退儀難成旨御返答、去共三成不聞入、馬ニ「夫共」

打乗馳出候を、忠増并川上久智見咎め、其馬之口を引留め、兵庫入道此場に被踏留候、未練被成間敷と為呼

掛由、然共三成馬を駈出、大垣之様為被走由、其折忠増・久智・大田吉兵衛忠好・樺山久内忠篤等相働、就

中木脇休祐秀馬上に長刀を横へ、薩摩之今辨慶と名乗、六之渡に駈入、御前に駈參を御覽被為在、千騎之競ひ

と御称羨為被遊由、左候而其日、⑦關東勢赤坂に着陣、御着陣、松齡様洲之侯之御人数無殘被繰取候上、忠増

等被召列大垣ニ被為曳、忠豊と城外別に御陣屋被相立、数日御滞在、同九月十三日昼前、長壽院盛淳、山田民

部少輔有榮、濱市・福山・帖佐・蒲生衆大垣に參陣、⑧其時、松齡様松齡様御陣外ニ被為出、何れ一番者可為其方と思召通

ニ候旨、御意ニ而、盛淳手を御取御機嫌不斜、三成茂大悦、以使者御頼、軍配・團扇共被差贈、▽⑨上洛太

儀ニ候、万事御頼申入段被申越候由、△⑩權現様も同十四日とも、權現様も赤坂江御着陣、此日 松齡様御人衆三百八十

程被召列、忠豊と御陣屋を被為出、古き明屋之上より赤坂之地利等御物見被遊、則諸將に被仰談、暮時分より大垣御進發、夜中之大雨降に牧田之間道被為通、寅尅計関ヶ原に御到着、街道之北に被備居候石田陣所を御尋付、自其右之方屯町半程茂可有之所ニ、未明より夜明迄御備被為配、中書忠豊富隈衆杯召列、街道之南に當り藤川越し小関之南巽向に被為備、其次四五町計備前中納言秀家・小西行長等小高き岡に相備、四方霧深ニて敵之形勢不見得通、早天より盛淳又者入来院又六等物見に被打廻、敵多く鉄砲打掛、然共味方より打之事被為禁、左候而敵近寄時分、忠豊馬に打乘弓共被為持候処、赤崎丹後今少早候半、敵我膝に駈上程御待可然と差留、左候折柄亀井武藏守より忠豊之備江鉄砲衆之加勢を乞遣、城井三郎兵衛・前原孫左衛門其外福山衆杯被差遣、然処亀井裏切、此人衆ニ打掛、同比石田陣所より茂八十嶋助右衛門為使敵に打懸候間、跡に續き被押寄候様馬上より被申上、心得候旨被為返詞、

立跡ニ馬上之失禮共致誹謗、續者無御座候処、三成一騎馳參、又同様被申、其節忠豊返答、今日之事者面々手柄次第可相働、貴方茂其通可然と被仰候處、尤可宜と三成茂別行、左候時分 松齡様曾木五兵衛重松に被仰付、御鎧等被為召、太閤御拝領之御羽織者盛淳江被下不被為召由、然處無間茂関東勢間近押寄せ、先一番に大谷刑部吉隆備に討掛、刑部踏對へ、関東勢を押返、又被打返、及六七度致合戦砌、筑前中納言秀秋裏切いたし、人衆を井伊家之勢と合せ、横より大谷勢を無残程被打破、又岡越に為備居備前中納言秀家之陣ニ者、別之東軍被討懸、秀家軍衆も崩立、又東に為備石田軍衆茂、前文通三成別行為被帰着時分猛勢ニ被討掛、是又崩立、此等に皆勝誇候関東勢、且無思掛茂筑前勢は後より押掛、何れも此御方□御陣に被打掛、其時に候半、赤崎丹後時分宜敷と申上、忠豊諸卒に加下知、皆々鉄砲打掛候得者、忽敵味方入乱、只其一箇ニ而鉄砲ハ終不用之、此時弥太右衛門忠増并長壽院盛淳等を初、何れも刀を抜而敵勢に切向、長野勘左衛門一番早

御見物

忠豊今日之事者

踏對

伊井家

秀家軍も

之

立



く敵中に駈入、敵之首討取、其鍔刀迄茂取添、今日之  
太刀初とて川上四郎兵衛尉忠兄に見せ置、又直ニ切入  
為遂戦死よし、忽乱軍と成、右往左往に合戦相励、然  
とも大勢に被狭至極之御危難被為成立候故、皆御側に  
馳參、如何可被為成哉、評議取く、何分共未被仰出  
内、長壽院盛淳、至此期御談合入間敷、被励合戦候方  
者、乍慮外拙者ニ御付候得与、高聲ニ被申詞被下より、  
弥太右衛門尉忠増一番に中くと受合、馬を引返し御  
跡に踏留、其時忠増鞞新納新八郎忠在後者島津下野守  
久元事ニ御座候・  
毛利覺右衛門元等茂同様被相残、松齡様茂御戦死  
に被為究、聊被為退候御氣象不被為在、寔ニ御家之安  
危ニ被為懸候太切成御身ニ被成御座候間、幾度茂可被  
為成丈々者被為退候事目出度旨、忠豊返々奉諫、其身  
者直ニ敵中ニ切入討死為被成由、山田有栄茂猶自其先  
敵中ニ乘入、三四町切通候而、忠豊者何方ニ被戦候哉  
与被尋、家臣荒木嘉右衛門・上田内蔵助より、彼御馬  
者跡之様為參と申候得者、猶被切入勢を見取、右之荒  
木・上田者手綱ニ取付、黒木左近兵衛と荒木助右衛門

者尻房を挽留、其時分者其時迄者濱市・福山等之衆茂相付居、  
其内より此御方様御馬印者伊吹山之方ニ見上候と申者  
有之、何れ茂見合候得共、松齡様者盛淳茂盡理是非  
と奉諫候故、筑前勢を御切崩可被為通哉被仰談候得共、  
何方成共猛勢之中を可被為通迎、関東勢之真中ニ御切  
懸被為通、御手廻計僅之御人数ニ而奉守護、猶敵方ニ  
被為懸、木脇休作杯長刀ニ而四五人御前を遮候敵共防  
返し被為通候場江有栄等茂尋付、休作大に悦ひ、御側  
別而御無人至而候間貴方御供被成度、被列來候濱之市衆  
式拾餘人者我等江可被遣と直引列、向敵を討退ケ被為  
曳候、御跡に盛淳等者為被踏留由候処、秀家之陣所と  
此御方御陣之間ニ池有之、秀家軍衆皆此池に逃入、其  
敗北に被押立、薩摩人衆茂亦逃入者有之、其時盛淳齒  
喰シテ敗卒を叱り、薩摩者遁共國遠し、各面者皆見知  
居候と高聲ニ被相戒、殿様者如何程被退候哉と被尋、  
敵中押分被為退候間、最早程遠可被為行と、何れ茂申  
を被聞と、直ニ目出度く、御跡者我等御名代可致打  
死と、拜領之御羽織を着し、石田為贈團扇を振り、三

度目弥乱立候戰場に向ひ、嶋津兵庫入道死狂也御相と打名

乘為被遂戰死由、其比ニ候半、川上四郎兵衛忠兄、毛利覚右衛門に行逢、殿様御行衛を申談度と呼掛候得御被呼掛

共、只今可参と申捨、敵中に駈入、是又為致戦死由、其外戦死茂多人數、又忠増等乱軍中敵勢に被押隔候而、

御側取離為申茂亦數多ニ而、松齡様御手廻別而少勢被為成、其節功者衆申上ニ、此御無人ニ而軍迎者難被遊候

間、何れ茂相印等御捨させ、御馬印茂被為捨候由、左候而被為向候方江福島左衛門太夫正則等何萬騎共難計御御方

程相備、皆敵中ニ候間、被奉伺候得者、敵ニ候ハ、可切通、夫も難成節者御切腹と被仰出、何れも畏り、猶

軍列被為相整、既に三間計近寄候時一同に刀を抜き、あひとうくと揚聲御切通被遊候得共、正則陣より相

支者無御座、其後井伊兵部少輔直政、下野守忠吉を輔佐いたし被追掛、後醍院喜兵衛宗重・木脇祐秀等跡押

ニ而防戦、折柄川上忠兄加下知、鉄炮を以直政を馬より打落、自其東兵致追討者無御座、其後 権現様御陣前被為通候砌、川上忠兄を御使者として不圖出陣奉背御にて

本意、只今御陣頭罷通、委細者奉期他日と被仰遣置、

左候而忠兄者任心可退旨為被仰付由、自其大垣城ニ茂被為竈度被為向、御中途ニ而白濱七助舟歌を謡ひ出、

何れ茂付謡、則被為叱、南宮と申所迄御越被為見候處、大垣城者最早焼落有之、自其伊勢路ニ被為向、四國之

長東大藏大輔正家・長曾我部土佐守元親南宮山に在陣御出陣候間、誰欵御使者ニ可被遣と御意被遊候得共、可参与御御請仕者無之候処

御受可仕者暫無之處に、伊勢平左衛門貞成私可参与進出、松齡様被為悦、秀頼様為御奉公度と合戦、如此

無人に被相成罷通旨御口状被仰含、貞成駈出候節、四國陣御力而合戦茂不致、別而大勢ニ候間、裏切茂難計、敵ニ候ハ、討死、味方ニ候ハ、可振采と申捨馳行、彼

陣中ニ馳入御口状申達、自彼も今日御手柄無比類、東軍不打掛、人數茂不相痛与返詞聞届、振采為被帰由、

自其駒野近く被為通、又追掛者有之、桂太郎兵衛忠詮、山田有米と御跡乘を被争、大野弥三郎加吳見、両所者

御供人數ニ茂不輕御身分候間、御跡者我等相勤、若不遁節者可致討死、必両所者御供專要ニ候旨申論、自其御必御供專ニ候旨申論

⑨其跡者

御先者忠詮、御跡者有榮相動、自翌日者先後隔日に為被仰付由、暮過駒野坂に御行懸り、甲冑者何れ茂可脱と被仰付、然共脱申者無御座、御前ニ茂花色木綿之御合羽被為召、同色木綿之御手拭ニ而御髪を被為包、御鞍茂矢野休次馬と被為替、夜中山道御通、亥剋計駒野峠に被為登、又御意被為在、小具足計ニ而餘者皆相脱候様被仰付、然共又皆不相脱、其時御前者御甲冑被為脱、其邊ニ可捨置旨被仰出、横山休内忠篤、恐多候得共着仕致御供度、若難着届節ハ乍着相果可申与奉願、其通被仰付、自其近江之内大山迄御越被為聞候処、京都江者最早將軍被為入候由ニ而、又伊勢國関地蔵江御通、参宮道ニ被為出、同十六日江州水口に御通掛候處、新関相立番人守居候間、番衆ニ申断可被為通、若被聞入候ハ、御切通可然と御意にて、願娃弥市郎久音被遣候得者、無事ニ申濟、御通被遊、其後に候半、楠原と申在町より西之方大山を被為越、伊賀之内ニしからき

⑩所

へ御通、山内より神戸千熊を御先ニ被遣、白濱七助に旅籠手當可仕旨被仰付、日暮時分しからきに御着、夜

入御食被召上、御供衆皆庭中ニ而黒米旅込被下、此時御談合、万一殿様御名相知候而難被為通節者如何と被及御吟味候處、本田源右衛門親商、若左様之時者我等首を被勿出候而御通可然と申上、直ニ為致入道由、左候而其夜中ニ和泉國江被為通、案内者無之、後醍院喜兵衛宗重・相良吉右衛門尉長信・白濱七助等、路脇之人家ニ差越、再三頼も不受合ニ付、其者搦捕案内に被押立、同十七日朝和泉國江被為出、和泉より案内も多故、右之繩相解、銀子一枚被下被相帰、自其大和・河内・和泉御通、平野に御着、伊勢貞成者自其一里計住吉之田邊屋道與宅ニ忍之御使被仰付、御側に者本田親商・桂太郎兵衛忠詮・矢野休次・木脇休作等相詰、其餘者皆築地外ニ被召置、忠詮を以是迄者御忍被為通候得共、此より頼而可被為忍御道筋不被為在、此上者何れ御切腹被遊ニ付、皆々御暇被下候条、任心可退旨被仰渡、然處此義乍恐皆承知難仕、若左様被遊御切腹候ハ、何れ茂致切腹、後世迄茂御供可仕旨申上、各実に其覚悟仕居候處、又親商を以先皆切腹者仕間敷、大坂

⑪其夜平野に御着

⑫頼候ハ共不請合候ニ付

に為御質被成御座候而御夫人様御方江忍之御使者被遣置候付、御一左右次第何分被為究思召ニ候間、夫迄奉待候様被仰渡、暫間御座候而、又親商より御夫人様皆無御別条由候間、此上者又御忍下被遊度、左候得共多人數ニ而者迎茂難被為忍候付、何れも大坂江參、何分共行成ニ可致御奉公旨被仰渡、是者皆畏、乍涙茂奉拜別、各如大坂為參由、左候而貞成儀者相忍住吉之道與宅江差越候處、道與相悅、則殿様者如何と奉尋上、然共実事不相明、乱軍中ニ御備取離れ、此低ニ茂難致帰國、御行衛尋上為參由貞成申募、幾度茂切實之誠を被試居候處、翌十八日道與貞成を茶室呼入に、是非有躰被仰聞せ度涙を流し、相當之御奉公可仕茂ケ様之御与奉存旨、実意無疑被見受、夫より打明、平野之片端迄致御供奉隠上置、何卒御忍下之世話方頼度心底ニ而為參旨被申聞候得者、先以恐悅至極之御事、乍然早速御知せ不被成者乍御恨、此上ハ一尅も早々御迎ニ可参迎、大雨降ニ女中乗物為相昇、貞成同道平野に罷出、則御目見被仰付、恐悅申上、直ニ右之乗物に被為召、大重

平六一人被召列、若咎目候者於有之者、道與と被為名乗手筋ニ而、無難道與宅ニ被為入、左候而御供衆貞成并白濱七助・曾木五兵衛重松・矢野休次・白濱與介白坂・本田與兵衛義熊と夜入を待、各老人ツ、忍參、皆宅中に為忍居由、左候而又御夫人様方御下向之計策等貞成ニ被仰付、同十九日大坂江段ニ被及御懸合ニ、其比大坂江者琴月様御夫人持明様松齡様御夫人実窓様被成御座、大坂方茂籠城之手當ニ而、右通在洛之御質人茂皆城中ニ被成御座、無手形ニ者御暇難被成事候處、忠豐御夫人為被忍出由承及、桂太郎兵衛忠詮・平田太郎左衛門増宗・吉田美作守清存・相良日向守長泰・弟子丸越後守宗盈・伊東肥前守祐ト・有川助兵衛尉貞春・北条土佐守時弘・大田筑前守等申談、御忍出可然、先女式人為試時弘女に女式人、男者鎌田安房介等三人相付、番人何様相咎目候共夫限致覚悟、曾而何方屋形共名乗間敷旨堅安房介へ申付、城門為出候處、番人相咎目、女式人者門外ニ追出、時弘女と安房介三人者城内に被追安房守等三人者帰、別口より罷出、夜中何れも狼狽、乍漸界之様為參

由、然共其事不相知ニ付、專秀坊(ト)申看經坊主を御使僧にして、松齡様御方者、今度於関原 秀頼様御奉

公として被遂御戦死候間、右之御質人者何卒御暇被下

度、左候ハ、琴月様御夫人者如本御在洛可被成ニ付、

是非御憐愍可被成下旨、一昼夜無飯ニ而詰通相願候處、

其通御暇被為賜、實窓様御一方之手形相渡候付、持明

様御事者御供女中ニ被相混御忍下可然、左候而女中之

内大田筑前守女お松と申を御質人様之筋ニ取立、御跡

ニ被殘置、被付置人数等も平田増宗被為下知候得共、

可殘居与申人無之、其時山田有栄我等相殘可申、御心

安被為退候様被申上、其外相良日向守長泰・吉田美作

守清存・新納孫右衛門教久・上原右衛門佐尚張等同様

相殘人数ニ相決、御船手當等為有之由、左候折柄関東

勢落人捕方として平野邊迄寄来候哉ニ 松齡様被聞召

上、同廿日道與宅ニ茂難被為忍、且道與者船茂不持合

候ニ付、其夜又々御忍、白濱七助・矢野休次御輿を奉

昇、道與御案内ニ而堺江御越、塩屋孫右衛門所江裏口

より土蔵中に伊勢平左衛門名前を以御忍被為入、孫右

衛門不取敢御湯潰食ニ香物相添為差上由、然共此邊(ト)迄

茂段々落人捕方として入込居候事被為聞及、御食不被

召上、其節孫右衛門三歳相成愛孫を人質として御膝本

ニ差上置、自其為被召上由、左候而廿一日横山休内を

忍御使として大坂江被遣、右様又堺江被為忍候成行等

被仰知せ、其節休内駒野峠より着届為申御鑑茂有川勘

兵衛貞春・廣瀬吉左衛門(取)次差上候處、持明様御

前へ被召出、御盃迄被成下、其砌御忍下之御仕舞旁御

混雜最中故、其夜休内茂桐御紋付之箱を背負、川口御

船迄持届、其假堺之塩屋ニ立帰、御返答為申上由、然

者 松齡様御船手當之儀、最初住吉江可相廻旨被仰遣

置候處、不圖御宿堺へ被為替、必可及間違と御心遣被

遊御砌、御船頭東太郎左衛門住吉ニ可参考ニ而夜中乘

廻候處、東者勿論水手共迄頻リニ睡を催候而、住吉浦

不覚打過、其夜寅尅計自然と堺之塩屋宅地之下ニ為乘

着由、御供衆則大重平六を出し、何方船欤と被為問候

得者、右次第不思議之成行ニ而御座船為相廻由、御前

者勿論御供衆皆々至極恐悦ニて、同廿二日未明ニ直ニ

塩屋御立、御船に被為召、兵庫川口之様ニ被為出、大坂より茂 持明様者御手自御系圖、實窓様者平野肩衝之御茶入被為持、御供女中等迄無残程被召列、且秋月侯夫人迄被為同伴御出船、西之宮沖にて御行逢、御再會被為賀候而、類船者依風波相隔習ニ候間、皆御座船江被為乗移候様 御意候而、何れ茂様御乗移被遊、御供船茂御跡より追々出船ニ而、目出度御下向為有之由、左候而此月忠元事飯野より又々大口に地頭替被仰付、罷移、大口御城に在番為仕由御座候、

一右通関ヶ原西國勢敗軍ニ□、松齡様御討死為被遊□

之風説大坂表為申觸由、伊東家之臣清武地頭稲津掃部祐信等聞及、此勢ひに乗り関外諸城取返度、黒田如水に得内意、早々駈下り一揆取起段、同廿日比より日州表ニ風聞有之、白坂源右衛門与申者承付、穆佐地頭川田大膳亮國鏡に為申越由、同廿四日 松齡様御使者竹内織部介早打罷下り、琴月様江御左右為申上由、同廿五日稲津掃部既に関外に討入風聞有之、同廿七日富限ニ茂 貫明様疾に被聞召及、山田利安杯御談合被為

在央に、樺山兵部大輔忠助茂早打為參事承付、被為參上候處、直ニ佐土原江可差越旨被仰付、同廿八日穆佐地頭川田國鏡・倉岡地頭丹生備前守信房等城構手當等取付、同廿九日辰刻 松齡様・持明様など御船細島に御着船、初木平右衛門人数五拾人召列、塩見迄為御迎參上、此夜半樺山忠助佐土原城ニ到着、同晦日 松齡様財部に御一宿、忠助使差上成行申上、此夜稲津掃部介、杉本某与申者を穆佐之雨田安藝守に遣し、致内應候ハ、襲取所領地に可進旨申越、安藝偽而受合、地頭國鏡江申出、右之杉本為生捕由、然者掃部茂杉本不罷帰ニ付、穆佐者打置、其夜直ニ中村渡を打渡り、同十月朔日夜明、掃部高橋領宮崎城為攻落由、直ニ佐土原ニも押寄候様風聞ニ付、別て騒動、其日午尅 松齡様佐土原城ニ御着、諸人大ニ奉欣悦、然共御夫人様被遊御同道候間、忠助加下知警固仕可罷居、無程御人衆等御帰城之上可被遣旨細々被仰付置、同日申刻佐土原御立、八代御一宿、倉岡地頭丹生信房其外諸所警固之御下知被遊、尤何方も不遠御人衆可被遣旨被仰置、同二

日八代御立、大窪村御一宿、此時分鹿屋老岐守兼長閑ケ原ニ而御備相離、中國路罷下り、備前國迄參掛候而、彼邊者薩摩人有之迎、黒田・鍋嶋・立花など人衆被相

催事承及、就中肥後者熊本城主加藤主計頭清正、同國宇土城城主小西行長等及敗軍候事を被聞及、人衆相催宇土・八代を可攻取押寄候由ニ而、行長家臣小西美作守より此御方江御加勢被相乞、依之 琴月様より嶋津圖書頭忠長并其子河内守忠信・本田六右衛門親正・伊勢兵部少輔貞昌・宮原秋扇・吉利左右衛門忠張等ニ各人衆召列加勢ニ被遣、此日佐敷ニ打入、吉利忠張等清正之物頭井口伊賀之介と海上ニ致合戦追退為申由、此時分御談合旁之為ニ茂御座候哉、忠元事鹿兒島江相詰罷居候処、松齡様・持明様御船着候由大口表江相聞得、宿許より忠元江為知遣、忠元初而承之、至極奉恐悦、則宿許江為遣假名文ニ、武庫様・上様皆御船着候由、此中者疑敷候而心遣申候処ニ一定之由、殊ニ彌太右衛門茂下り候哉、扱々寄特神変非私之事ニ候、縦令者先死候者為生出心地申候、可為御同意候、此上之目

出度事有之間敷候、平左衛門殿も御供之由、目出度々、かしく、と申遣、誠ニ其時分之実情相見得罷在候、

但右之全文者旧冬上置候文書之冊ニ載置、不及申儀御座候得共、武庫様与者 松齡様、上様者持明様御事ニ御座候、弥太右衛門者忠元次男忠増事ニ而、私家元祖ニ御座候、平左衛門与者伊勢平左衛門貞成事ニ而、忠元掣雅楽入道任世嫡子ニ御座候、次男者伊勢兵部少輔貞昌、乍兄弟御家老相勤、忠元為ニ者皆外孫御座候、右ニ付忠元勲功之冊ニ関ケ原之事共者可書述儀ニ無之候得共、次男忠増・外孫貞成等出陣為仕始末ニ而、忠元心遣仕居候者共之事ニ御座候間、為罷帰時分相悦為申実情、右通明白御座候得共、全駄假名文、且月日・宛書茂無之、通し兼候文書ニ御座候故、注釈ニ茂可相成与糺當候候、任序書載置申候、

一同三日 松齡様大窪御立、富隈ニ御着、貫明様御對顔、此度大軍御切通、御質人様迄御同伴ニ而、海陸遠

路御無事被為帰候御事、別而御感悅為被遊由、自其帖  
 佐ニ御帰城、此比加藤清正計頭清正水俣ニ押寄、出水ニ  
 討入度企有之由、同四日稲津掃部穆佐城ニ押寄、此方  
 より為防返由、同九日忠元此比迄茂鹿兒嶋江相詰罷在  
 候処、從 松齡様真如坊御使ニ而忠元江御書被成下、  
 上方不慮之御仕合ニ付、風与御下向被遊事者御使ニ被  
 仰含不被為書、此地長々在番、誠辛勞共中々可被仰様茂  
 不被為在候、肥後表御手當最中ニ付、御直可被為越候  
 得共、日向表御手當ニ御見合被為入候間、此時分各可  
 入精事、萬々御頼思召趣被仰下、同十日 琴月様帖佐  
 ニ御越、御自身様御出馬被遊度被仰上、 貫明様  
 松齡様不被為許、此比外関手為番手桂太郎兵衛忠詮を倉  
 岡に、新納新八郎忠在・鎌田出雲守政近を穆佐に、嶋津  
 右馬頭以久・柏原周防守公盛を東長寺に、平田新左衛  
 門宗位・肥後内膳を佐土原に被差遣、多者此日到着ニ  
 而在番為被仕由、同十一月七日此時分肥後先勢水俣迄  
 押寄せ候事、忠元留守ニ罷在候大口衆聞付、富隈注に往  
 進為仕由、此日富隈より帖佐江被仰遣、同八日 松齡

様より嶋津忠長・本田親正江御賜書ニ而、出水口御頼  
 被遣、伊勢貞成者可罷帰旨被仰遣、同十日加藤清正人  
 衆芦北ニ為討入由、鹿屋老岐守関ヶ原より落下候道中、  
 右薩摩入之軍衆に打雜り罷下、於彼表伊集院源次郎よ  
 り清正方へ為計策兩度使者を遣、御領國細成繪圖并諸  
 所地頭名書等を為持遣、何時ニ而茂必船手より可被攻  
 入向ニ為申遣置事共細々承届、且肥後勢之相印昇等迄  
 見覺、此夜兼長津奈木浦より山道ニ入、出水に参着、  
 嶋津忠長・本田親正ニ成行申上候処、則送人馬被成下、  
 御道具衆兩人被相付、早々帖佐江罷越、 松齡様江申  
 上、富隈ニ茂罷越申上、皆様態々被遣候而茂、是程者  
 承得申間敷と御褒美為被遊由、同十二日忠増事御供ニ  
 而罷下候哉ニ、一旦風聞者為有之由ニ而、前件忠元か  
 な文迄者大悦為仕由候得共、其節迄者下着不仕、関ヶ  
 原ニ而 松齡様別而御難戰之節、長壽院盛淳ニ相付同  
 様御跡ニ踏留罷在、第一乱立候時分敵中切通、御備者  
 勿論、其外味方等ニ茂取離候間、主從七人大坂江忍出  
 候處、落人捕方甚稠敷有之候ニ付、彦右衛門与申者所



江參り相頼候得者、亭主懇切ニ受合、佛壇下ニ相隠置、

此者日州表江綿荷積下致商賣者ニ而、荷内に隠入、船

中に積載せ列下、耳津ニ着船、自其陸路同伴ニ而小林

罷通、大窪村ニ一宿ニ而罷帰候由、右彦右衛門儀ニ付

家傳ニ申傳候儀有之、于今大坂【切】に祭方仕事御座候得共、

右之訳者忠元勲功ニ不拘儀ニ付致略、書載不申候、

一 同年十二月、今度大口江如本地頭職被仰付候付、為加

増御高千斛拝領為被仰付由、其比忠元より丸田久右衛

門乗祐ニ為遣状ニ、同廿四日附ニ而馬越之前目を御加

増として拝領仕候、明後廿六日丙申吉日ニ而候、巳午

未比時よく候、地頭大嶋出羽守忠泰江番衆一人遣申断、

案内者加藤式部右衛門相履、大田喜右衛門入道雲雪頼

入、日記者窪兵太申付、右之地面受取候様ニ与之趣粗

相見得、委敷者相知不申候得共、此節之儀欵と被考申

候、尤此比迄茂鹿兒島江為相詰与被考申事御座候、

一同六丑七月廿八日、忠元此以前大口地頭相勤居候時分、

元龜年間より彼地諏訪神事ニ付頭屋置【相初置】、領地壹町以上

之衆中替ルく頭屋申付、毎年不怠神事執行、此年者

忠元頭屋ニ為相成古帳、今以大口ニ御座候、當分者三  
拾石以上之郷士より此人数に相加り申由御座候、

一 同年八月、此時分迄茂忠元事鹿兒嶋江相詰罷在候処、

加藤清正人衆芦北表ニ為討入事、大口留守之者共承付、

早々忠元江申越、忠元直ニ為罷帰由、此等之事ニ付、

松齡様別而無御心元被思召上、同廿六日 琴月様江御

書被進、此比之事ニ候半、伊集院忠真清正与致内通、

御家を石田一味に事寄せ、清正茂薩摩を可分取与之企

ニ而、玖摩山に人を登せ、御國之兵氣を伺ひ、或者霧

嶋參詣と名付、案内を被見候躰を忠元見取、霧嶋【御通路】遍路

之道橋普請申付、其時為謠候歌之由、庄内軍記等に御

座候、

肥後の加藤か来るならば塩焔着に團子會釈夫ても聞

すに来るならば首に刀を引手物

此歌はかそへ歌にて、一つとや肥後の云々、二つとや

ナニくと、十迄為有之由申事候得共、外之詞は相知

不申候、

一 右通肥後口より者加藤清正、日向口よりハ稲津掃部、

双方之堺目より御領内之隙を伺伺ひ致侵伐事、早竟 権

現様御前未相濟ニ付而之事ニ御座候、然者其比者御和

睦之御往返最中御座候得共、御内密ニ而不相知、右次

第諸方より御國を相伺候半、於関ヶ原筑前中納言秀秋

裏切ニ而、此御方様御備江被切掛乱軍罷成候時分、喜

入撰津守忠政・入来院又六重時・新納旅庵・本田助允

親貞・同子少吉・押川強兵衛公近・五代舍人友利以下

三百計、松齡様御備取離れ、何方ニ可切向哉、何れ

茂可自殺哉、伊吹山之麓ニ寄集致評議折柄、忽一騎馳

来、長曾我部使番之由ニ而、兵庫頭殿者先冠伊勢路に

御向被為退候、各方茂御退去可然と申捨馳去、夫より

右人数者案内を頼、北近江を相通、同十八日鞍馬山に

隠入、我人三人ツ、相忍候而致上京筈ニ被致示談砌、

同十九日夜中、山口勘兵衛尉直友野瀬某与人衆五百計

召列来□、忠政・旅庵宿所被取囲、其節旅庵并本田助

丞父子三人生捕相成、餘者皆遁落、夫より三人大坂御

奉行所ニ被召出、段々御推問、何れ茂前件通無是非石

田ニ被為與同日成行正道申披候故、権現様御疑茂被

○與同候成行

為晴候間、旅庵・少吉者為人質被留置、助丞罷下り、

必御和睦可奉勸旨被仰付、右付同廿八日寺沢志摩守正

成・山口勘兵衛直友より 貫明様 琴月様江以書状、

惟新様御逆意不及是非、御兩所茂御同意欵、各別欵、

可預示旨申上、同十月十日井伊兵部少輔直政よりも

琴月様江以書札右同様被仰談、御國之儀御理被仰上、

早々可有御出仕旨被申上、同日直友より中途御切手迄

被相渡、助允同廿五日御國江罷着成行申上、然共助允

却而被為疑候付、神文差上、同十一月四日又々上洛被

仰付、則右之御返翰等差上候處、從 権現様此上者

龍伯様御上洛ニ而御断可被仰旨被仰出、同十二月十三

日直政・直友より 御兩殿様江御書被差上、其節ハ直

政與力勝五兵衛・直友與力和久甚兵衛を助允ニ被差添、

同十六日大坂出帆ニ而罷下、中途より右之成行前廣内

密ニ申上、薩隅者有別儀間敷、諸縣一郡之儀ニ付入組

有之是者稲津掃部伊東家に被下度、黒、何れ此御方より御和

睦被為好候而者、決而御和談者相成間敷、早竟此節兩

使被添下候も、御國之武威旁為見聞ニ可有之被為推量

田如本ニ相付段々為訴出由御座候

候間、折角御弓箭之勢ニ被為張立候方可然、左候ハ、自然与御和平ニ可相成与為申上由、左候而同六丑正月又々助允上洛被仰付、松齡様御事者隅州桜嶋江御蟄居、御兄弟之御交茂被為絶置候間、御快氣次第御上洛ニ而御断可被仰上旨助允奉承知、和久氏同伴罷登、本多正信・山口直友等ニ取次申上候処、同三月廿一日正信・直友神文和久甚兵衛ニ持せ被差下、右ニ付此節者旅庵并文之和尚・助允父子茂被差下、同六月鎌田出雲守政近ニ御使被仰付、旅庵又者和久甚兵衛同道上洛、同七月二日細嶋出船、十二日室津に着船、風波不足、〔宜款〕同十九日押船ニ而夜中大坂罷着、同廿日晁政近使者差添候而和久氏ニ而着之届申遣、同八月三日伏見江罷登、旅庵同様本多正信等ニ相付御使被相動候處、正信より日本國中に九州之嶋津、中國之赤松、北陸之上杉、陸奥之伊達、東海道之徳川、此五家者為無双之上、名護屋以來 龍伯様と被仰談置候御訳合も候間、 竜伯様少将様御間御老人御上洛候而茂全無別儀ニ付、早々罷下可奉勸旨御達ニ而、兩人共御衣服等被成下、其時薩

隅〔并〕諸縣迄者御別儀無之御模様候得共、佐土原之儀込茂難申叶、既に物主をも可被為定向ニ政近等承及、種々奉訴、左候ハ、先當年中者浮地にして被差置、山口直友人衆御番被仰付置、 竜伯様御上洛迄者御待被下度、乍漸為申取趣、同九月初方政近より申上、左候而嶋津圖書頭忠長十月中ニ可有上着旨被仰出、同九月廿三日大坂出船ニ而、政近・旅庵十月罷下り、此節茂正信・直友神文被差上候得共、御疑ニ而不被為登、同七月寅正月忠長・旅庵上洛御使被相勉、〔勳〕依之四月十八日權現様御神文ニ而、兩度使者祝着候、薩摩・大隅・諸縣之儀、此間被拘候分有相違間敷趣之御判物 貫明様江被為賜、正信より内府へ始終御吳心無之候得共、上洛延引候間、此上者子息上野介ニ而茂可差下与、旁懇意ニ而皆拝領物等有之、旅庵・和久同道罷下、自其琴月様御上洛ニ御治定被為在候得共、其比右通伊集院源次郎加藤清正致内通、段々反間之浮説を以 御三殿様御間ニ不謂事共申込、既可及内乱誼ニ成立候得、〔共〕左様之御疑も被為解、同八月朔日鹿兒嶋御出立、野尻

ニ御滞在、同十七日伊集院源次郎忠真を狩場ニ而被為  
 誅戮、其外弟并母茂谷山・阿多等ニ而、同日御誅伐被  
 為在、左候而御上落、<sup>十二月</sup>十一月御目見等無残所御仕合ニ  
 而、同八卯二月廿八日鹿兒嶋江<sup>御着</sup>御着城、誠ニ是迄年數  
 四年ニ相掛御和平ニ被為調、其間者段々隣國よりも稻  
 津・加藤等諸所に押寄、御領内ニ者源次郎兄弟雜說旁  
 御心遣之御砌ニ而、忠元儀者乍老躰も鹿兒島又者地頭  
 所大口ニ相掛、辛勞為仕由御座候、

一 右御和談之事ニ付、山口直友與力和久甚兵衛杯度々罷  
 下候時分、當御城又者平佐城・蒲生城等御修築被仰付、  
 其内ニ而同六丑年平佐城御普請ニ付、相良新右衛門長  
 泰奉行ニ而、召仕候式拾ヶ村之人數、又北郷作左衛門  
 三久内衆合而一日三千人ツ、にして、日數式拾五日分  
 之普請衆合六萬五千人、同七寅春竹内織部助實任奉行  
 ニ而、拾四ヶ村之人數一日千人ツ、にして、日數三拾  
 日分之普請人數三萬人、二口合拾萬五千人被召仕候得  
 共成就無之、又同年冬忠増ニ奉行被仰付、此時之普請  
 人數未相知、過分之人數ニ而何之印茂不見得事笑止ニ

存、同十月五日忠増より忠元江為遣状有之、是者早竟  
 御和談ハ次にして、第一薩摩者專籠城之手當有之与、  
 和久氏抔罷登咄散候様ニ与之厚御計策ニ而、其比現在  
 奉行為仕人にさへ御趣意者不存、右様多人數召仕普請  
 為仕与被考申事御座候、右次第之御武威御座候故、諸  
 縣郡之入組茂伊東家等之御内訴者御取揚無之、佐土原  
 迄右馬頭以久殿江拝領被仰付向ニ為成立ニ可有御座与  
 存候、

一同八卯夏之比ニ候哉、從 琴月様別府舍人助頼景御使  
 を以、御帷忠元江<sup>子</sup>拝領被仰付、別而難有奉存、頼景江<sup>別</sup>  
 取次、和歌一首差上、御禮為申上由、

▽<sup>御</sup>為舟△

おほけなき君か御「く」しの香にふれてしはし我か  
 と身をたとる也

右御覽被為在、頓て高崎伊豆守能乗<sup>一説御使寺山 善四郎とも</sup>御使ニ  
 而、御返歌被成下、于今御筆短冊有之、

おほけなき身とも思はしから衣きつゝもなれよく  
 とせまでも <sup>「忠恒」</sup>

一 同年十月六月 琴月様當春御和談等被為濟、御下向以

後初而帖佐江御越、松齡様御饗應<sub>諸士出物四石、</sub>其後

同下旬比ニも候哉、忠元地頭所大口ニ茂御光儀被為在、

誠ニ是迄者前文之通、御國茂内外騒亂被為打續候処、

御靜謐ニ而如此御事忠元ニ茂千秋万歳目出度奉待上、

然共肴迎茂無之不如意之在所ニ而、御膳部旁前廣より

別而心配仕、御包丁役石原佐渡守家継<sub>其比小作</sub>・竹内右馬

入道自休なと幸御供ニ被召列候段承及、段々為頼遣状

共有之、左候而大口御城江被為入候節、忠元何かし進

上仕度与奉存、先年於天堂ケ尾 太閤秀吉公江初而

御目見仕候御拝領仕候長刀一柄ニ和歌一首相添進上為

仕由、

君にゆつり奉りけん山賤の身は数ならぬ千代の齡を

為舟

「一本」

君にゆつり奉りけん数ならぬ身ハ仙人の千代の齡を

右御覽被遊、山賤のと申を武士のと一本数ならぬと御点

削為被成下由、其節外孫伊勢兵部少輔貞昌等御供仕、

孫賀新納近江守忠在<sub>嶋津下野等茂元事</sub>召呼、御機嫌克御立

為被遊由、忠元<sup>(七)</sup>拾八歳之時ニ御座候、

一 同十一年八月、此比一向宗御禁止之御沙汰被為在候ニ

付、此月十一日忠元菱刈表江罷居候伊地知民部少輔重

政已下四拾八人召集、互ニ為致糺明、誓詞申付取締為

仕由御座候、

一 同十二未閏四月、唐津城主寺沢志摩守正成國分江御見

舞、貫明様御饗應被遊ニ付、忠元儀茂可參上旨蒙

御意、則參上仕、御同席被召出、段々御叮嚀為被仰付

由、且為御馳走御馬追共被仰付、外孫伊勢兵部少輔貞昌<sup>(八)</sup>杯罷登

晴成出立ニて、任序其比忠元立置候廻野馬大月毛を為

借遣由、左候而此節忠元江御馬<sub>今年取駒</sub>拜領為被仰付由御

座候、

一 同十三申正月十八日、忠元年頭御祝儀として加治木江

參上、大口衆肥後仲右衛門盛良・中嶋孫右衛門等同心

仕候、此類者毎年之例式ニ付、書載程之儀無御座候得

共、古日記見當如是御座候、

一 同年八月、忠元 琴月様江御馬一疋月毛進上仕、然処

同日忠元江御書并御使を以御帷子三領・御酒両樽拜

領被仰付、先日者見事之月毛馬差上、御秘藏可被遊、老躰思寄懇意之至、御欣悅被思召上候、殊ニ数年之武功忠勤之段、連々御感恩召候、弥餘齡相保養生肝要被思召上、御音信之印迄乍輕少被成下趣、難有被仰下、此時忠元八十三歲御座候、

一同十四酉二月、御人衆琉球國江被差渡時分、大將者樺山權左衛門久高・副將者平田太郎左衛門増宗江被仰付、其外物頭以下諸士百餘人、鹿兒嶋戸柱祇園洲より乗船有之、為暇乞見送候衆杯、洲之上莚を敷為致餞別由、

其節忠元茂罷越候<sup>(地)</sup>、平田増宗者乍副將老年、久高者大將と被仰付候得<sup>(共)</sup>、年若ニ而、何篇増宗ニ被差讓躰ニ付、諸人之所見茂其向に相見得、即其日之座席茂高座者増宗に被讓候を、忠元心付、直ニ立行久高之手を引候而、大將之御座者此前与高席被直上候得者、忽威勢格別相付、自其諸人崇敬茂実ニ大將取持ニ為相成由御座候、

一同年冬、從 貫明様稅所弥右衛門御取次を以、忠元若年より老年迄諸所戰場にて高名為仕場數等不殘書記し

奉備御覽候様被仰付、其時忠元慥ニ其場之證據有之、纏頭之合戰拾九度之事を粗書記拜呈之、其外門壁等相隔、戰功之次第為見知人無之手柄も數多御座候得共、證據人無之事者皆為略由、然處同十二月七日從 貫明様忠元江御感狀被成下、先年御弓箭中別而忠勤、于今聊も御忘失不被為在、殊更今度其条之書記委數御一覽被成下、誠ニ數度之粉骨彌以無比類被思召上、仍而御感懷被為頭候御為、御一筆如斯与之趣被仰下候由御座候、

一 忠元大口地頭職數十年相勤、極老罷成候時分、嫡孫加賀守忠清罷在候得共、僅十六歲罷成、大口之儀者肥後境、諸事不被為入御念候而難叶場所柄御座候得者、存訳も候哉、跡地頭之儀者外孫伊勢兵部少輔貞昌江被仰付度為申出置由、且又忠元每度戰場ニ為持來候鳥毛輪連之馬印茂極老相成、輪違取分ケ卷ツ宛ニシテ、一輪者忠清、一輪者貞昌江相讓為申由、左候而貞昌馬印之儀者、右鳥<sup>(毛)</sup>輪之上江一文字相加へ為被作由、彼者家譜ニ御座候、

一 忠元妻者種子嶋修理亮時與女ニ而、慶長十四年卯二月十四日病死、法名笑蓮妙欣大姉、辭世之和歌歎、忠元内室与見得候、

弥陀頼む心さやけき有明の月諸共に西へこそゆけ

一同十五戌三月、忠元為詠和歌、

さそな春つれなき老と思ふらんことしも花の跡に残  
れば

右通讀置、同年十二月三日於大口病死、八拾五歳、大

口天龍寺と申寺江火葬仕、後ニ興禪院与寺号相改候、

石塔夫婦同所ニ相并居、忠元法名耆翁良英庵主、□日同

大口郷土伊地知又十郎重近入道世久一本・宮竹休兵衛清久

と申者兩人殉死為仕由、此石塔も右夫婦之後ニ相竝、

又十郎法名玄岳一本ニ世休居士、休兵衛法名鏡阿弥陀

佛、此等四墓之上に靈屋有之、右両士之外致殉死度と

申者数多為有之由候得共御免無之、指を切候而殉死葬之

式為仕者五十余人為有之段、古老之傳ニ而、家譜ニ茂

書記置御座候、扱又忠元夫婦位牌者祥雲寺ニ為致安置

由候得共、當分者泉徳寺に安置仕置候、

一 忠元女屯人・男式人有之、女者伊勢雅楽介貞真入道任

世妻ニ而、前文之通平左衛門貞成・兵部少輔貞昌等母

ニ御座候、嫡子者刑部太輔忠堯、是又前文通於肥前深

江戦死、次男弥太右衛門忠増軍旁等前文通ニ而、隅州

山田地頭職相勤、慶長九辰五月病死、忠堯子次郎四郎、

後次郎兵衛忠光事、天正十四戌八月廿二日 貫明様御

加冠ニ而元服仕、御腰物并次郎四郎与名拝領、祖父忠

元人質として在京仕候事、又者京竿役之案内等仕候儀

共前文通ニて、慶長八卯八月早世仕、跡継養子者 賀養子者忠増嫡

子加賀守忠清ニ被仰付、忠清十六歳罷成節忠元死去仕、

其後本城又者大口地頭ニ而、御勘定奉行・大坂御蔵奉

行・御使役等被仰付、琉球又者江戸にも相詰、嶋原一

揆之節御談合衆ニ而、手勢七拾六人・大口衆貳百貳拾

人召列參陣、城乗ニ茂一番鐘仕候證文有之、其子次郎

四郎、後刑部太輔忠秀、寛永四年春、卯 琴月様御加冠被

成下、後代ニ嫡子御直元服為家例御使役相勤、將軍

家於王子原犬追物御覽之節ハ、射手奉行ニ而御目見、

且御小袖拝領、後為在番奉行琉球江罷渡、於彼地三拾

四歳早世仕、其子次郎右衛門忠饒十六歳罷成時、祖父

忠清病死、其跡大口地頭〔勲〕地頭職被仰付、寬陽院様御側に被

召仕、於長州伊崎浦式拾四歳〔勲〕早世仕、直子無之、忠清次

男主膳重頼、伊地知柰右衛門重政〔勲〕重政御使役重養子重養子罷成、養父引

續加久藤移地頭ニ而、後掛持御支配奉行・町奉行・御

談合役等相勲居候得共、甥跡相續被仰付、娘老人相殘

シ致聲養子置、其餘妻子召列本家に立帰リ、弥兵衛忠

尊与相改、大口地頭職ニ而御使役被仰付、四拾歳病死、

其子主殿、後外記忠鎮、御番頭・山田地頭、三拾五歳

早世仕、其子刑部、後左京久教、元禄四未年頭より先

祖忠元勲功之御取次〔取〕を以川上式部家同様御太刀進上ニ

而着座無之御土器頂戴被仰付、御番頭より御勘定奉行・

組頭・寺社奉行・大目附御役迄被仰付、大崎・踊・市

来〔等〕地頭替、其子刑部久品、次郎四郎・次郎兵衛、後

内藏与名拝領被仰付、物頭より御番頭・御側御用人・

大御目付・御家老御役迄被仰付、倉岡・始良・伊集院

等地頭替、其子次郎四郎、後内藏久壽、物頭より御側

御用人・大御目付御役迄被仰付、江戸御留守詰之節者

若年寄格ニ而兩度相勲、恒吉・鹿屋・末吉等地頭替、

其子次郎四郎、後ニ内藏久命、御番頭より御小姓與番

頭〔勲〕大番頭・大目付・御家老御役迄被仰付、財部・鹿屋・小根

占〔勲〕申良・出水・志布志等地頭替、其養子次郎四郎久敬、実

名肝付帶刀兼般弟、當番頭より御小姓與番頭・御用人

兼務ニ而、部屋栖内早世仕候間、久命妹聲島山式部義

矩次男又養子被仰付、是則當内藏久仰ニ御座候、

右者、旧冬忠元一代之勲功又者家筋之大概迄茂取調

へ可懸御目旨承知趣有之、天正十五亥年

太閤西征中程迄者貴様御出立前差上置通ニ而、其以

後之儀猶又取しらへ、右之通綴立申候、其内関ケ原

御陳、其外忠元而已ニ不拘餘計之事多端御座候得共、

何れ其時分之御國難を明辨不仕候而者、忠元老人之

事計畫付候而茂勲功之程合見得兼候故、鎖細ニ書記

申候、第一大意を申候得者、其節御國中別而乱立、

日新様 大中様 貫明様 松齡様 一唯様 琴月様

迄之御間、御代々様御肺肝を被為碎、被召仕候諸

士茂一統粉骨碎身ニ而、初發者御膝本之郡山・帖佐・



蒲生杯御敵對仕時分より御討廣め、三州一圓御討平、其後隣國迄茂御討掛、一旦者九州之太守様与奉仰上様御威勢被為振、自其太閤西征之御危難被為在候得共、薩隅兩國・諸縣諸縣郡一郡御拝領、夫迄者上下共旅習不申御國候處、西征以來直ニ御三殿様御交代之御上洛、且御質人様初上御國中諸大身又者御家老衆迄人質之在洛与申事共相初り、引續朝鮮入并名護屋七ヶ年之御軍役兵糧御續、御船賦等御心配之手初メニ、梅北一揆・金吾様御難題彼是御心勞旁乍漸被為濟、直ニ又庄内御出馬、関ヶ原御合戦、自其江戸表江之カ御和談懸引三年餘ニ被為及、御隣國ニ者加藤・稲津、御國中ニ者源次郎反問旁之御難事、及数十年連々被為相續、其間其御間諸士何れ茂忠勤相励、是迄目出度御傳領被遊来候事ニ成立候、其儀者為差知事ニ而申迄も無之候得共、忠元儀十九歳より八拾五歳迄六拾餘年之間、御家之御大事御談合等拘り不申儀者無之、軍功者勿論、種々之勲勞及数十度、無比類事共者時々為被成下御感状等に明白相見得、其外每茂御

難題之節々、右御六代様より為被成下御書中ニ茂多々辛勞為仕御挨拶、且御頼思召外佗事不被為在趣之御書等数十通頂戴仕置、殊更太閤西征之節茂第一忠元永く踏答へ罷在、下城之儀前文之通ニ而、太閤拝領物等段々訳而被仰付、自其御兩殿様初上諸大名同様ニ人質常詰ニ而、御直之御朱印迄被成下薩摩之親指と他國迄申觸程忠義一筋ニ抽御奉公候證據、段々不少事に御座候、然共右次第度々為被成下置数十通之御感状等領地餘地為被宛行御判物迎者無御座、就而者申傳候儀有之候、右地行等之儀ニ付而者、早竟大口表者其以前大嶋出羽守忠明之一所ニ被下置候を、菱刈家切取居候處、専忠元等武功之一筋を以御領分ニ被討取候間、忠元一所之地ニ可被宛行旨御内沙汰為有之由、左候得共忠元より御領分折角廣大相成候様にと相励申候處、其地被為闕、自分知行に被成下候而者、御奉公為励主意ニ無御座与達而御断申上候付、左候ハ、平泉村を持切に可被下旨被仰出候得共、是亦過分之御知行有之地に候間、同様御

断為申上由、於其儀者何方成共望可申、無左候而者  
 同様粉骨為仕衆江者大形一所為被下ニ、忠元耆人被  
 殘置茂御賞罰不被為屆様被思召上段訳而被仰出、其  
 節奉畏、左様御座候ハ、木之氏村被下度旨申上拝領  
 仕、尤其比右之村大口中ニ而も一番位劣之地ニ而、  
 夫故願出、則木之氏村江家来共召移農業為仕候由、  
 夫故當分迄木之氏村之儀、高取納茂家来共より仕、  
 百姓と申而者罷居不申候、尤日新様御在世中、忠元  
 并川上左近將監久朗・鎌田尾張守政年入道・肝付彈  
 正忠兼盛四人之姓名御佛壇ニ被為張置、此四人御家  
 色御看經に不罷居候而不被為叶者共ニ候迎、御靈經被遊ニ茂  
 壽命御祈願為被成下趣申傳有之、此衆之内其後兼盛  
 江者曾於郡之内上三躰堂、政年ニ者牛根之内二川村  
 等拝領、其外同様抽軍忠候衆ニ一所不被下者相少キ  
 由候處、忠元領地之ミ右通ニ付而者、如何様家傳之  
 儀茂謂レある申傳ニ可有御座候、然共、忠元武勇を太太閤ニ者第  
關第一心遣思召、一忠元武勇を心遣思召、一所持之列ニ而も萬石以上  
 と同様、人質常詰及十三年在京為仕置、又御役ニ付

而者御使役迄為相勤由候得共、朝鮮御在陣中者鹿兒  
 嶋御留守居、且、御兩殿様京都御暇之御跡に御留守  
 詰をも相勤、又大口城者、貫明様御居城ニ御修築被  
 遊候、御城に罷移居當分之御城代を初發者御留守居  
 与為申由候得者、御城代之場ニ茂可相當哉与申事御  
 座候、右通難有被仰付候得共、領地被下候儀者、右  
 様再三御断申上候付、其以來代々小身ニ而、其砌被  
 下置候木之氏村之儀、惣高四百三十石餘之地面御座候  
 得共、其内式百四拾五石餘者、當内藏曾祖父代難凌  
祖父借財有之、依願享保十三年五萬石方御買入ニ差上、  
 九拾式石餘者祖父代嶋津左方江賣渡、殘高六拾四石  
 餘ニ仕明高式拾七石余、取合九拾式石餘當内藏方江  
 持留罷在候、右通小身ニ而養父内藏代必至与困窮罷  
 成候付、木之氏村江相付候鹿倉山里場迄諸木無代銀  
 申請奉願趣御座候處、寛政元酉十二月二階堂主計殿  
 より大野隼人御取次を以、容易難取揚候得共、先祖  
 代々於諸所軍勞戦死等いたし、就中武藏事拔群之勲  
 功有之、武藏已來致領地來訳茂相変候付、旁之御取

訳を以願之通被仰付段被仰渡、是以武藏勲功ニ付難  
有為被仰付儀ニ御座候間、書加申上候、何茂急卒<sup>(東カ)</sup>  
不速如此御座候、宜御推覧可被下候、以上、

卯二月朔日

新納彌太右衛門

▽◎海老原宗之丞様

此勲功記者、忠元靈社御創建之涯

宰相様御覧可被遊旨、奥醫師御伽兼務青山道策を以御内々致承  
知、則写調差上置候処、此節

宰相様御逝去ニ付、御側廻御取片付相成、矢張御側江被召置候  
由ニ而、御側役より被相下候、右次第長々御側江被召置難有儀  
ニ付、此段書記致格護置者也、

但忠元代文書写卷冊茂相添差上置候事、

(朱印)(朱印)

安政六年未九月

久

仰

(花押)

△

「此勲功記は伊地知季安か編集する所なり、後人疑を起  
さん為記置もの也」

琉球御掛衆愚按之覺 全

(表紙)

天保五年午十月九日

琉球御掛衆愚按之覺

『他見可秘也』

伊地知氏藏本』

『本文、琉球方掛御用人嶋津主計殿より御用人座書役相良休右衛門殿を  
 昨日承知仕候表御家老衆より琉球方江御掛之儀、段々  
 私宅へ被遣、御尋之趣有之、早々取しらへ如此差出候内實者、此度御掛  
 探索仕候処、寛永十五年頃より以來、諸郷地頭系圖与  
 之御家老衆より御内沙汰被為在而之事哉ニ承候、十月廿四日主計殿より  
 欵申物之寫ニ、琉球之儀茂諸郷同前地頭之様ニ名前書  
 右之書役を以御返詞有之、亦此通何と相連之事も無之、御見合相濟被相  
 載せ有之、是則琉球御掛為被成次第之系圖ニ可有御座、  
 返答候得共、自分御見合之為ニ御寫被置度候付、今暫借與候やうニ承  
 然共本書略写ニ茂候哉、只連名計ニ而、其時分何御役  
 知、且主計殿被為濟候上者、同書役上村半助殿も同断被置度との趣共  
 又者何年間杯と申儀者一字茂書載せ無御座候間、私他  
 承、任其意置、同十二月下旬休右衛門殿被差返候事』  
 書より見當為申事共考合せ、實名以下銘々右書ニシテ

申上候、姓名者連名之次第計、本書之通ニ而御座候、

琉球

新納右衛門久詮

右者、寛永廿年夏御家老、承應三 甲午年御物座今之御勝手方  
 被為聞、寛文四辰九月九日依願御免と系圖ニ有之候、

(領注)  
 村田越前守經定  
 本田下野守親貞

阿多内膳忠榮

右者、自系ニ茂琉球在番奉行・横目頭等為被勤筋相見  
 得、在番系圖江者相良權兵衛次伊東仁右衛門上ニ相見  
 申次衆と有之、

得、尤横目頭者今之大目付衆ニ而候得共、右御役系圖  
 御掛之初ニ候半、

ニ茂年号不詳と有之候、明曆三酉十二月四日病死之事  
 南聘紀考ニ書述

置、追而可書入  
 被為聞候半、  
 新納又左衛門久了

右之久詮子ニ而、寛文三年繼先業為家老職下知、御物

座諸改惣預聞、琉球且異國之事、元禄八年三月五日依

願御免与自系ニ御座候、是ハ御勝手方より被為聞候半、

諏訪左右衛門兼利

右者、琉球在番系圖ニ茂相見得、猿渡新助次キ鎌田左

京上ニ有之、左候而新助事寛永廿未春下向、正保三酉夏上國与有之ニ而、考候得者、琉球方被為聞候者、其後之事ニ候半、寛文二年十一月旅御家老今之若年寄、同三年御断、同六年十月十二日病氣快旨被聞召上、御用日又者御談合等之節、評定所今之御江家老座出席可申談旨被仰付、同七年二月十六日御家老、同十一年御断之由候、是茂御勝手方被為聞候哉、御家老記又ハ子孫へ者相知可申候、

新納又左衛門久了

右者、〔頭注〕 左右衛門殿御免後ニ茂再被為聞候欤、御使役誼〔此事ニ而考レハ〕 訪采女兼延系傳ニ、寛文十二年九月廿八日新納又左衛門殿琉球方御奉行兼延江取次役被仰付、延宝二年琉球御掛ノ事ヲバ琉球方御断申上、御免与有之候間、兼延者又左衛門殿忒度目被為聞候節之掛御用人ニ候半、  
申筋考ハレヌ』

新納近江久辰

右者、延宝五年三月十九日評定所御詰役評定所今之御家老座、御詰役ハ今之若年寄、并口事物詰今之評席・横目頭今之兼役、同六年九月監琉球之事と自系ニ有之、大目附系圖ニ者延宝五年三

月十九日より天和二年十一月廿七日迄、貞享五年三月八日より寄御役被仰付、同年九月廿三日御免与有之、若年寄之記ニ者、延宝五年三月十九日より御詰役・横目頭兼役、元禄十一年十一月廿七日御家老座詰御免と有之、然者近江殿ニ者只今之若年寄ニ而、大目附御兼務より琉球方被為聞候半、

新納美作久珍

右之久辰子ニ而、貞享三年壬三月十六日評定所御詰役今之若年寄、同五年九月廿三日横目頭今之兼役、元禄八年正月廿五日御國遣座今御勝手方御詰役、同十年六月十日御家老、同十一年十一月廿七日監琉球之事与自系ニ御座候、  
川上式部久重

新納市正久珍

右者、元禄十二年五月十日より同十四年十月十日迄御國遣座御詰役若年寄ニ而、宝永元年十二月廿一日依願御免、  
右之美作殿ニ而、貞享五年九月廿三日より元禄八年正月廿四日迄者横目頭、同廿五日より御國遣座御詰役、

其外前条同断御家老ニ而、琉球方被為聞候へ共、其後右之式部殿江被仰付置、宝永元十二月式部殿御免以後再被為聞候半、同七年二月十日<sup>四日</sup>死去、とも

嶋津中務久貞

備前 中務 内記

主税 中務 主殿

右者、宝永三年三月十一日より同十二月二日迄横目頭、同三日より同七年四月十四日迄若御年寄、同十五日より御家老、享保三年戊九月、吉貴公琉球使者越来、

郷原金太夫久雄

后轉号聲翁

王子被召列御參勤、同十二月二日王子江戸出轎、内記殿被相付候と、御上下記ニ茂有之、同十四酉八月御城代嶋津將監久殿死去後欵、吳國方御掛ニ而、元文三年未正月吳國方御手當等被為改、同四年七月朔日於大坂卒去、此中務殿御勝手方被為聞候哉、御家老記ニ者相知候半、若不被為聞候へ、享保之頃表御家老衆より琉球掛与之御尋、此時分之事ニハ無御座哉、

種子嶋弾正伊時

隱居名 栖林

右者、元禄十二年□三月二日より宝永二年十月九日迄横目頭、同十日より同七年六月廿八日迄若御年寄、正徳元年卯六月廿一日より御家老、是亦御勝手方被為聞候哉、御家老記等見合申度事ニ御座候、

堀四郎太夫興昌

右者、享保十二未十二月廿三日大目附格、同廿八日大目附、同廿年卯七月十一日御家老、寛保元酉二月十五日依願御免、

右者、寛保元酉二月十五日より大目附・御勝手方添役、同日鎌田太郎右衛門殿御勝手方御家老、延享四卯七月廿三日御勝手方御家老、同五年正月廿一日御免、  
一 平田善太夫為被書置物逆、御役元基と欵申物有之、其内ニ而御家老御役之条下ニ左之通、

一 琉球掛之儀茂上代分而相見得不申候、新納右衛門久詮事御家老職ニ而、承應三年甲午御物座方<sup>當時之御勝手方</sup>、其已前琉球江被仰渡候御法令とは、慶長十四年琉球来降已<sup>勝手方</sup>被仰付候砌より相動為申ニ而茂可有御座哉、其儀分

後、同十六亥九月十日伊勢兵部少輔貞昌・町田勝兵衛尉久幸・比志嶋紀

明ニ者相知れ不申候得共、其已前琉球江被仰渡候御

伊守國貞・樺山權左衛門尉久高御連判を以、琉球并先嶋等より御年貢物

法令之御書付等、大略御家老御連名ニ而候処、寛文

被相定、三司官宛ニシテ被仰渡、同十九日右同四老連名ニ而琉球國諸

元年辛丑ニ者右之久詮一名を以三司官へ條書差遣、

可条を以被仰渡候御書付等之事ニ可有之、左候得者十四年来降已後寛文

其上久詮事同三年癸卯退役ニ而、其子新納又左衛門

元丑年迄五拾三年者表御家老兼御支配ニ而、寛文元年より新納右衛門殿

久了継先業、御家老職御物方之下知琉球方被仰付候

江琉球奉行被仰付、夫よりハヶ年已前より右衛門殿へ御物座方被仰付置

候故、右之時分より初而御勝手方ニ相付為申筋ニ可有御座、此中此一册

新納近江久辰江琉球方被仰付、元禄十一年戊寅久辰

差出御までハ俄之事ニ不相届、其後存付此段書入置、乙未正月六日也

子新納市正久珍御國遺座方之事御家老ニ而、父ニ相

襲、琉球方被仰付候、然者琉球掛之儀者、前文之通

新納久詮より相始り候哉、乍然前条ニ相載候通、御

勝手之儀北郷佐渡久加代ニ起り候付、其節より琉球

方之儀茂御勝手方之兼務ニ為被仰付ニ而茂可有御座

哉、重而相考可申候、

右之通一ヶ条寫取申候、然共地頭系圖琉球之場江者佐

渡殿名前無之、右衛門殿より右次第見得居候ニ付而者、

久詮より始り候与之説、弥左様ニ可有御座、御勝手方

之儀北郷久加代ニ起り候筋、平田氏被申置候得共、如

何可有御座哉、寛永十年之頃三原左衛門殿御物奉行之

時分、道之嶋代官等其已前ニ被遣候衆者、歴々の御

吟味ニ而、諸納物等無案内之衆ゆへ、毎年御物御不勝

相成候事故、左衛門殿御吟味ニ而、徳之嶋代官者出水

衆中より、大嶋代官喜界嶋無分嶋内也者國分衆中有馬丹後江被

仰付、寛永十四五年迄者滯嶋、段々仕向相替、尺筵上

納等、其以前者老枚宛積登せ候物之由候処、船中ニ而

技替、下品之筵相納候ニ付、丹後工夫を以拾枚老束ニ

シテ荷作仕候事ニ初而為申付由、其外勤向之事共、丹

後末子付参候者書留置候旧記ニ有之、且寛永十八年八

月、伊勢兵部少殿より嶋津彈正殿へ被上候状ニ茂、御

物向御出目之事を專御沙汰ニ而、拜借銀返上等三割利

ニ被為究候、諸人述懐ニ罷成事不被為思召付与之御吳

見など、専右之左衛門殿御物奉行之時分被為沙汰候儀

ニ被考合せ事候間、正保二年右之久加ニ御物奉行不被

仰付、以前より左衛門殿ニ起り為申共可申坎、琉球之

儀者難相知候へ共、道之嶋ハ初發より御勝手方御支配

ニ御座候半、

一安永已後之しらべニ茂御座候哉、諸役人御賦方并勤方



大概と申物ニ而者、琉球之事共左之通見當申□<sup>(候カ)</sup>

御勝手方

一 御家老之内一人差分被為勤候、兩人ニ而勤之節茂候、一人勤之節ハ、若御年寄之内又者大御目附之内より忝人被相勤、隔月ニ忝人月番被為勤候、

一 御勝手方兩人ニ而被相勤候節者、一ヶ月ツ、隔月ニ月番被為勤、表方茂一人ツ、一ヶ月ツ、繰廻、月番被為勤候、

一 御所帯方之儀諸事引受、田地山方・浦方・海川方・萬差引、御參勤料、江戸・京・大坂御國諸御入用弁諸納方勘弁有之、琉球・道之嶋諸嶋迄も差引有之、右之通相見得、何分ニ茂琉球御掛之儀者 光久公

御代

新納右衛門殿より為相始者有別儀間敷、左候而其以来被為間候次第者、前文地頭系圖ニ相見得為申連名之通ニ可有御座与奉存候、然者昔年ハ御勝手方計御掛共難申、阿多内膳殿ハ大目附衆より被為勤、新納近江殿ハ若年寄・大目附兼務ニ而茂被為勤候筋ニ被考申候、

其外右連名之内諏訪左右衛門殿・嶋津中務殿杯御勝手

方被為掛候欵、御家老記又者夫々御子孫江者相知候半、

若右御人数之内御勝手方江不被為掛御方茂候ハ、其

御代表より御掛共可申欵、享保十六年六月之御通達欵

ニ、琉球へ鳥獸持□<sup>(渡カ)</sup>候節、御勝手方へ申出、御免之上可

持渡と御座候得者、其頃者御勝手方御支配と被考申候、

右、昨日御尋之事ニ而、俄ニ取しらへ、急ニ難糺候

付、是等ハ御不用之事ニ茂可有御座候得共、萬一茂

御探索之御手掛ニ茂於相成者本望奉存、誠ニ乍長文

見當且思出次第、以乱筆如此御座候、尚得与糺候ハ、

相知候事茂可有之候得共、急卒ニて難及力御座候、

若御見合成所茂候ハ、御書被差上、此冊者後日

御返被下候へハ仕合御座候、萬々成合候様宜被仰上

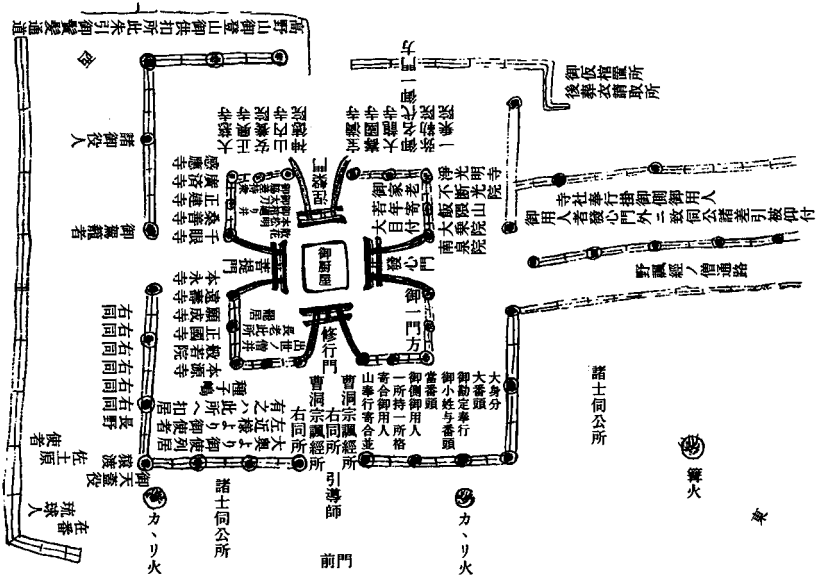
可被下候、以上、

午十月九日

伊地知小十郎

『當日朝四ツ前、御免駕無之内休右衛門取ニ被參、直差上候事』

相良休右衛門様



未七月九日より

先度差上置候御庄考并琉球掛衆、又ハ一向宗御禁止来由等之引證ニ可相成事、其以後見當為申事共、書拔差上置候間、相叶候御都合茂被為在候ハ、御庄考之卷末其外夫々御引分ケ御冊相添被置被下度、猶重而考合せ改撰仕可然与奉存、如此奉頼上候事、

『琉球掛衆一件愚考ニ可補入置事』

伊地知太郎兵衛覺書

『朝重』

一 扱又大膳正四番目の子成か、琉球に罷下事ハ、元和元年乙卯に琉球地頭蒲地備中守の時分、琉球三司官豊見城親方と申人鹿府江上着之時分、筆者ニ頼度由被仰候ニ付、手前より望申候而召列られ罷下云々、又或ハ大和より琉球為御奉行被相詰るメハ、河上又左衛門殿在番也云々、又或ハ其時代琉御在番に相良権兵衛殿御詰云々、又あるハ中山國の古より楳船と申船作、何方江の往来可有処ニ無其儀候而、浮世人の堪忍難成折節な

る故、又推参の我等、其比阿多内膳「忠榮」正殿琉球地頭ニ而  
ましましては、我等前より三司官に申理候へハ、鹿府に  
て御事済、楫船仕上之事云々、又或ハ御地頭阿多内膳  
正殿へも一禮之為ニ可罷登云々、

右通蒲池備中・阿多内膳兩人琉球地頭鹿府より掛持  
為被勤筋ニ相見得候間、琉球御掛之初発ハ、地頭と  
相唱為申ハ明白御座候、左候得者先比見當考置候か  
ハ、琉球地頭之初者新納右衛門佑久詮初而名頭ニ書  
載有之候故、其通哉と考上置候得共、最早元和元年  
ニ茂蒲池備中地頭被勤居候ニ付而ハ、右衛門殿以前  
より為初居事無疑候ゆへ書抜、此段追考申上候間、  
此中差上候帳末ニ御編添被置可被下候、奉頼上候、  
以上、

壬七月九日  
伊集院喜左衛門様  
伊地知小十郎

(表紙)

天保六年未五月吉日  
『扣留』

於琉球大和人唐人江面會御禁止  
一件愚考 此卷末ニ冊添置

宇留満の嶋并沖繩嶋一件私考

『此一冊ハ、御側御用人衆より書役内田八郎次殿内分被  
遣御尋之趣有之書綴遣候扣留也、漫ニ他見無用可致も  
の也、

「ハリ紙  
一うるま

伊地知季安書

琉球之事を申候哉、又別處ニ而候哉、  
一沖繩人

琉人之事を申候哉、又別島人を申候哉、

覺

うるま者琉球之事を申候哉、又別處ニ候哉預御尋、  
乍不束愚按仕候成行、左ニ申上候、

右うるま之儀、古來區々ニ相見得、元禄十三辰年致板

行候和歌八重垣ニ者、うるまの國琉球を云与書載せ、

又和爾雅ニ茂琉球与載せ、左仮名ニウルマノクニと付

置御座候間、世上大形其通心得居候人耳可有御座、乍

然右之古證髓ニ不相知由、抑うるまと申詞者、

五十代桓武天皇四年ニ被死候中納言家持為被撰と坎承候

萬葉集ニ、大和國辰市之事候哉、辰の市うるまの清水

云々有之由、自其式百餘年相過キ、

六十六代一條天皇正曆三年ニ被卒せ候紫式部之女、大宰

大式高階成章か妻ニ而、

六十八代後一條天皇之御乳母被相勤、三位迄昇進為被仕

女之為被著置狭衣与申物語ニ、うるまの嶋の人云々、

又右之

天皇御即位より式拾五年相過キ、

六十九代後朱雀天皇長久二年ニ被薨せ候大納言公任卿集

に、

「新羅」

しらすのうるまの嶋人きて、こゝの人のいふこともきく  
しらす云々、餘者末に同文載せ置候、又夫より四拾六

年相過キ、

七十二代白河天皇應徳三年為被撰後拾遺集ニ、東のかた

へまかりけるに、うるまと云所にて源重之、あつま路

やくゝをうるまといふ事ハ行かふ人のあればなりけり

と有之、是者美濃國に永祿之頃比、宇留間城与申城共

見得候間、彼邊地名ニ茂可有御座哉、又應徳より百餘

年相過キ、

八十二代後鳥羽天皇文治三年為被撰千載集ニ、うるまの

嶋の人こゝにはなたれきて、こゝの人のものいふを聞

もしらでなん有といふ比、かへり事せぬ女につかはし

ける前大納言公任、おほつかなるまの嶋の人なれや

我ことの葉をしらすかほなると有之、又夫木集に中務

卿親王、なかめばやことの葉たにもかはるなるうるま

の嶋の秋の夜の月、又玉吟集ニ茂、よそに聞うるまの

嶋のうるさくはいひたにはなて思ひ絶なんと有之類、

大形皆賣ると買ふとの縁に為詠歌多御座候、然處前文公任卿集ニ者現在しらきのうるまの嶋云々被書置、何そ少茂可疑事無御座儀明白差見得候へ共、公任卿薨去後百四拾餘年相過キ、右之文治三年為被撰千載集より、如何様其頃迄者誰茂何地与存居候程之事ニ而哉、適公任卿しらきのうるまの嶋云々、慥ニ為被書置しらきの与申文を被為刪、只うるまの嶋云々被載置御座候由、夫故後世ニ相成、うるまと申嶋何地共不相知様為相成處より、為致註ニ茂御座候哉、勝地咄懷篇与申書ニ、千載集右之詞書共工夫為仕与相見得、こゝにはなたれ来与いふにて、此國の外の嶋なる事ハ明らかなりと書置、弥何地与申儀者不考當筋相見得候、扱又前文紫式部之女三位賢子茂大概公任卿与年代同時ニ候間、彼か狭衣ニ為書うるまの嶋茂、原文ニ何そ琉球との證□茂不見得ニ付而者、大形公任集ニ為被書置通、こゝの人の物いふも聞もしらてなん有といふ比と有之頃之事ニ而、矢張り新羅のうるまの意ニ而為被書置ニ茂可有之与被考合せ事ニ御座候処、  
【公任卿なとより四百三拾餘年後後世之人右狭衣之抄を書著メ々々々々】

れ候洛陽之紹巴【茂不書述、し、下紐与名付置、作者不詳物ニ何様之按據有之、うるま者琉球也と註仕候哉、甚不審之至、元禄板之和歌八重垣又ハ和爾雅等ニ琉球を云抔為註茂、専此下紐之註文ニ據候半欵、外ニ古證与申程之儀、白尾氏抔御國ニ而者博覧之人候得共、未被見當由御座候、然共公任卿集ニ、しらきのうるまの嶋云々為被書置證據現在残居候上者、別段下紐之註仕候もの、按證共不見届候【只琉球也と書候分ニ而者】而者、其儘信用難仕、勿論弥新羅之屬嶋ニ御座候ハ、神功皇后三韓御征伐以来、新羅等朝貢仕砌共者彼地ニ相付候嶋人共茂、種々貨物等積參、方々賣廻為申筈、左候得共全躰吳域言語不通、殊更其時代迄者文字等茂日本國未被相行、地名等何与書候抔与申沙汰ニ未成立頃之事ニ而、只彼此互ニ貨物を賣ると買ふとの用談共漸相通候位之砌、彼方此方積廻候而物賣る嶋人共ニ候故、此方之人者何与無く此方之詞ニ而賣廻の嶋の人与申呼、何そ訖与嶋名ニ為名付詞ニ茂有御座間敷、夫故古歌ニ茂賣る哉かほと云縁を被取詠、中務卿歌茂買るなる賣る間の嶋の秋の抔、秋の茂商にかよひ、源重之

のこゝをうるまといふ事は、行き買ふ故の様ニ縁を取  
被詠候事共ニ而、大躰うるまの趣意茂相分り、あな勝  
ニ新羅計ニ申掛候詞ニ茂有御座間敷、萬葉集ニ辰の市  
うるまの清水云々、又拾遺集ニ茂、人丸なき名の辰  
の市とハさはけともいさまた人越たるよしもなし杯為  
詠歌共者、専大和國辰市ニ為取向歌ニ可有御座、又秋  
柏カシうるまや河邊カハなども冠辞考ニ引載せ有之由、此等ハ皆  
嶋人共ニ無構、只市と云に、専縁を取り為詠歌ニ御座  
候半、然處琉球國之儀言語不通者同断候得共、

五十代桓武天皇延暦廿三年ニ弘法大師入唐之砌、為被作

文ニ留求与被書置、『性靈集  
にあり』

五十五代文徳天皇仁壽三年ニ智證大師入宋之節、琉球ニ

漂着候事を、三善清行者琉球國与被書置、又同事を宇  
治大納言被為著候今昔物語ニ者琉球國与被書置、又嶋  
の部ニ入而茂、長門本平家物語ニ者おきなハと書載有  
之類、段々古證著數乍有之、うるまと為申古例者、只  
下紐之註文ニ前文通見得候外者、白尾氏茂未被見出由、  
然者袂衣之儀者乍古書茂、自其式百餘年以前より右躰

格別成知識達、為被書置古文ニ、代々髓ニ琉球國与相  
見得、歴然差知来候國号之筋ニ、今更茂被相考申事候  
処、右之袂衣『紹巴四百餘年の』ニ後世より下紐を畫添候節、何故ニうる  
ま者琉球也と註仕置候哉、畢竟しらぎのうるまと公任

卿為被書置詞書を、千載集撰之節しらぎと云文字為被  
省より、次第ニ後世相成何地共不分明、只こゝの人の  
ものいふを聞、しらざる事共ハ琉球茂同様故、下紐を  
書著候者『節』前件通しらぎのうるまと為被書置證據等茂  
未及見聞、無稽ニ誤而右様琉球也杯為註置筋共ニハ無  
御座哉、乍然白尾氏茂、うるまと者賣買するより為出  
詞ニ而、只今茂清國・沖繩等より通商仕茂同断、且賣  
物を問と云茂小間物店杯之間是也と被書置、私ニ茂此  
賣問と申詞ニ付而者段々工夫仕、うるまの間ニ暫之語  
氣茂御座候得者、賣るゝ待の約言欵共考付候へ共、決  
而賣廻る之約言ニ而、船中ニ為掛詞ニ可有御座、

八十五代後堀河院貞應二末三月、北条義時代摂州兵庫辻  
村新兵衛・土佐浦戸篠原孫左衛門・薩劔坊之津飯田備  
前三人被召出、為被定置船法之内ニ、盗まれ候船を買

取廻船すへからざる事、若荷物積廻る船或へ右之船何方成共可差廻杯申詞、其時代ニ茂相見得、第一荷物を積廻る用ニ社為作立船ニ候得者、方々物を積廻る意ニ而、惣躰船名者皆何丸角丸と呼来候筋ニ者無御座哉、然者丸与申茂廻る之約めニ候得者、うるまの嶋の人と者賣廻る嶋の人と可申意を、詞之轉約ニ而右様呼来候欵、夫故賣ると買ふと云縁語ニ、代々古歌茂詠来候半、唯今俗言之見廻を、見まむ・見まう杯讀候時之廻字を強く約め候得者、メと欵モと欵相轉し、モとマとハ五音相通候間、元来船者乘廻る物故、マハルのハ文字を俗言略して船之惣名を只丸と唱来候欵、左候而賣廻る舟者、又其マルのル文字を省き、只うるまと呼ひ、間ノ字ハ廻るの約めニ而、専船之事ニ相當候半、夫故の々字を入れ、うるまの嶋の人と唱来候筋ニハ無御座哉、只今茂船中ニ間と申詞不少、皆少ツ、義ハ可替候へ共、表之間・洞之間、積荷の方よりハ積間、又船便等よりハ船間、又直走を真鱸、又折走を間切、帆を真帆、梶を真梶と欵、又丸木と唱候舟茂有之、又本船の用向つ

たへ廻る小舟を傳間共相唱、大形間を付呼来候詞拾餘事相殘居、且海士をあまと訓申茂為類詞ニ而、海底迄(頭註)又考に、海のはてハ四海皆天なれハ、海をも天と云欵、あみ廻る生計ゆへ、約めてあま共申筋欵、右之内ニ而事つて廻る小舟を傳間杯唱候間ノ字ハ必傳丸之略言ニ而、直ニ船之事ニ相當候證據哉と被考合せ候間、うるまの間茂賣廻るの約言ニ而、傳丸同様ニ船を為指詞共ニ者無御座哉、勿論現在之實事者、代々古歌ニ茂賣ると買ふとの縁語ニ詠来、且詞書ニ茂こにはなたれ来と有之ニ而、船より外ニ可来物茂無之候得者、大形賣廻る之約言ニ而、商船之事ニハ有相違間敷、但右之真辰の市ウるま杯者、只賣廻之意ニ而船哉、嶋之事ニ茂不相掛候欵、且又帆杯者帆を十分ニ掛候をまほといふよし、八重垣ニ茂相見得、真心同様褒め詞共申説御座候得共、其通計ニ茂有之間敷、折走を間切与申節共ハ、必湊杯乍見掛順風思通不參、無是非茂廻来着詞ニ而、褒め詞ニ茂不相聞得、然者間切与者廻来着之訛ニ茂可有之欵、何分ニ茂うるまの嶋の人杯多く、の々字被遣置候ニ而、抑者嶋名ニ為定躰之口氣無之様御座候、然共終ニ者言語不通之嶋方より商ひニ參、方々貨物杯賣廻る嶋人共之惣

名等敷罷成候半、夫故後世より何地共難相知御座候処より、我人致註段ニ相成説茂區々ニ申散し、右通國号等儘ニ相知來候而、漢名ニ者琉球、和名ニ者沖繩など申來候地、又者蝦夷地等迄茂泛くうるまの嶋哉うるまの國など申呼向ニ為成立筋ニハ無御座哉、脱躰淺陋之管見集ニ引書も不見届、究而何分共難申事候へ共、白尾氏些緒共為被申置事有之、本ニシテ前後年代等之行違ひ旁得与相考為申愚按、先如此御座候、

沖繩人者琉人之事を申候哉、又別嶋人を申候哉、預御尋、是者本琉球一嶋之島名ニ而、白尾氏者琉球本名と被申置、何分ニ茂弥琉球を申ニ者無疑事ニ御座候得共、内分ハ少々替目有之、粗相糺候趣左ニ申上候、

一琉球者古來一ヶ國ニ建來候地ニ御座候へ共、内分ハ先嶋迎宮古嶋・八重山嶋等茂有之、又諸離レ与唱候而、海上為隔屬嶋ニ者伊江嶋・伊平屋嶋・前慶良間嶋・後慶良間嶋・粟國嶋等之類、其外道之嶋ニ者喜界嶋・徳之嶋・大嶋・永良部嶋等、某々(其カ)相別居候得者、惣躰一

國に取合せ、惣名を琉球國与相唱、其内ニ而沖繩嶋を都會之嶋ニシテ、是を本琉球共申由御座候、此嶋之形ち細長く、沖に繩をはへ為申様御座候故、沖繩嶋と申由、長門本平家物語に、ゑらふ・おきなハ・きかいかしま杯見得候茂此沖繩ニ相當、抑之旧名ニ而、本より和名ニ候間、和爾雅之琉球左假名ニウルマノクニ与為付置茂オキナハと改直度事ニ御座候、慶長十四年再ひ御拜領為被遊以後、同十六年九月御家老伊勢兵部少輔殿杯四人、御連印ニ而、三司官等江為被下置一紙御目錄ニ茂、惡鬼納并諸嶋云々有之、近代享保十二未六月、就大御支配種子嶋彈正殿より撰政三司官殿と為被宛候御目錄ニ茂、琉球諸嶋与被書出、段々嶋名被相立、左候而沖繩嶋之肩ニ本琉球与相見得申由承及候、左候へ共本琉球ニ而琉人共、平日互之唱ニ琉球与申人ハ一人茂無之程之事ニ而、皆一統只おきなと申由、古來其通ニ候哉、中山傳信錄ニ茂、屋其惹と書載せ御座候、皆沖繩之略ニ而、是ハ無疑事ニ御座候、

右式ヶ条ニ付、先日ハ適預御尋候得共、疾ニ相良氏



より内々承趣有之、返事認掛候折柄ニ而、彼方江細

事申遣候間、別案不及認上筋欵、為伺置事ニ御座候

得共、相良氏江者去ル廿三日より時々考付次第、前

後書散シ、及四五度申遣、其内ニ者誠ニ枝葉無用之

説茂過分有之、何分共一筋ニ片付候説ハ無御座、畢

竟名高き老先生より預下問候ニ付、幾説茂只伺越、

何れ之筋共愚按難片付、總裁之儀者萬事任賢慮候向

ニ申遣置候間、定而篤与被相調、段々取捨之上宜向

ニ為被仰上筈与奉存候、然者今更私式不入事共乍存、

適御内分致承知趣茂御座候間、相良氏へ段々申遣置

候内ニ而、愚存を以片付候ハ、大概右之向ニ茂可有

御座哉、存寄且其後茂案付候事共有之、如右書綴申

候間、空敷扣置茂非本意事与奉存、此段違成候得共、

貴様迄入御覽候間、何角不差隙様宜御取成奉頼候、

左候而此冊者御覽被為濟候ハ、被返下度、追々見當

之事共御座候ニ付、其筋ニ奉頼候、以上、

但相良氏ニも右之趣大形申遣置候事ニ御座候、為御心得候、

未五月廿九日

伊地知小十郎

内田八郎次様

『此冊最早御内用者被為濟候半、然共私之為世学段々臆説考付候事、此  
中書綴置、相良氏ニハ時々書付遣、後日之手扣ニ仕置候、左候処先朝  
御咄ニ而ハ、御内用も未被為濟由候間、誠ニ貴様迄任御沙汰差上候付、  
御覽被為濟次第御返可被下候、以上、

六月十八日

未六月廿八日伊集院兼誼返書抄

一うるま嶋御札之趣細々御考付之程も被仰聞、琉球名ニ

而者無之と狹聞之私さへも承居候、御考之通新羅邊之

屬國ならん、好古之衆へも咄候処、極而何方と申事考

寄無之故、外方博古之向へ聞繕候やう申候、兩

三年以前琉人参府之折、當地之人とよみ候長歌ニ者、

南之嶋と為有之由候云々、

同七月廿九日同断

一うるま嶋之事御細考致感心候、小林仙次郎と申博古之

者方へ遣置候間、吳見も御座候半、追々写調差出可申

候、去々琉球人出府之折、琉球人貢考一冊借得候、

誠ニ一通り之書面にて、其内うるま一件之分書拔置候

間差上候、近世誰人も琉球ニ而ハ無之筋書綴申候書、  
段々相見得候、云々、

琉球入貢紀略

うるまのしま琉球にあらざる弁

笈埃隨筆・夏山雜談に者、うるまの國とハ琉球なりといへり、是ハもと狹衣といふ冊子に、うるまの島といふことのあるを、紹巴の下紐といふ註釈に、琉球なりといへるによるとミゆれとも謬りなり、うるまハ新羅<sup>ソラヤ</sup>今の朝の屬嶋にして琉球に非ず、自ら別也、其證ハ大納言公任集に、しらきのうるまの嶋人來りて、こゝの人のいふことも聞しらすときかせ給ひて、返りこと聞へさりける人にと詞書ありて、おほつかなるまの嶋の人なれやわか恨むるをしらすかほなるの千載集にハ四の葉に、また本朝麗藻に、新羅國<sup>ソラヤクニカワソラヤ</sup>汚陵島人とも見へたり、これにて琉球ならざることいと分別也、前田夏蔭云、うるまハ透陵の韓音なりといへり、

右者、先達而書付上置候一件、伊集院喜左衛門殿方へ内々糺方頼遣置候処、右之通此度飛脚便より申參、私考通大形符合仕、其上不存珍敷事も有之、第一下紐之撰者不存候処、紹巴ニ而候事も相知れ候間、誤

之起ハ此人ニ御座候、且韓音と申説ハ如何可有之哉、信用難仕候、先冊へ御とぞ添被置、御考合可被下候、以上、

壬七月廿七日

小十郎

八郎次様

伊集院兼誼ニ再問兼

一琉球入貢紀御書被下、欣踊之至悦見仕候、狹衣の下

紐を書添候人誰ニ候哉疑居候処、紹巴ニ而候事相見得、うるまを琉球と誤候源茂決而可為此人、然者紹巴ハ大納言公任なとより四百三四拾年相後れ、天正十五年

大閤西征ニ茂薩藩へ付來候人欵と覺罷在候、弥其通候得者、大貳三位の狹衣ニ被書置候うるまの嶋ハ、公任卿同時代之事ニ而、しらきのうるまの嶋人と心得候て、為被書置ニ者無疑被考候得共、爰許の人申候琉球人とハ、言葉通兼候事新羅<sup>ソラヤ</sup>と同しく、紹巴ハ薩州ニも來候人ニ而、琉球也と推當為申註釈と相見得、却而未世ニ誤を流候筋ニ可有御座、何分ニ茂四百餘年以後の人為差證據茂不引用候而、致註候計ニ而者不足信事と存候、況元禄中ニ令板行候八重垣等者、又其より百年以後之

事なれハ、是は決而下紐の誤を承て、誠と覚而之事ニ  
 者有疑問敷、扱又本朝麗藻と申書ニ、新羅國汚陵嶋人  
 □心得候由、何より之引書御座候、何頃某氏之撰ニ候  
 哉、可成ハ原文御寫貫可被下候、乍然うるまハ汚陵の  
 韓音との説可有如何哉、迂陵島と書候を直にウルマと  
 讀候半、シマの假名にシノ字を省たる例、下總國相馬  
 郡も本ハ猿嶋郡ニ候得共、猿をサウと轉し、島のシを  
 省キ、サウマと訛るゆへ相馬と書候哉ニ、國史略の内  
 にて見覺申候、又薩摩も神代山の幸彦の完なと狩て幸  
 し給ふ國ニ而、本ハ幸島サシマならんをサチマと申より、字  
 も終にハ薩摩と書哉ニ説有之、左候へハ猿嶋哉幸嶋の  
 島ノ字ニシノ字を省く例ニて、ウルマと讀申筋ニハ無  
 御座哉、弥其通候得者、韓音ニてハ有之間敷、返  
 〳〵右之書原文御求得可被下候、代〳〵古歌ニ賣ウルと買カウ  
 との縁ニよミ來候得者、何れ成日本詞の様御座候、扱  
 又先便上置候愚按、小林氏迄為被遣由、淺陋之野考汗  
 顔此事ニ御座候、乍然平田大人高弟欵ニ而、皆共當時  
 日本ニ而茂無双之博古と承及候間、此等之高評承置候

ハ、何之賜ニ茂難易、琉球永年迄之重宝ニ存候間、少  
 茂無心置御教示成給候様、宜御頼被置可被下候、万々  
 奉頼候、以上、

壬七月廿八日

伊地知小十郎

伊集院喜左衛門様

於琉球大和人唐人江面會等不相成段、享保四年被仰渡置  
〔本文面會被差留候事ハ、天和中之冠船ニ平山次郎右衛門ナト宝嶋人ノ  
候、右根本何様之儀より事起り候哉、私勘考無之哉、先  
筋ニ而、唐人ハ面謁候処、段々相疑候趣、國史略口相見得候間、其後不  
日者預御尋、享保之御吟味者何様共事証不奉存候得共、  
相成向ニ被仰渡候半、南聘紀考ニ細事書述置也〕  
去年來琉球之由來段々書しらへ、南聘紀考と名付三冊草

案仕置、未及脱稿可入高覽躰ニ無御座、然共大抵心付候  
事ハ、先日即答ニ茂粗申上候得共、猶又始終之大概考合  
せ候処、元來琉球國者上古より日本屬嶋ニ而、南海嶋々  
數多有之、逐一嶋名上古不分明、薩隅邊より最寄入口之  
嶋を屋久・多祢と申ニ付、喜界・永良部・沖繩嶋邊迄茂  
惣名を屋久多祢、或ハ只南嶋共申呼、隋煬帝杯已前より  
日本江者往來も為仕筋ニ被相考、次第ニ嶋之名茂相分候  
得共、中々數多ニ而漂着之大和人何れと難弁知ニ付、銘  
々其嶋名并船掛等被仕候湊之名、又ハ有水處共津口ニ碑  
文建置候様被仰渡候事共、續日本紀等ニ相見得、延喜之  
比迄ハ大宰府ニ相付、赤木等朝貢為仕躰被載置、其後漸  
々御下知茂届兼候欵、又中華ニ茂漢・魏・唐・宋・元之  
世迄ハ、全未服從、式百餘年之間ハ獨立之荒俗ニ而、御  
國より漂來之船共ハ盜賊等敷生計ニ而茂候欵、弘法大師

者留求之虎性と被書置、三善清行ハ喫人國之様被記置、  
薩摩方十二嶋之内ニ而、惣名を鬼界共申呼、永萬年中鎮  
西八郎為朝漂流ニ而嶋人共靡隨へ、一子舜天被殘置、是  
國王之閉祖ニ御座候、長門本平家物語ニ茂、十二嶋之内  
ニ而、口之五嶋ハ日本ニ隨ひ、先き七嶋ハ未相隨と有之、  
其内ニ永良部・沖繩・喜界と相見得候間、古來沖繩ハ十  
二嶋之内ニ入居候者無別条、然處 御元祖得佛様嶋津庄  
薩隅日三州守護職并十二嶋地頭職迄御補任被遊、 御二  
代様より御五代様御代之頃迄御傳領為被遊事、古御文書  
之内ニ相見得候へハ、沖繩茂御地頭所ニ候事、明證不過  
之と被相考申候、然共日本乱世ニ而、南嶋迄之御下知久  
敷不相届故ニ茂候半、明洪武之世ニ相成、初而中華ニ貢  
服いたし、王号并衣冠等迄明國之風ニ相変し、其後五六  
十年茂相過ぎ、弥明江者親敷、日本ハ次第ニ疎遠ニ成候  
故欵、嘉吉年間 忠國公御軍功ニ付 義教公より御拜領、  
其後如形隣好等も修來候得共、朝鮮入之軍役ニ未進有之、  
又疎遠ニ過去、就中當 將軍家ハ朝聘仕候様、 家久公  
御下知被遊候得共、緩怠仕候ニ付、慶長十四年 御人數

被差向、中山王其之外三司官等御當地ニ召捕來、直ニ駿府・江戸迄被召列、國王ハ勿論三司官迄永々末代之事迄無更改様、堅ク誓約之上御暇ニ而、如琉球被差帰、終ニ琉球高茂此御方様御判物高之内ニ被召加候、左候得共大抵朝鮮入之比より唐之商船日本へ通融相止、不自由ニ付、從權現様家久公江御旋之趣被為在、琉球より唐へ右之趣以使札申談候様被仰付、其通相達候処、日本へ和降以後之涯ニ而唐人共別而相疑、剩賈物之内倭品者差返し、拾か年過候而可致渡海趣共申來、段々疎絶之方ニ仕掛候而、琉球甚及難儀、勿論日本茂不自由ゆへ、中山王より毛頭唐へ別心無之趣再三令歎訴、乍漸明國茂疑を散候而、古來之通隔年之進貢願達有之、其後又明曆元年之比韃靼人明國を滅候而、順治帝より琉球江冠船差渡候風聞有之、自然王位・三司官等韃靼人之位官ニ申付、且其首迄茂荆抔仕候へ、此御方様御領國ニ而御外聞ハ勿論、日本之瑾ニ茂可罷成、夫迎唐を離候而者何れ難相立、琉球ニ而如何可被仰付哉、前以御伺被遊候処、同年八月廿二日御老中様より琉球國江韃王より使遣候共、大

勢ハ遣問敷、若右之使者着船之上、琉人髮を剃、韃人之衣冠可着用旨申付候共、其分ニ相心得、何茂不相背様仕可然、右外之儀者御領國之儀候間、光久公可為御計被仰出候由、右次第之訳合ニ而、表向ハ唐支配之中山王ニ御座候故、唐人方へ琉人共より古來申取候趣ハ、先日茂御即答粗申上候通、日本へ通商仕候事ハ、度佳喇人來往ニ而貿易仕候事計古來之通ニ而、其以前ハ琉球茂朝鮮・日本・暹羅・瓜哇等之國江茂通商仕來候得共、慶長和降之後、内實ハ此御方より被差留候故、度佳喇人計往來仕候而、國用相辨候ゆへ、俗ニ宝嶋と申候趣者、唐人ニ茂申聞來候躰ニ御座候、夫故徐葆光書置候傳信録之中ニ茂、倭物ハ大形七嶋産之様書有之と相覺、尤七嶋非屬嶋故不載と有之、又其後之冊使書置國志略ニ茂、七嶋人不滿萬惟寶嶋較大、國人統呼之曰土噶喇、或即倭也、然國人甚諱之と御座候事共ニ而、七嶋外之日本人共來往仕候事ハ、古來唐人江者能々秘來候情実被為推考候間、日本人面會等被差留候茂、畢竟右次第之成行故ニ可有御座、外ニ根本と申程之考付、乍恐先無御座候、前文ニ茂申上

候様、往古沖繩ハ日本屬嶋無別条、其證據ハ沖ニ繩ハ候やう成長き嶋とて、和語ニ而右通名付候事、格別舊遠之名故、唐より琉球國と名付候得共、土地之人今以唐より付候名を申人ハ一切無御座、皆おきなと申由、此事ハ徐葆光も書置、蓋舊土之名ならんと申ニ而、日本より早々名付候事、明證無此上茂、其外證據段々御座候、然共中古日本乱世ニ而、御下知等届兼候時分、明國より追々官人共差渡、何篇叮嚀ニ致教仕候事、式百三十拾年計相過候上、又々家久公御拜領被遊候得者、頓与抑より吳國之様ニ諸人相考、勿論其通ニ不被召置候而ハ難相立國柄、殊更第一御國益ニ茂不相成候故、明曆元年公義之仰出ニ茂、たとへ韓人より首を剃候共、姿兒ハ夫形被任せ置候御趣意等、蛮夷者不治を以治と欵申意味ニ茂可相叶欵、何分ニも唐人共是迄七嶋ハ弥日本共明白ニハ不承付躰ニ候間、萬一面會茂候時者、七嶋人と名乗可然欵、左候へ共一度面會候ハ、七嶋人ハ日本人と申事茂唐人共明白可存知、旁ニ付面會不相成方ニ被仰渡置候欵と愚按仕候、此段先日より可及貴答乍存、毎々來客取込、決

而考違茂可有御座候へ共、早々如此御座候、以上、

戊六月十四日

伊地知小十郎

新納矢太右衛門様

右、琉球在番高田尚五郎殿より無據被問越趣為有之由、伊東仙太夫殿頼之由ニて、早々取しらへ遣之也、

覺

寶島之儀、琉球之手内与從前代申憤、唐人共江茂其間傳有之由候、依之天和三亥年當地江封王使渡來之節、冠船御奉行之付衆・御在番之附衆・足輕・船頭共被召列、宝人与名付候而、封王(儀)宿江被差出、御逢被成候而、互ニ品物贈答有之候、然共右大和衆より之進物者断被申候而受納無之候、來年御渡海之冠船御奉行茂、如何様右之様子等御聞下可被成与存候得共、各迄為心得其節之日帳拔書差越候間、若御尋共御座候ハ、其段可被申上候、以上、

享保三年戊

勝連親方

二月廿日

浦添親方

伊舎堂親方

大脇正兵衛殿

識名親方

天和三年癸亥日帳抜書

十月四日

冠船御奉行御付衆高田茂太夫殿・端山六郎右衛門殿、

在番御奉行御付衆濱田忠兵衛殿・小野甚左衛門殿、冠

船御奉行御道具衆小玉左市兵衛・伊駒兵右衛門、供衆

廿式人、船頭山川之貞左衛門・同三郎右衛門・同木工

左衛門、濱之市甚七、鹿兒島之次郎左衛門・同清左衛

門、右之人数為宝人長史大田親雲上案内者ニ而、館屋

江被差出、兩勅使江進物被進候處、御断ニ而受納不被

成候、進物色立并兩勅使より右人数江進物色立左ニ記、

一扇子四十本 一刻たはこ式百四十箱

一小刀八十本 一昆布八百斤

右、兩勅使江右人数より進物

一書物三十五冊 一勅使自筆七枚

一玉色かのこ布拾四反 一赤木綿布拾四反

一梳三十三包 一櫛七包

一ふた沓疋 一羊沓疋

一焼酎壺

右、左勅使より右人数江進物

一書物七冊 一玉色かのこ布三反

一ふた沓疋 一羊沓疋

一焼酎壺

右、右勅使より右人数江進物

御勝手方江申渡覚写

寶島之儀、琉球手内与前代より申價、唐人方ニ茂其聞

得有之由候、依之天和三亥年封王使渡來之節、御當地

より被差越候人并琉球在番附役之者共、且又足輕・船

頭共宝人与号候而、封王使江被差出、對面候而互ニ品

物贈答為有之由候、當年御當地より被差越候人、右之

様子等承罷越儀ニ者可有之候得共、為心得申越候由、

三司官より去夏申越候由ニ而、右書付差出候、封王使

江日本人致對面候儀、以前より其通有之候而茂、此節先例之通差出候様ニ与者難被仰付候、其上寶島之儀琉球之手内与申儀候儀、不合之事候故、旁以難被仰付事候条、左様可承置候、

右之通申越候様ニ与、琉球仮屋在番親方并仮屋守江可被申渡候、三司官より最前申出候口上書一通并日帳書抜一通可被相返候、以上、

同四年亥

二月 將監

覺

宝島之儀、琉球之手内与前代より申儀、唐人江茂其間得有之候付而、天和三亥年封王使渡來之節、御國之衆宝人与申候而、封王使被致對面候由、去歲琉仮屋方迄申越候趣被聞召上候、然處以前ニ者右通有之候而茂、此節先例之通被差出候様難被仰付候、其上宝島之儀、琉球之手内与申儀不合之儀候故、旁以難被仰付候事候条、其段承知可仕旨、將監殿より御勝手方江之御書付

寫一通、大脇正兵衛殿・佐渡山親方より差下、委曲奉得其意候、此等之御請可然様被仰上可被下候、以上、

同年亥

四月朔日

勝連親方

浦添親方

伊舍堂親方

豊見城王子

蒲生十郎兵衛殿



(表紙)

補增  
明清代替ニ付 公義仰出一件

中山世譜抄

尚賢王尚豊王第三子

『本朝正保元年』○明崇禎十七年甲申春、世子遣正議大夫・金

應元使者吉時逢等、奉表貢方物、并以尚豊王

訃告、兼請襲封、時會中朝兵亂四起海賊阻上

道、應元等留滯福州不得歸、是年 世祖皇帝

掃靖兵亂登 皇帝位、定有天下之號曰大清、

建元順治、

『本朝正保二年』○順治二年乙酉、明朝族氏弘光據福建稱帝、遣

兵陷南京、福王出奔被擒、八月唐王即位於福建、改元隆武、

福州左衛指揮花煜、齋勅至國、世子尚賢遣使モトランシマ日本正保三年也、

毛大用都通事阮士元等、入賀、  
『唐王』○三年丙戌、隆武繼弘光立、復遣指揮閩邦基

齋勅至上國、由是世子遣王舅毛泰久・長史金

思義等、捧表方物入賀、時乃清朝大將軍貝勒、

率大兵入福建、攻破『城殺』隆武、而天下大

定、由是王舅毛泰久・長史金思義及前使金應

元等、隨大將軍貝勒入京投誠、禮部奏言下琉

球國世子尚賢前已遣使請封、而今前朝勅印未

繳乞、遣通事謝必振、奉旨往諭上、世祖從之、

令本國使臣同謝必振歸國、

『金應元・吉時逢毛大用・阮士元・毛泰久・金思義等』

大明兵乱ニ付、琉球より糸商賣之儀、御老中様へ被

得御差圖候処、被仰渡候御内書、

琉球江從大明糸商賣之事、今度彼國兵乱ニ付而、如何

可有之与被存之趣承届候、琉球之儀者如有來令賣買候

様尤存候、恐々謹言、

『正保三年』

六月十一日

阿部對馬守

重次判

阿部豊後守

忠秋在判

松平伊豆守

信綱在判

『光久公』

松平薩摩守殿

貞享二年丑四月十三日、大久保加賀守様より御用ニ

付、相良仁右衛門致参上候処ニ、琉球より毛織過分

ニ薩州江差渡、京・大坂江相拂候由被聞召及候哉と

御尋ニ付云々、

琉球より毛織過分ニ薩州江差渡、京・大坂ニ而相拂候

由被及聞召候、其通ニ候哉之旨、先頃御尋被成候、天

鷲絨少々、毛氈・紗綾・縮緬・縐子・段子・綸子・糸

之類、年々買渡申候、羅紗・猩々皮・毛織之類、終ニ

為買渡儀無御座候、且又巻物之類琉球より薩州江差渡

候儀、中興より之儀ニ候哉、近年之事候哉之旨御尋被

成候、古来より為買渡儀ニ候、先年大明兵乱之節、賣

買如何可有之哉与存相伺候処ニ、有来通買賣仕候様ニ

と、御奉書を以被仰渡候故、不相替致買賣候、毛氈之

儀者向後買渡候儀無用可仕由、去年琉球江申遣候、右

之趣爰元ニ委細不相知候ニ付、國元江申遣、頃日申来

候、以上、

『貞享二年』  
十一月十八日

口上覚貞享四年卯九月大久保加賀守様へ被差上候、  
大玄院様御在府

琉球より唐江買物之品々、銀高并日本より買渡候品々

銀高云々、右之通差渡事ニ御座候故、銀高少ニ而茂被

相減儀ニ候得者、進貢茂不相調、中山王進退相極儀ニ

候条、有来通被仰付被下度旨申越候、右唐買物之儀者

古来より仕事ニ候、前ニ唐兵乱之節買賣如何可有之哉

之旨相伺候処、有来通商賣仕候様ニと以御奉書被仰渡、

乱世之時分茂買渡為申儀ニ候条、弥以不相替被仰付被

下候様奉願候云々、九月七日、  
『貞享四年』

『中山世譜』

『正保四年』○四年丁亥九月廿二日薨、  
尚質王尚質王

尚質王尚質王

『慶安二年』○大清順治六年己丑秋、本國遣下通事周國盛等、

抵閩齋表投上誠、時會下世祖遣通事謝必振、

齋招撫勅及欽賞物件、來臨本國事竣還朝之日、

世子遣都通事梁廷翰等、護送至上閩、由是前

使周國盛與謝必振俱入京、奉表投誠、

『慶安三年』○七年庚寅、世子遣王舅何榜琨・正議大夫蔡錦

等、奉表入貢、併賀世祖登極、其船漂沒未達、

覺

一大明國不殘韃靼人攻捕レ、帝皇ニ相定、琉球國江使者

船を差渡、韃人之作法ニ髪をそり可相隨旨、韃王より

申来候ハ、如何様ニ返詞可申哉之由、琉球より相尋申

候、上古より琉球之儀者大明へ通融不仕候へハ不叶事

候、併薩摩守自分ニ而一着之返詞難申候事、

一大明之隆武皇帝者福州与申國迄被為レ退候由相聞得候、

彼福州与申候所者琉球より渡口之由候、依其萬一琉球

國迄も被為落来候ハ、如何可仕哉之事、  
ハ、其比之風聞ナラン

一右兩条之御返事承候ハ、琉球國へ追付可申遣候、隆武

皇帝なと被為落候儀者有之間敷事ニ候へ共、自然之時

之為ニ御内談申入候事、

以上

『明曆二年』

卯月廿一日

『右ノ朱書ニシテ考レハ、韃人剃髮等ノ御伺ハ明曆元年八月廿二日仰出  
サレ事決シタル上ニ、翌二年ノ卯月又右ヤウノ御手數モ疑ハシキニ似  
タリ、其上 寬陽公 薩摩守様ト申上ルハ、慶安四年辛卯十二月廿五  
日迄ニテ 大隅守様ト申上、其翌日ヨリカ 綱久公薩摩守様ト申上ル  
ニ、右式ノ御伺ニ御部屋栖様ヨリハ如何アルヘキ乎、其故今姑ク慶安  
四年以上ニ置キテ、後考ヲ俟事爾リ』

『中山世譜』

『慶安四年』○八年辛卯、世祖命通事謝必振、同周國盛等

齋勸歸諭世子、并討還明印、然而延至九年壬

辰八月、始抵國、

『承應二年』○十年癸巳春、世子遣王舅馬宗毅・正議大夫

蔡祚隆等赴京、貢方物表賀世祖登極、并繳還

明朝勅印、兼請襲爵、且備言、前朝所賜詔勅、

皆隨王葬、止所賜寧王之勅、存而未葬、故以

其勅齎繳、

『承應三年』

○十一年甲午、

世祖命兵科愛惜喇庫哈番張學

禮・行人司行人王核、為冊封正副使、張學禮

等至福建、修造海船、因海氛未靖還京待命、

十一年以後、本國數次遣使迎接、慶賀使臣皆為海賊所阻、故不復遣使、

『御記録方調カ御家老座御帳留カ、先年寫置申候』

韃靼王より唐を攻取、琉球江茂冠船差渡候由相聞得、

御國元より江戸江被申越、御老中様江被仰上候処ニ

仰渡之旨有之候、右ニ付松平隠岐守様江茂被仰達候

儀共有之候次第、

覺

一先年韃靼順治帝皇より琉球國江使者船差渡之由相聞得

候刻、於江戸阿部對馬守殿江先々被得御内意候、御使

新納右衛門久益ニ而御座候、其時分對馬殿被仰聞候ハ、琉

球國之儀従前々、大隅守殿江御拜領之事候故、萬事

御公儀より御差圖者無之候、多少分此度茂可為其分候、

乍然琉球者吳國与乍申、大隅守殿下知之儀ニ候時者、

日本同前ニ被思召上候、就夫琉球國江悪キ事出来候得

者、日本之瑕ニ罷成候間、大隅守被申付様者何分候哉

と御尋可有之候条、内々大隅守殿何分ニ被仰候哉、定

而右衛門可承候、可被聞召旨被仰聞候、左様之儀者鬼

角不承由申上候而者、御油断ニ可罷成与存、俄ニ分別

『日本寛永十三年丙子、明國ニテハ崇禎九年、清國ニテハ崇徳元年、明

仕申上候様子ハ、從上古琉球國之義者唐國江相隨致通

ノ思、時ヨリ清ノ太宗國号ヲ濬ト建タリ、其ヨリ六年目、寛永十八年、

融、被免王号、諸事自由を相叶候処、此度韃靼人打入、

辛巳清崇徳六年、琉球國尚賢王ノ即位ニ當テ、王妻孳代々立テ殺サレ、

唐國を過半取申由候、彼韃靼順治皇帝ニ相隨、從琉球

彼方兵乱也』祝儀之使者差渡候ハ、後年ニ自然唐物之代ニ罷成候

刻、面目有間敷候、又今躰ニ而往々順治之代ニ相治候

ハ、今度致無沙汰儀可惡候、一途ニ返詞申儀難成候

間、兼双方可然存由内々吾々江茂被申聞候通申候処、

對馬守殿尤ニ被思召候、乍去双方江能様ニ可被仰様子

ハ如何与御尋候間、當分ハ兵乱ニ付、海上賊船多候而

不自由ニ候、賊船茂治候時分ニ使者船を差渡可申与、

先以此節可申述候、左候ハ、其間ニ唐之兵乱相治、何

方ニ成共代茂可片付候、兵乱之間ハ海賊絶間敷候間、

右之分ニ可申述与被存由申上候得者、其段可然被思召

候、於其儀者右之大赫大隅守殿御内存書付を以可被仰

上候、讚岐守殿江先ニ御内談被成可被仰上由候、此旨

則 殿様江申上候處、御内證茂左様ニ被思召候条、早

ニ可被仰上由候而、御書付被仰付、又對馬守殿江右衛

門致持参候、其後五日御座候而、御返詞ニ琉球之儀大

隅守心次第可申付旨 御詮之由被仰出候事、

一 右之通琉球江被仰渡候、三司官より返事ニ茂、定而無

相違可被申候得共、使者之謝老合点不申候哉、祝儀之

使者〔日本慶安三年〕「貞之年迄」ハ可相待候、夫過候ハ、又ニ韃靼方より

使船可差渡旨致約諾、唐江罷帰由候事、

一 其〔慶安三年、尚質ヨリ何傍琨ト蔡錫等ヲ遣シタルトモ船没達セハ〕已後〔承應元年辰八月〕「周國盛等」ニ謝老琉球江罷

渡、順治皇帝御代祝之使者同心仕唐江罷渡由候、此一

卷江戶江不被仰上、於御國御返詞御座候、依其近年國

頭王子江〔承應二年九月ノ事〕江参上之時分、以御書付酒井讚岐守殿被得

御内意、御老中江被仰入置候、其時分御書物共御方留

帳ニ茂可有之候得共、此度茂書寫差上候事、

一 右之首尾を以從順治皇帝冠船琉球江可被渡由候而、於

福州大船を造調候、琉球より之使者茂其船ニ而可被送

渡由、當年長崎江参候船頭申由、葉丸刑部左衛門長崎

より申越候、又琉球より使者之為迎船、當春唐江船を

遣候、其船兵船稠敷候福州之湊口より遇獵船罷帰候、

其傳ニ茂右之風説無相違由候、左候ハ早ニ 御公儀

御内證被仰入置肝要ニ御座候事、

一 最前より琉球國韃靼人ニ相隨候儀、 御公義ニ茂御殘

多被思召上様子ニ承及候得共、最早祝儀之使者差越候

上ハ、清冠船候所者不及是非候、自然琉球之王位・三

司官以下官人之分、韃靼人之位官ニ申付、首之なり等

迄右之仕合ニ候ハ、如何可有御座候哉、於其儀ハ右如

申候日本之瑕ニ茂罷成、 殿様之御外聞茂可惡候間、

琉球江急度然々之人被差渡、三司官談合を以、此度茂

此中唐より相談渡候躰ニ萬事御座候ハ、冠位官等茂

可被請候、萬一韃靼人之為躰ニ申越候ハ、罷成間敷由、

達而申断、冠船を茂追返候欵、又ハ彼使者其儀無合点

追返候儀茂罷成、還而彼方より事を茂仕出候ハ、討

〔正使張孝礼・副使王瑛等〕

〔元年未七月〕

〔明曆元年〕

〔謝必振〕

〔順治六年〕

〔慶安二年ノ事也〕

果申躰ニ茂可有之哉、是ハ急ニ御内談肝要之儀ニ候、  
度々出合申候琉球國ハ、唐江通融無之候而者不叶由候  
得共、御外聞旁日本之瑕ニ罷成候者、琉球之不自由成  
分ハ堪忍被仕候様ニ可被仰付候、左様ニ成立候与て、  
韃靼方より琉球江兵船を差渡候儀在之間敷与存候、日  
本ニ相隨、此御家より御下知被遊候段ハ無其隠候処、  
韃靼之使者参候而琉球人之頭を刺なと仕候ハ、後年  
迄御難題ニ茂可罷成かと、爰許ニ而者相談仕候、然共  
於其御地能々被成御談合被入御耳、左候而讃岐守様江  
御申分之口上書なと被遊、被得御内證、其上を以御老  
中江御披露專一ニ御座候、就夫茂冠船参候通ハ早々被  
仰上尤ニ奉存候事、

明曆元年七月十二日

鎌田源左衛門 町田勘解由

新納右衛門 伊勢兵部

嶋津圖書

態一書令啓入候、然者從長崎棄丸刑部左衛門申越候者、

當年之唐船ニ申来候、於福州大船を作調、琉球江冠船  
可差渡風聞之由候、此船便從琉球去々年罷渡候使者茂  
詐隆等也「承應二年巳春」馬宗毅・  
可乘来物音承候通被申越候、其上從琉球之使者為迎當  
曆元年「明  
春唐江参候船福州湊口より帰帆仕候者共茂、右之通獵

船之船頭申由無相違候、乍去風説ニ而者其御地江申上  
候儀難成候故、長崎御奉行・家老衆迄刑部左衛門前よ  
り御尋被申候様ニと申越候処、如其首尾政所江御内證  
申上、唐船江船頭口上書取申候而被差越候、此上ハ可  
為直説与存候間、早々御老中方江御披露御座候而專一  
ニ御座候、就夫韃靼之帝王と琉球國挨拶之段者、従前  
々被得御内意候趣大躰書記、此度中村佐五右衛門罷上  
候ニ、鎌田勘兵衛相加、以両使申上候、口上之通被聞  
召達、早速被入御耳尤奉存候、恐惶、

尚々、右之冠船ニ付而、琉球江誰ニ被仰付被差渡候  
ハ、乍不及申上誰人ニ可被仰付哉、從其御地必御

指南御座候様ニ被仰上尤ニ存候、

【明曆元年】  
七月十三日 政有

久則

久詮

貞昭

久通

嶋津筑前殿

嶋津中務殿人々

熊令啓入候、先以〔定行主〕 隠州様御機嫌能可被成御座与奉存

候、然者琉球へ韃韃王使者越候通風説在之由、先日大

隅守方へ申越候、就夫於江戸御老中衆被致披露候、其

趣ハ以飛脚 隠州様江申上由、此方へも申下候、右之

御返詞在之ニ付、此度琉球へ使者兩人差越候、其趣令

口達候条被聞召達、御披露頼存候、恐々、

〔明暦元年〕

九月十三日

政有

久則

久詮

貞昭

久通

遠山三郎左衛門殿

〔元禄元年ノ書ニハ、此遠山ハ長崎在動  
山岡十兵衛様御家老トアリ〕

覚

一琉球江從韃使者船遣候由、長崎江遍風説在之通、彼地

江召置候物聞之者承、御政所江申出、以通事唐船江相

尋候處、十四番船之船頭福州ニ而右之物沙汰在之由、

殊ニ為其用意大船を作候由承候与申候、彼儀大隅守不

承候而不叶仕合候故、江戸江申遣候、就其御内證酒井

讚岐守様へ申上、其上ニ而御當番松平伊豆守様江以嶋

津中務被致披露候、  
〔久茂〕〔八月六日〕

〔追補〕覚

從韃韃琉球江使船可差渡催ニ而、於福州大船造候風

説御座候由琉球人申候、就其長崎ニ付置候家來之者、

當年參候唐船之船頭口柄承届候得者、實事之由申越

候ニ付、從國元〔本ノマ、〕昨晩右之通注進仕候、尤於琉球韃之

〔此御使中村佐五右エ門・藤田勘兵衛、七月十二・三日ノ御用封ニテ覺  
使者如何様ニ可申渡儀者未相知候得共、多分如韃人  
府出發下見ヘレハ、八月五日江戸着テラシ〕

位官衣服等迄も相改申儀茂可有之候、左様ニ候ハ、

琉球人迷惑ニ存、右之為躰ニ罷成間數与可申儀ハ必

定ニ候、雖然韃人押而申付候ハ、左茂可有御座候哉、

韃之旗下ニ罷成候儀さへ残多存候處、右之躰ニ候ハ、

日本之御外聞惡儀に茂候はん欵（氣）と念遣ニ奉存候、此段如何可有御座候哉、為可得御指圖如此御座候、以

上、

明曆元年乙未

八月六日

松平大隅守

『史本ハ此八月ノ肩ニ明曆二年トアレ共、明曆元年ナルコト明驗アリ、其上島津中務久茂モ、二年閏四月 光久公御供ニテ下国ナレハ、六月ヨリ御国ナレハ江戸ノコトニハ合ハザル也』

松平伊豆守殿江中務持參候口上書之留

其已後間候而、大隅守登 城可仕旨、八月廿二日被

仰出候、左候而讚岐守様御老中御間之御使被成被承候

者、琉球國江韃王より使者遣由候、人数大勢遣ニ而者

在之間敷と被思召候、若右之使者琉球相渡候而、髮を

韃人之衣冠をも着用可仕通申候共、其分ニ相心得可

申（候カ）□右之外之儀者領國之儀候間、以計可申付由被

仰出候通、

『追補御筆寫云』

今日被 仰出候、琉球國江從韃王人数などを遣儀者

有之間敷与 思召候、若使者琉球國江相渡候而、髮

を剃衣裳等遣候ハ、彼方之申通ニ可仕候、從前々唐江相從、其衣冠等致受用躰ニ候間、其通ニ可仕候

由被 仰出候、其外之儀者様子次第大隅守計を以可

申付之由、酒井讚岐守ニ而被 仰出候、以上、

明曆元年乙未八月廿二日

以使者被申下候、得其趣此度高崎惣右衛門・本田六左衛門与申者琉球江渡海申付候、此上ハ琉球王位茂吳儀被（イ）間敷候無口能 仰出、乍恐我々茂安堵仕候、此旨

御披露頼存候、以上、

鎌田源左衛門「政有」

明曆元年  
九月十三日

町田勘解由「久則」

新納右衛門「久詮」

伊勢兵部「貞昭」

嶋津圖書「久通」

遠山三郎左衛門殿

右ニ付、松平隠岐守様江鹿兒嶋より御使者竹宮内記

被差越候、



薩摩守殿為御見廻以飛札為申入候間、令啓候、其元無

別条薩州無事ニ在國候哉、承度存候、於江戸大隅守殿

弥御堅固御在府候由被仰越候間、氣遣被成間敷候、隨

而大明韃王代替ニ付而、先年琉球より使者指遣候処、

于今帰帆依無之、當春迎船指越候得共、福州賊船多有

之ニ付而、湊江入津難成故、中途より乘戻候節、獵船

ニ琉球使者之儀相尋候得者、福州ニ堅固ニ而有之候、

近日琉球江舟を可相渡為催、於福州船作事仕、其船琉

球人共乗せ可渡旨承罷帰候付而、琉球より其旨注進依

有之、早々江戸江被申越候処ニ、則大隅守殿言上被成、

去廿二日ニ御城江被為召、此度韃王より琉球江使

者相渡候ハ、其旨を不相背様ニ仕、其外之儀者大隅

守殿可為御計次第旨仰出候由、大隅守殿より預御飛

札候、一段之首尾ニ候、琉球國之儀唐江無通候得者、

萬事難成由内々承候間、韃王より冠船被相渡候ハ、何

分ニ茂相隨候而可然存候、定而江戸大隅守殿より様子

可被仰遣候間、急度其旨琉球江可被申越候、我々儀來

二月三日比ニ當地發足致參勤候間、大隅守殿江萬端御

相談可申候、恐々謹言、

松隱岐守

『明暦元年』

九月六日

定行

嶋津圖書殿

伊勢兵部殿

新納右衛門殿

鎌田源左衛門殿

町田勘解由殿

自 隠州様薩摩守へ為御見廻御使者被遣候付、被成下

御書、謹而拜見仕候、先以御勇健被成御座由、恐悦ニ

奉存候、薩摩守事茂別而息才罷在候間、可易貴慮候、

然者琉球江順治韃王冠船指渡候由ニ而、於福州舟作有

之、右之冠船渡海之刻、先年琉球へ指渡候使者も可乘

來通、長崎江來着候十四番船之唐人申ニ付、彼地御政

所江御内證之上ニ而、唐人之口通事ニ而承究、江戸江

可申遣相談仕候処、琉球より茂先年之使者迎船遣候ニ、

海賊多有之ニ付、福州川へ入儀不罷成候而、獵船ニ相

尋候通細之申越候、右之趣同前ニ大隅守方江申遣候、其様子ハ先日以使者申上候条、可相達与奉存候、御書物ニ而如蒙仰候、江戸御老中様江披露被申上候処、御請合も能御返事存候ニ被仰出、我々迄安堵仕候、就夫此度両使琉球江差渡候、巨細先便ニ申入候条、不能詳候、誠為入御念御書面、忝儀共ニ御座候、此旨可然様宜預御披露候、恐々、

『明曆元年』  
九月廿三日

政有 久則

久詮 貞昭

久通

遠山三郎左衛門殿

琉球之儀ニ付而、為案内竹宮内記方被差越御状之趣致披見候、然者此度琉球國江韃王より使者船を相渡候風聞依在之、長崎御政所江被伺、唐船江被相尋候処、福州ニ而取沙汰有之由申ニ付而、江戸江注進被申遣候処ニ、大隅守殿御老中江被仰達候へハ、去月廿二日ニ大隅守殿御登城候処、琉球江韃王より使者差遣候へハ、

其旨ニ相隨旨依仰出、其元江御左右有之ニ付而、則高崎惣右衛門・本田六左衛門方琉球へ渡海被申付之由、内々上意之趣大隅守殿より被仰聞候、首尾残所茂無之与珍重存候、委細者御使者へ口上ニ申合候、恐々謹言、

『明曆元年』  
九月廿七日  
松平隠岐守  
定行

嶋津圖書殿

伊勢兵部殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

鎌田源左衛門殿

尚々、琉球之儀遠嶋之儀ニ候間、御仕置も御六ヶ敷儀ニ候処、無相違 仰出珍重存候、将又別紙ニ書付被差添給候、被入御念令祝着候、

『右御書留を證據ニシテ如此先年書置候を見出し候、先

『南聘紀考ノ抄』  
日勿卒是ニ而書立為申事候間、為念猶又探索仕、右之  
明曆元年乙未五月朔日、顯姪右京久友之任琉球、濱田

御書留見出申候処、果而誤も少く御座候、酒井謙岐守  
主水・東郷惣兵衛・鎌田四郎兵衛政友・勝目志摩助屬

様より御承知為被遊事を、松平伊豆守様より御承知申  
行、六月十六日山田有隆得代出港、○七月前此藥丸刑

部左衛門上藩邸於長崎、聞福州來船十四言韃王詔造海  
船於福建、將以遣使招撫琉球、乃飛報于藩府、時

公在江戸、國老島津圖書久通・伊勢兵部貞昭・新納右  
衛門久詮・町田勘解由久則・鎌田源左衛門政有等相議

曰、琉球自古為薩附庸、今為韃韃被變衣冠、匪獨公  
恥、似本邦亦為瑕瑾、莫下如乎豫聞 公速請 大家

命以戒琉球備上之、於是十二日使中村佐五右衛門・鎌  
田勘兵衛如江戸、因國老島津筑前久頼・島津中務久茂

以聞于公上、八月公乃議之酒井忠勝讚岐、而使久  
茂以請松平信綱、二十二日閣老信綱等召 公諭之曰、

宜令琉球聽韃王命、若其絕之國難亦速、勿敢招禍於其  
他事、惟汝所令、九月久通等奉 命、乃遣高崎惣右衛

門能乘・本田六左衛門親武渡海諭 旨、  
二年丙申、尚質亦聞韃王將驍遣使於琉球、不豫請裁以備

之、恐必有跲、乃以飛報、蓋高崎等未達故也、八月以  
聞 大家、

御書留見出申候処、果而誤も少く御座候、酒井謙岐守  
主水・東郷惣兵衛・鎌田四郎兵衛政友・勝目志摩助屬

様より御承知為被遊事を、松平伊豆守様より御承知申  
行、六月十六日山田有隆得代出港、○七月前此藥丸刑

部左衛門上藩邸於長崎、聞福州來船十四言韃王詔造海  
船於福建、將以遣使招撫琉球、乃飛報于藩府、時

公在江戸、國老島津圖書久通・伊勢兵部貞昭・新納右  
衛門久詮・町田勘解由久則・鎌田源左衛門政有等相議

曰、琉球自古為薩附庸、今為韃韃被變衣冠、匪獨公  
恥、似本邦亦為瑕瑾、莫下如乎豫聞 公速請 大家

命以戒琉球備上之、於是十二日使中村佐五右衛門・鎌  
田勘兵衛如江戸、因國老島津筑前久頼・島津中務久茂

『中山世譜』  
『明曆二年』  
○十三年丙申、本國鑄錢名鳩目、先是用中華錢、後自鑄

錢通國用之、其錢漸減、故是年命復鑄焉、  
『寬文三年』  
○康熙二年癸卯、海氛稍靖、聖祖遣張學禮等奉詔勅及印

一緞幣五十疋至國詔乃順治十一年所頒、勅則康熙元年所頒也、論祭故王尚豐實王  
無冊封、  
祭焉、封世子尚質為中山王時國殿未有修造故于勅曰、爾國

尚質移居大美殿、  
慕思向化遣使入貢、世祖章皇帝嘉、乃抒誠、特頒恩賞、  
命正使兵科副理官張學禮・副使行人司行人王垓、齎捧

勅印封爾為琉球國中山王、乃海道未通滯閩、多年致爾  
使人物故甚多、及學禮等奉掣回京之日、又不將前情奏

明、該地方督撫諸臣亦不行奏請、迨朕屢旨詰問、方  
悉此情、朕念爾國傾心修貢宜加優卹上、乃使臣及地

方各官逗留遲悞、豈朕柔遠之意、今已將正副使督撫等  
官分別處治、特頒恩賞、仍遣正使張學禮・副使王垓、

令下其白贖前罪暫還原職速送使人歸國一應勅封事上、宜  
仍照世祖章皇帝前旨、行朕恐爾國未悉朕意、故再降勅

諭俾爾聞知、爾其益殫厥誠、毋替朕命欽哉、故諭 詔  
曰、帝王祇德、應下治協於上下靈承中於天時上、則薄海

內外、咸知朕意、爾其益殫厥誠、毋替朕命欽哉、故諭 詔  
曰、帝王祇德、應下治協於上下靈承中於天時上、則薄海

內外、咸知朕意、爾其益殫厥誠、毋替朕命欽哉、故諭 詔  
曰、帝王祇德、應下治協於上下靈承中於天時上、則薄海

內外、咸知朕意、爾其益殫厥誠、毋替朕命欽哉、故諭 詔  
曰、帝王祇德、應下治協於上下靈承中於天時上、則薄海

內外、咸知朕意、爾其益殫厥誠、毋替朕命欽哉、故諭 詔  
曰、帝王祇德、應下治協於上下靈承中於天時上、則薄海

內外、咸知朕意、爾其益殫厥誠、毋替朕命欽哉、故諭 詔  
曰、帝王祇德、應下治協於上下靈承中於天時上、則薄海

內外、咸知朕意、爾其益殫厥誠、毋替朕命欽哉、故諭 詔  
曰、帝王祇德、應下治協於上下靈承中於天時上、則薄海

內外、咸知朕意、爾其益殫厥誠、毋替朕命欽哉、故諭 詔  
曰、帝王祇德、應下治協於上下靈承中於天時上、則薄海

通道罔不率、俾為藩屏臣、朕懋績鴻緒、奄有中夏聲教

所綏無間遐邇、雖炎方荒略亦不忍遺、故遣使招徠、欲

俾仁風暨於海濱、爾琉球國粵在南徼、乃世子尚質達時

識勢、祇奉明綸、即今王舅馬宗毅等獻方物、稟正抒誠

進表、繳上舊詔勅印、朕甚嘉之、故特遣正使兵科副理

官張學禮・副使行人司行人王垓、齎捧詔印、往封為琉

球國中山王、仍錫以文(マ)等物、爾國官僚及氓庶、尚其

輔乃王、飭乃候度協乃藝守、乃忠誠慎又厥職、以癡休

祉綿於奕世、故茲詔示咸使聞知、

○本年冬王遣王舅向國用・紫金太夫金正春等赴京、奉

表獻方物謝襲封恩、併上疏(マ)、臣捧讀勅諭、恭知聖旨、

因臣使物故甚多滯闕日久、將正副使併督撫諸臣處治上、

臣恐懼無地、但中外均屬臣子、臣躬承天庥、不能少為

諸臣之報、而反重為諸臣之累、臣何人、斯豈能宴然、

伏乞上命、還學禮等原職、聖祖嘉王恭順、特賜王緞

幣二十疋、著為例、

(表紙)

明清乱中琉球之義  
御伺  
公義仰出始末之愚考 草案

昔年大明韃靼代替之節、琉球國殊之外為及配慮事  
有之、太抵左之通御座候、

一 正保元年申年、當中山王先祖尚賢代亡父尚豐繼目之儀、  
先例通明之思宗皇帝江進貢船より願越候、折柄韃之順  
治皇帝中國ニ討入、大清与國号为建替即位之年ニ而、  
彼地兵乱最中、海賊道を遮り、琉球使者孰茂帰船難叶、  
福州江三年留滞為仕事有之由御座候、  
一同二酉年、明之貴族福王於福建即位有之、弘光と改元

いたし、其勅使琉球江来着ニ付、尚賢より茂賀慶使為遣由御座候、

一同三戌年、福王茂無程清之軍勢ニ被為追伐、明之唐王相繼於福建即位有之、隆武と改元いたし、是亦勅使琉球江来着ニ付、同様賀慶使為差遣由、然処清之將軍福建ニ攻入、唐王を殺し、剩琉球より唐王等三朝ニ為遣置使者共迄、清之北京江為列越由、然者前代ニ尚賢より襲封為願置訳等、禮部共より及奏言、左候ハ、明代之勅印取束差出可相願之旨、順治皇帝より通事謝必振と申に諭方を命せられ、致留滞居候琉人皆共同船ニ而来着有之、右旁兵乱之事共 寬陽院様懸而被聞召及就而者、琉球より糸商賣之義杯如何可有之哉、御老中様江被得御差圖候処、

御内書

琉球江從大明糸商賣之事、今度彼國兵乱ニ付而如何可有之与被存之趣承届候、琉球之儀者如有来令買賣候様尤存候、恐々謹言、

【此御文書 寫茂從御前被相渡候御記 録奉行より為差出由、外ニ式通、一通ハ末ニ有之、略ス】

【正保三年丙戌】 阿部對馬守 重次判 六月十一日

阿部豊後守 忠秋判

【光久公】 松平伊豆守 信綱判 松平薩摩守殿

一同四亥九月、明淨兵乱中未受冊封、尚賢義者逝去仕、差次之弟尚質を世子ニ為取立由御座候、

一慶安二丑年、尚質代前件之謝必振より於琉球段々招撫之諭方有之、何れ清江之賀慶使不遣候而難叶、来寅年迄者可相待、相過候ハ、又々使船可渡来与之約束ニ而

致帰唐付、尚質より護送使且上表使等差遣候処、福州江者同頃着合、謝必振皆共如北京為列越由御座候、

一同三寅年、尚質より始而清朝江進貢船ニ而賀慶使為差遣由、於洋中其船漂没仕不相達之故、約束茂致相違候姿ニ為相成由御座候、

一同四卯年、右次第ニ而及失約候処、順治皇帝より又々謝必振ニ命せられ、北京江列越候琉球使者等同船ニ而翌辰八月来着、猶又申論、可成明印茂可返上向ニ諭方

為有之由御座候、

一 承應二巳年、尚質又々進貢船ニ而、順治皇帝登極之賀

慶使差遣、襲封之願茂申越、尤明代之勅印茂王之葬【每

隨入例ニ而、外ニ者無之、唯尚寧未葬ゆヘ是計差出、【任せ】

餘者形行為申出由御座候、

一同三午年、順治皇帝より兵科副理官張学禮・行人司行

人王核と申者を冊封正副使とシテ福建ニ差遣、大船之

修造有之、海路未靖ニ付渡海無之由御座候、

一 明曆元未年、去々年【琉球より】為差遣賀慶使等未相帰付、當春迎

船差渡候処、海賊甚多、福州川口難乘入、獵船江相尋

孰茂冠船便より可乗帰与之音信承得、為帰趣琉球より

相聞得、且右之風聞専於長崎有之、【詰合】 葉丸刑部左衛門より

り御政所江窺内意候而、當年來朝拾四番唐船之船頭江

以通事承合候処、琉球江冠船用迎於福州大船造調、琉

球より渡居候使者茂可乗せ來物音無相違段承届、【即】 鹿兒

嶋江申上越、折柄 寛陽院様御参府年ニ而、御家老嶋

津圖書久通・伊勢兵部貞昭・新納右衛門久詮・町田勘

解由久則・鎌田源左衛門政有等、琉球國韃靼へ相隨候

義ハ 公義茂御殘多被思召上様子ニ承及候処、最早賀

慶使差遣、右次第付而者不及是非、自然韃之使者來着

候而、王位初三司官以下之官人等髪を剃り、韃靼人之

衣冠ニ成候様於申付者、日本之瑕瑾ニ茂罷成、殿様

御外聞茂不宜候間、此度者御任撰ニ而誰そ不被渡置候

ハ、此中唐より差渡候謝必振と三司官等萬事談合之

通、衣冠等可致受用此節【茂難計】ハ達而不能成と申断、冠船を

茂追返候欵、又ハ使者不合点ニ而追返儀も難成、彼よ

り事を於仕出者討果躰ニ茂可成立、本より琉球者唐江

無通融而不叶由候得共、日本之瑕瑾、殊ニ此御方様

御外聞ニ茂相掛義ハ、琉球之不自由可成致堪忍可然、

夫逆韃靼兵船者遣問敷、琉球日本に随ひ從 御家御下

知之事ハ無其隠候条、韃之使者若琉球人之頭共刺候ハ、

後年迄之御難題可罷成□被仰談、被達 御聽候上、讚

岐守様江茂被得御内證、御老中様江可有御披露義專一

御座候半与之御吟味、中村佐五右衛門・鎌田勘兵衛両

使を以七月十三日立ニ而、江戸詰御家老嶋津筑前久頼・

嶋津中務久茂迄細々被伺上候処、同八月五日両使江戸

着ニ而、則達 御聽、翌六日中務久茂御口上書を以、

八月六日

【光久公】  
松平大隅守

先御内證より酒井讚岐守様江申上、自其御當番松平伊豆守様へ御披露相成候始末、左之通、

右通被得御指圖候処、其後 公義御吟味茂六ヶ敷候哉、  
日数十六七日間御座候而、同月廿二日被為召 御登城被遊候処、左之通、

【頭注】  
「在口裏」  
覺 松平伊豆守殿江中務持參候口上書之留

今日被 仰出候、琉球國江從韃王人数などを遣儀者有之間敷与 思召候、若使者琉球國江相渡候而、髪を剃衣裳等遣候へ、彼方之申通ニ可仕候、從前々唐江相從、其衣冠等致受用躰ニ候間、其通ニ可仕候由被 仰出候、其外之儀者様子次第大隅守計を以可申付候由、酒井讚岐守ニ而被 仰出候、以上、

【此御文書寫從 御前被相下候、御記録奉行より為差上之由候】  
從韃韃琉球江使船可差渡催ニ而、於福州大船造候風

明曆元年乙未八月廿二日

說御座候由、琉球人申候、就其長崎ニ付置候家来之者、當年參候唐船之船頭口柄承届候得者、實事之由申越候ニ付、從國元右之通注進仕候、尤於琉球韃之使者如何様ニ可申渡儀者未相知候得共、多分如韃人位官衣服等迄茂相改申儀茂可有之候、左様ニ候へ、琉球人迷惑ニ存、右之為躰ニ罷成間敷与可申儀者必定ニ候、雖然韃人押而申付候へ、左茂可有御座候哉、

右通 御筆ニ而被仰出、九月御到来、則高崎惣右衛門能乘・本田六左衛門親武兩使を以琉球へ渡海、右之趣王位・三司官等江被仰渡、其時代御家老衆者勿論、倭琉一統之安堵ニ為罷成 仰出ニ而、琉球御仕置ニ付而者永年之御

韃之旗下ニ罷成候儀さへ殘多存候處、右之躰ニ候へ、日本之御外聞惡儀に茂候へん欵と氣遣ニ奉存候、此段如何可有御座候哉、為可得御指圖如此御座候、以

【頭注】  
上、  
【史本ニ者明曆二年と有之、誤ニ而候】  
明曆元年乙未

【頭注】  
上、  
【史本ニ者明曆二年と有之、誤ニ而候】  
明曆元年乙未

明曆元年乙未八月廿二日

【頭注】  
上、  
【史本ニ者明曆二年と有之、誤ニ而候】  
明曆元年乙未

明曆元年乙未八月廿二日

【頭注】  
上、  
【史本ニ者明曆二年と有之、誤ニ而候】  
明曆元年乙未

明曆元年乙未八月廿二日

【頭注】  
上、  
【史本ニ者明曆二年と有之、誤ニ而候】  
明曆元年乙未

明曆元年乙未八月廿二日

規鑑共無此上義奉存事御座候、

(天保十一年)  
子四月廿四日

一前件通承應三午年 順治皇帝より琉球江之冊封正副使張學禮・王核江詔書被相渡、於福州大船修造茂出来候得共、海賊之靖を帰京<sup>を恐れ</sup>ニ而、九ヶ年相待居候内に順治皇帝茂被崩せ、為被留置琉球人茂多くハ物故いたし、康熙皇帝即位より屢被相糺、右之使臣等遲悞之罪と相知れ、官職を免し可被處治之处、別段之恩旨ニ而如本令還職て、寛文二寅年、新帝之勅書ニ先帝之詔書茂持添、同三卯六月琉球江来着、其比王城者焼、尚質假宅大美殿ニ而冊封有之、明國相滅、清朝より中山王之王爵を為受者此時初而ニ御座候、御當地よりハ桂奎之助忠保・廣瀬次郎兵衛被差渡、内々差引為仕由御座候、於福州大船出来候より拾年目之来着、全蘇海寇を恐るゝにより候と相見得候へ共、此 御方慶長の御征伐より四拾五六年目之冊封使、殊ニ清朝相成初而之事ニ而、  
第一者 御國より何様之御守備欵可有之茂不被計、延く、為相成哉と相考申事御座候、

右、去ル十九日三原藤五郎殿御取次ニ而、御文書三通と先日拙者差上置候此一件之一冊ニ被相添、猶委數御文書之事茂相分り候やうしらへ方被仰付、右通ニシテ廿四日三原氏差出候事、

一橋口今彦殿御取次を以御内蜜之調方被仰付置、子五月八日紙数三拾餘丁細真勝ニ書拔、老冊ニシテ今日九時登城、於奥御書院對談之上差出候事、



(表紙)

琉球國是迄押包來候 日本隨從ニ而  
 和人在番等之内實唐江打明ニ付願意  
 之考草案

琉球國者貧弱之海嶋ニ而、福州閩安鎮より東海中ニ當り、  
 中途止宿之嶋茂無之、東北者日本薩摩州に隣接し、海路  
 茂近く、中途ニ度佳喇其外休泊之嶋ニ不少、隋・唐・宋・  
 元迄者いまた中國江貢服茂不仕、右隣近之諸嶋与致往来  
 為相立来由御座候処、大明洪武皇帝より難有蒙招諭、初  
 而致貢服、國号茂琉球与被定下、王号并衣冠等迄被成下、  
 學問其外船乘文通等之指南とシテ閩人差移、叮嚀御教化  
 有之、漸々國立一統感服いたし、無二之屬國与為罷成由

御座候、然処日本江之聘禮疎略ニ成行、尚寧王代薩摩よ  
 り軍船差渡、援兵等者何方茂遠海難合于間、無是非和降  
 仕、國王初三司官等薩州并江戸迄茂罷越候処、其儀差障、  
 中國二年一貢之先規、其後十年一貢相成、甚迷惑仕、日  
 本ニ相隨候事至極秘密ニいたし、中國之為藩臣儀全無變  
 改趣類ニ申立、併薩州者無外隣國ニ而、度佳喇其外止宿  
 之嶋ニ程能相接、古来其隣嶋江貿易いたし、專其力ニ而  
 中國江茂入貢仕来、其儀耳者有来通ニ候旨無據申理候得  
 共、尚寧一世不相達十年相過キ、〔嗣子〕尚豐王代五年一貢之免  
 許有之、其後又十年目、乍漸如本二年一貢之願望相達、  
 右之和厄故、至極其間難涉為仕由、然共進貢船より載回  
 リ候貿易品等、薩州江不致轉販候而者頓与國用茂難辨、  
 不及是非處より唐和共内實父母同様相唱、日本茂不相替  
 通信仕来、其餘勢迄を以中國進貢茂無懈怠相勤来、左様  
 之為躰故、此儀何分ニ茂忌憚難申上、若哉申上、前件之  
 國難等茂重疊恐多、不得止事押包來候儀共、今更幾重ニ  
 茂奉仰御寬優外無御座、併明代之儀者疾右躰事情御憐察  
 茂為有之歟、五雜組迄内實之為躰書載有之、誠以慚愧之

至、乍奉存儀實事ニ候得者致方無之、從明國茂現在右等之文面雖受、中國冊封而亦臣服於倭与有之、板本抔其儘日本迄茂乍被渡置、王号之冊封使等者不相替被差渡來候、寬大之御處置、國中一統何共恐入奉感服居候次第御座候、殊更尚貞抔代迄者唐和之使者一時出會候茂每々為有之趣迄書載有之、皆共無相違事ニ可有御座、其後和人差扣出會不申向ニ相成、今以其通ニ而、内實者前文通和琉相互不斷在番いたし、通商向之取締等嚴重ニ下知を加、國用等相辨事御座候、然處去ル<sup>(A. 4)</sup>年以來拂・嘆等之吳國船每々渡來、剩嘆人致滞留、難及手事共者追々奉訴通御座候、畢竟和人之面會右様差扣候仕向、留滞之嘆人迄茂押通り、貧弱之琉人迄相對仕故ニ茂可有之哉、冊封使等ニ暫差扣候与事替、嘆人之留滞際限茂不相知候処、今形ニ而者依事頓与辨兼候儀耳有之、就中通商向ニ付而者、重立候官人和琉共不致指揮候而者、取締等行届兼候間、昔年尚寧以來尚貞抔代明朝御處置之通、和人茂不及差扣ニ應接向等何篇出會、相互禮儀を本ニシテ不正之事共無之様諸下知有之方、此上者可被宜与存訳御座候間、是迄之多罪御

恩赦被仰付、何卒御寬優之一筋を以、右躰之仕向替宜様被聞召置被下度奉願候、尤於其通者康熙初年之舊例ニ挽回シ、進貢物調達彼此之便利萬端行届、且嘆人留滞ニ付、小國守衛之一助ニ茂罷成、乍恐中國藩籬之蔽邑却而堅固之方ニ可成行与奉存候間、偏ニ遠方之海國、彼是別段之御吟味可被成下儀、萬々奉願候、以上、

(表紙)

琉球國鳩目錢并加治木錢等之しらへ  
御當國

『丑七月九日、御用部屋より只今御用ニ而罷出候処、

御小納戸早川務御取次を以、此間段々取調為差上置  
此一冊者、去子五月橋口今彦御取次を以為被仰付置古傳之秘説ニ而、當  
一冊茂有之、何与欵御沙汰茂可被遊御事候得共、別  
五月草成候、御届同廿六日山口直記迄申出置、廿九日式日便より御中途  
而御繁雜ニ而何ぞ御取捨者不被遊、決而待り茂罷在  
迄被達、御内聽候答之由、切紙を以承知候之処、七月朔日早川務御取次  
候半、宜可申聞置、又此一条急成御用ニ候間、早日  
を以、今日可差上旨被仰渡差上置候一冊之事ニ御座候半、  
取調候やら被仰付、昼夜取調、同十六日草稿者出来  
候、届務までハ申出候處、當分茂外御用彼此与御混  
雜ニ候間、淨写いたし差上可然旨承知候事、』

琉球國鳩目錢之来由調方被仰渡、太抵左之通御座候、

〔中山世譜〕

尚思紹王

明永樂十一年癸巳、王兩次遣使奉表貢馬、借塞官子・  
副同志久・周曾每等三人入監受學、時山南王汪應祖  
遣使貢馬、成祖各賜鈔及永樂錢、是年模都右等奏乞  
歸省、成祖曰、遠人來學誠美事、思親而歸亦人情也、  
命禮部厚賜衣幣及鈔、為道里之費、以榮之、仍命兵  
部給驛傳、留學者皆賜冬夏衣、

〔中山傳信錄〕

思紹

明永樂十一年、王兩遣使貢馬、借塞官子・副同志久  
等三人<sup>一作三</sup>、入國子監受學、已又與山南王汪應祖  
各貢馬、賜鈔及永樂錢、

右通相見得、琉球國史略茂世譜同様ニ書載せ御座  
候、尤明成祖永樂十一年者 皇朝應永廿年ニて、  
御家者 義天様御代御座候、此時分より琉球ハ永

樂錢通用為仕与被考申事御座候、

〔中山世譜〕

尚巴志王

宣德二年丁未、宣宗遣内官柴山、齋勅至國、賜王皮弁冠服妃綵幣等物、勅曰、今遣内官柴山、前來賜爾皮弁冠服、齋銅錢收買生漆皮各色・磨刀石、勅至爾即領價收買交付柴山進來、故論云々、

〔中山傳信錄〕

五年、王四遣使入貢、宴賚如例、仍賜王鈔二萬一千七百六十錠、

〔中山世譜〕

尚泰久王

明天順三年己卯、王遣李敬等貢馬及金銀器皿、并上疏言、本國王府失火、延燒倉庫銅錢、請<sub>下</sub>炤永樂・宣德間例、所帶貨物以銅錢給<sub>上</sub>價、禮部奏言、銅錢

係中國所用難以准給、宜移文福建布政司、以所貯絲・紗羅・絹布等物、依時值關給、英宗從之、

〔中山傳信錄〕

尚泰久

天順三年、王遣使李敬貢馬及金銀器皿、疏言、本國王府失火、延燒倉庫銅錢、請<sub>下</sub>照永樂・宣德間例<sub>中</sub>、所帶貨物以銅錢給<sub>上</sub>、禮部以、銅錢係中國所用難以准給、宜<sub>下</sub>將估計鈔貫照舊、六分京庫折支生絹、其四分移文福建布政司、收貯紵・絲・紗羅・絹布等物依時值關給<sub>上</sub>、從之、

右通相見得、明宣宗之宣德より英宗之天順三年迄ハ、皇朝足利時代長祿・寛正之頃ニ相當、於御家者 大岳様御代御座候、

〔中山世譜〕

尚質王

清順治十三年丙申、本國鑄錢、名鳩目、先是用中華

錢、後自鑄錢通通用之、其錢漸減、故是年命復鑄焉、

右、清之世祖順治年間者 皇朝明曆二年ニ相當、

於 御家者 寬陽院様御代御座候、前件天順三年

頃より琉球國江中華錢通用不仕ニ付、太抵明曆年

間迄式百年計罷成、明國より其以前永樂・宣德之

比為被渡賜錢茂漸ニ絶少仕候故、何方無免許共、

於琉球鳩目錢之私鑄茂為相始ニ可有御座、夫故萬

曆八年明より渡來之冊使等、最早鳩目之事為記置

由、然者於日本者天正八年ニ相當、其頃より右明

曆二年ハ七拾七年罷成候間、又候相減鑄錢為有之

ニ可有御座候、

〔中山傳信錄〕

女集 錢 女飾

市易之所舊錄云、向在天使館東天妃宮前平地上、後

徙馬市街、今市集移在辻山沿海坡上、早晚兩集、市

集無男人、俱女為市所市物、惟魚蝦・番薯・豆腐・

木器・磁碟・陶器・木梳・草鞞等躰下之物、仕宦家

多不入市、



市中交易用錢無銀、錢無輪廓、間有舊錢、如鷲眼大、

磨漫處或有洪武字、已絶少、今用者如細鐵絲圈、一

貫不及三四寸許、重不逾兩許、貫口封一紙扣鈐記之、

散即不可用、每千值國銀二分二釐明萬曆中蕭崇業・夏子

黑銅錢極輕小、千不盈掬、凡五貫折銀、其平日皆行寬永通

寶錢錢背無字、或有一文字、按、日本寬永元年為前明天啓二年、

質皆赤銅、每百值國銀一錢二分、國朝典慶在壬戌、此日本舊錢也、錢模大小亦與前明萬曆錢相埒、錢

云、琉球市用日本錢、以十當一、為近是、臨時易之、使還則

復其舊、國中舊有洪武錢、永樂十一年又賜永樂錢、

〔頭注〕周禮國史略云、臣又按徐復光錄謂、其國平日皆行寬永錢、註云、日本

天順二年、王請照永樂・宣德間例、所帶貨物以銅錢

寬永元年當前明天啓二年壬戌、非寬永元年屬甲子宜當天啓四年

給賜、禮部寢之、本朝又無賜錢之例、故其國少中國

〔琉球國志略〕

賦役 錢法附

錢法、國中常用寬永錢、每遇

冊封則另鑄小錢、開局兌換、非鉛非鐵、大不及鵝眼、

無輪廓文字、虛其中以受貫、一百可長寸許、或三十

為一貫、或五十或一百、以至一千、皆自成貫、以草

繩穿定繩頭繫札以紙封固、用黑硃小印鈐記之、或貫

繩散斷、印文擦損、則不堪用、事畢則按數繳、還兌

回銀錢、然亦有私鑄、中國人不能辨、時有受其欺者、

誤携以入市市人不受也、五十五貫當球銀一兩、

〔上村七兵衛申分調〕

一維新樣関ヶ原御退被成、撰州住吉之築地之内ニ被成御

座候云々、

一関ヶ原御退之節、堺ニ而米差上候弓削屋九郎右衛門与

申者、加治木ニ被召下、居屋敷を茂被下、御腰物迄拜

領仕候、尤御扶持方を茂可被仰付由候得共、町人之儀

ニ候得者、御扶持願ニ茂不奉存候、只御國之錢鑄調

へ一手ニ賣買仕度旨奉願候付、其通被仰付、於加治木

右之賣買為仕由候、只今之加治木錢与申候者、右之錢

ニ而御座候、雖然利分茂無之、其後琉球賣買之儀奉願、

琉球江罷下り、於彼地死去仕候、近き頃まで九郎右衛

門手代糸屋乘徳与申者下町ニ居付罷在候故、右之趣申

候を茂承置候云々、

右、御記録所江不相知候、慶長十九年十二月廿八日、

右九郎右衛門於加治木歳暮之御禮、惟新樣江申上候、

此儀者其節之日帳ニ相見得候、何様之訳ニ而罷下候儀

不相知候、

〔慶長十六辛亥加治木日帳〕

正月朔日壬寅晴

一已刻被成御差出、削物ニ而御三献参候云々、

一加治木衆中出仕之進上物之事、

一百疋 新納平兵衛尉此間五拾餘人略ス 一包扇子式本 弓削屋

九郎右衛門

〔山川正庵寺古帳〕

祠堂記、文岳和尚以来住持代々記録

文岳和尚代分

一明寶妙鏡大姉者内田常休老妻女也、生國者大明人也、前者慶山与夫婦也、慶長十七年壬子正月七日逝去矣、

大姉從存性於當寺可入祠堂物由、以一使被申理候、就其儀而今之加治木錢廿貫施入也但壹貫ニ付銀子四匁之時分也云々、

宝曆四八月

一錢作り之儀付、加治木役人より加世田衆中是枝利助殿

与申人、為錢作加治木江罷出、二木名字を名乗罷罷居、子孫加治木町人ニ罷成、當分清右衛門与申候、利助殿事寛文九年五月被相果候、清右衛門迄五代罷成候由、

町役より承候、丸石鉢式ツ・石こしき卷ツ、右錢作り

道具之由ニ而、清右衛門于今格護仕候由、先年出火之節類焼ニ而書付無之、錢作候儀何頃之事候哉不相知候

由申出候事、

〔正本在加治木〕

一御分國中錢□就有之、高札持せ申候、然者錢ニ判仕人被定置候間、被聞合何方にて成共かつて次第可有談合

候、錢善惡之儀者三百文持せ候間、被見届可被得其意候、錢數之儀者九十六文宛たるへく候、是者九拾七文にて算用六ヶしき由候間、如此候、恐々謹言、

九月十五日

比宮内少輔

國隆判

喜撰津守

忠政判

下野守

久元判

蒲生

本田源右衛門殿

吉田

比志嶋掃部助殿

山田

新納左京亮殿

〔御引付留〕

覺

高拾三斛者

江田新兵衛尉

高四石六斗者

神村大藏丞

右両人事、先年於加治木錢作奉行ニ被仰付候刻、被召上候同類之衆被返下候間、同前ニ今度可有支配者也、

寛永六年三月二日

喜撰津守印

下野守

鹿兒嶋

御支配奉行衆中

(ハッ紙)

「正文在文庫」

以上

追而申入候、先日江戸より將監殿・兵部少輔殿同前ニ  
申入候一天下鳥目相替儀、弥諸國も其通ニ被仰付之由  
候、御國本之儀者、從往古遣來候錢を遣候てハ可有如  
何哉、併御法ニ者迦レ申間敷与、酒井讚岐守殿内深栖  
九郎右衛門尉殿へ、兵少老・我等為内證右之段申置候、  
然處御打立急々ニ御座候而、其返事をも不承罷立候へ  
ハ、此状昨朝かなやにて令披見候、文躰致披露候へハ、  
早々御國へ可申越由被 仰出候間、此飛脚遣候、鳥目  
相替儀なにと可被成御才覚哉、爰元ニ而各談合申様子  
者、今度被成 御下ニ付而も、細嶋より御國之鳥目つ  
かひ申事不罷成候間、少々大坂ニ而新錢調可罷下候、  
とかく大分ニ不罷下候てハ成間敷候間、御藏衆へ談合  
申、御物之銀子にても鳥目買下可申候、又大坂堺町人

衆へも頼可申款と存候、鳥目相替儀六月朔日よりと御

座候条、余日茂無御座故、如此談合申候、但其元ニ而

被成やうも候ハ、早々可被仰登候、江戸參候状則遣申

候、猶期後音候、恐惶謹言、

寛永十三年

五月廿二日

下野守

久元(花押)

三原左衛門佐様

鎌田出雲守様

山田民部少輔様

弾正大弼様

人々御中

「伊勢兵部文書」

定

一寛永之新錢并古錢共ニ金子壹兩ニ四貫文、勿論壹部者  
可為壹貫文之賣買、若違背いたし、高下之うりかい仕  
におひてハ、双方より其賣買之代一倍為過料可出之、  
其町之年寄弍百疋、其外家一間より十疋ツ、為過怠可  
出之事、



一 大かけ・割錢・かたなし・ころ錢・なまり錢・新惡錢、  
此外不可撰、若えらふ者、六錢をおしてつかふ者有之  
者、或其所に三日さらし、或十日籠舎たるへし、其町  
之過料、右同前之事、

一 新錢江戸并近江坂本にて被仰付候間、兩所之外惡錢に  
至迄一切不可鑄出、若相背族者可為曲事之事、

一 今度新錢被 仰付候上、縦雖為有来、惡錢或禮儀或散  
錢等にて不可取扱事、

一 御領・私領共ニ、年貢収納等ニも此御定之通不可相背、  
右條々堅可相守者也、

寛永十三年六月朔日

奉行

「家久公御家譜抄」

以上

去月二日之御状致拜見候、今度新錢鑄候事就被 仰出、  
於御領分も新錢被申付度之由承候、以来之儀者國々所  
々ニても可被仰付候之間、重而之御沙汰ニ被有之尤候、  
委細者伊勢兵部少輔迄申入候、恐々謹言、

「寛永十四年」  
三月十九日

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井讚岐守 忠勝判

土井大炊頭 利勝判

薩摩

中納言殿

御報

「右同」

急度令啓候、然者先日如御沙汰候、於御國新錢鑄させ  
られ候儀、御年寄衆江被仰入候処、一昨朝從阿部豊後  
守殿兵部少被召寄被仰聞候者、新錢於御國可被為鑄儀  
者先被相延、古錢をもとくのことくつかひ候て尤ニ  
御座候由以御談合被仰出候条、以其心得御國江可申遣  
候由御座候つる間、為後日ニと存、於當座豊後守殿江  
申入候者、新錢御鑄させて可被被下<sup>(ツマ)</sup>之由兼日申候者、  
下々錢遣不罷成、餘之迷惑さの申事ニ御座候、古錢を  
御つかはせ候へは、其上者無御座由申入候、今度茂永  
々古錢を御つかはせ候而、御國などハ新錢入間敷候と  
の儀ハ、遮而不被仰遣候、若又新錢之儀者いつにても

御鑄させ候ハ、左様之御沙汰可有之候なと、被仰候、其御口引を承候得者、新錢を御國ニテ御鑄させ度と思召候を即不被仰付候而、從此方如何敷可存与被思召候御口引之やうに聞得候間、右ニ如申、古錢を向後御つかハせ候ヘハ、新錢之沙汰入不申由申置候、大形永々古錢つかひニ可相究と承得候間、下々無氣遣弥古錢つかひ候やうに可被仰渡候、左様ニ候ハ、最前從爰許被仰遣候錢替り候時之札を御ひかせ尤候、最前將監罷出、豊後守殿へ両度錢之儀ニ付致伺公、得御意候時、加藤勘介殿御案内者にて殊外被入御精、御國下々錢遣無之迷惑かる由、豊後守殿又松平伊豆守殿へ委被仰入候、今度如此被仰出候間、古錢つかひ可申之由被仰出、別而國許くつろきニ可罷成候、忝思召之由從薩加様勘介殿へ御頼候而、右御両所へ御禮被仰、聽而從 大隅守殿御禮可被仰上之由候ハ、弥古錢之落着可相究候、若又被仰様共候ハ、追々可申入候、若下々疑候而古錢つかひかね可申儀可有之候条、御藏より古錢取やり候而下々江茂御ミせ尤候、爰許にて算用

被仕候衆之被申候者、古錢すたり候得者銀子千貫程之御損有之由候、然時者古錢御つかハせ候儀、一段目出度御事候、委細ハ三日中平田狩野介殿為御使被罷下候間、其時分委可申入候、恐惶謹言、

「寛永十四年丁丑」  
三月廿二日

三原左衛門佐

重饒判

伊勢兵部少輔

貞昌判

川上左近將監

久國判

鎌田出雲守様

山田民部少輔様

下野守様

弾正大弼様

人々御中

「光久公御家譜抄」

一加治木町之錢作候もの共、去年以来上方方々江罷出候、其帳相究差上申候、御國江錢作無御赦免候処、御國之者共他方江參、自然悪錢なと作候者、御國之難題ニ可

罷成欵与出合申候間、被召帰候而可然存候事、

此者共方より不参揃内者、御沙汰有ましく候、何  
茂参揃候而より可及被沙汰之由被 仰出候間、重而  
可有御申事、以上、

〔寛永十五年〕  
寅八月八日

〔右同〕

一諸國於在之所之新錢鑄候事堅御停止也、若相隠鑄出輩  
あらは申出へし、縦同類たりといふ共、其科をゆるし、  
御褒美可被下之、自然わきより訴人於有之者、本人ハ  
不及申、五人組可行同罪、并其所之ものまで可為曲事  
者也、

〔寛永二十年〕  
未二月二日

〔兒玉四郎兵衛文書〕

急度令申候、

一今度江戸御奉行所より以御奉書被仰渡候様子者、於奥  
州筋ぎりしたん宗門之族数多被揃捕候云々、

一於諸國在之所之新錢鑄事御法度ニ候、若相隠し鑄出候

輩あらハ可申出候、縦雖為同類其科をゆるし、御褒美  
可被下候、自然訴人於有之者、本人ハ不及申、五人与  
を茂可行同罪ニ、其所之もの迄可為曲事之由、右同前  
ニ以御奉書被 仰出候条、御分國中ニ而茂新錢鑄者  
於有之者、見立聞立早速可被致披露候、天下御置目之  
ことく賞罪之御沙汰たるへき事、

一此中金山江罷居候他國之者、自然當國諸外城田舎へ隠  
居事茂候半間、念を入其所中可被追出事、付他國之行  
脚・俳個人之類召置間鋪候、右之旨聊緩有間敷候、恐  
々、

〔寛永〕

廿年三月朔日

民部少

左馬頭

下野守

地頭

噯衆

〔加久藤噯所案文并萬留帳〕

書物留也

一從江戸被 仰下候御條書一ツ、又萬御法度之御條書一ツ  
髓ニ受取申候、衆中・町・在郷ニ至迄則即申渡候、

「外ニヶ条略ス」

右條々相違御座有ましく候、

寛永廿年

三月十一日

川上半兵衛尉殿

白大炊左

伊弥右

「右同」

一書申候、然者寛永新錢之内、或當國之古錢、或永樂古ひたの類召遣由候之間、檢者を以相撰候条、諸所檢者を被申付、右之悪錢召遣間敷候、就中寛永之新錢悪錢共於有之者、別而曲事之儀ニ候、自然他國より悪錢入来儀も可有之候、又者當國へ隠置者も候へ、見立聞立於申出者、相應ニ御褒美可被 仰付候、可被入念候、恐々謹言、

山民部少輔

「寛永廿年」  
未五月十七日

此状同廿一日ニ馬關田より參候、則飯野へ持せ候

穎左馬頭

嶋下野守

溝邊より倉岡迄合十六所

噯衆中まいる

「右同」

未五月廿一日

右錢之檢者井上帶刀長・蘭田仲右衛門・益山長兵衛尉・

中村権右衛門へ被仰付候、但四人共ニ被召寄被仰渡候、

「右同」

覺 御條書之写

一今度札改被仰付候、若新札不取者於有之者云々、

一悪錢取やりいたすもの於有之者、不移間日鹿兒嶋へ可申出事、「外ニヶ条略于此」

右條々、御与之諸外城江折々可被仰越者也、

寛永廿一年六月十九日

從 公儀之 御条書寫持せ申候、各与中へ可被仰渡候

云々、

申六月廿日

喜入撰津守

根占七郎

川上撰津介殿

城井三郎兵衛殿

「此間五行畧ス」

一同四百廿八文ハ、上納錢之船ちん并悪錢ノゑり出、又

御藏錢ゑり衆へ酒代・墨之代、彼是小遣ニ成候、

小日記ニ而与右衛門殿・仲右衛門殿被相拂候云々、

「申ノ」

八月七日

但八朔ニ川野与右衛門殿參上之時之任方、并永（マ）仲右衛門殿幸領ニ被參候、

覺

「加久藤噺所案文并萬留帳」

一鳥目貳貫四百九文ハ、如錢籠右者人別ニ付、上分之錢

一人ニ卷文ツ、二千三百十人分

也、

一同壹貫四拾文者、如錢籠符代錢ニ付、上分之錢一人ニ

五文ツ、在郷二百分、

二口  
合鳥目三貫四百四十九文

右拂方

一同壹貫文ハ、川野与右衛門殿主従ニ而仕錢として相渡

候、

一同百十四文ハ、右主従ニ而八日分之飯米八舛之代但石

ニ付廿目宛之算用ニシテ、

（ハリ紙）

「御廻文留帳古本在  
鹿籠」

古錢他國江商賣ニ御出被成候条、衆中并町・在郷江所

持為申人於有之者、堅固ニ被申渡、員数急度御物座迄

可被書出候、此節差出不相見得分者、後日捨物ニ可罷

成候、其心得を以可被仰渡候、已上、

「承應三年」

午  
八月廿八日

堀四郎左衛門印

相良土佐

村尾三右衛門

普請方かこしま諸名

谷山より日置迄十九ヶ所

右諸所

噺衆中

「御曳付留」

引付

本高六石  
一高三石  
本高三斗  
一高卷斗五升

高岡衆中  
中馬權左衛門  
右同所衆中  
河添大炊

右者、先年御法度之瀬戸内錢鹿兒嶋へ持参ニ付、知

行・屋敷被召上、寺領被仰付候、雖然前ニ被召置候

ニ付、此節本高之内半分返被下候、

如右可有支配者也、

明曆三年九月十五日

勘解由

右衛門印

兵部印

筑後印

筑前印

圖書印

有馬勘左衛門殿

岩切嘉左衛門殿

新納縫殿助殿

「光久公御家譜抄」

口上之覺

一琉球田島高御前帳今度城火事云々、

一琉球茂京錢遣申儀、御赦免罷成候様ニ前々より訴詔申

上候、此中嶋目錢少ク、世間不自由ニ罷成候、此節之

城普請茂錢過分ニ入儀ニ候得共、國司藏方弥錢手迫

テ難調候間、是非共御赦免被成可被下候事、

右、琉球従古来仕来候嶋目錢、漸々廢不自由ニ付、日

本錢御赦免有度由被申上候、達 上聞候之處、免許之

旨被 仰出之間、可被得其意候事、

右條々、今度城火事ニ付大粧成普請仕、萬端難調御座

候故、訴詔申上候、可然様ニ被仰上可被下候、以上、

寛文元年丑

九月十五日

羽地

以羽地按司被仰上之通、於御當地家老中致相談、達

貴聞、委細以糸書成不成之御返事書記、羽地へ相渡候

之条、可被得其意候者也、

實九月五日

新納右衛門判

三司官中

「伊地知太郎兵衛夢物語為琉人曰當麻筑登之」  
老号心祝

一書付候事、萬倍之事ニ一ツも用に不立、不入我等八拾歳に及、老氣なれとも書付置事云々、我等七拾歳の時分、大和に親類見参、又ハ海舟抔茂作候事、御地頭阿多内膳正殿江も一禮の為に可罷登と、三司官迄披露して罷登、其通相済申候、其時節、大和に古より加治木錢と申而有之たる相捨損たる故、御物に過分有之候得共、公儀の御損亡なるか、琉球國ニ而者鳩目錢遣候間、加治木すたり錢にて鳩目地かね作らせて御為ニ茂候ヘかしと承、老躰なれとも申受持下り、其首尾上納御物座より御所ヘ御引付にて、又重而上洛仕、其首尾能相済、御算用所御奉行有馬勘左衛門殿・廣瀬次郎左衛門殿御目録を下る也、又其比大和一向宗之佛具先年より公儀江取納、不断光院下ニ有之を我等に被下、帰帆仕、其道具地かねにして思様に作り申云々、

右之通琉球鳩目錢并 御當國加治木錢之事共書籍中ニ致散見居候趣、右次第寫集、篤与参考仕候得共、全躰

舊遠之事ニ而、何分究而申上程之引證全備難仕、然共琉球國之儀、明國江貢服仕候以後、永樂十一年尚思紹代明成祖より永樂通寶之賜錢有之、又尚巴志代宣徳二年明宣宗より銅錢之通用相始り、其後尚泰久代天順二年王府失火ニ而、庫中之銅錢迄焼捨候付、永樂・宣徳之例を以貨物之價を銅錢ニ而賜候向ニ被願立候得共、銅錢者中華遣用ニ付、明英宗免許無之、右永樂より宣徳・天順比之年号ハ太抵於 御家 義天様 大岳様御間ニ相當、天順以來明錢通用無之様相成、宣徳以前之賜錢茂漸々及絶少ニ、琉球至而不自由為相成處より、何方ニ茂不相願、鳩目錢之私鑄茂為相始ニ可有御座、其初り誰代共相知不申候得共、明萬曆八年、於日本者天正八年相當、渡來之冊使録ニ茂最早鳩目錢之事書記有之由、然者發起者天正以前決而久敷事ニ可有御座、又其後尚質代清之順治十三年、日本明曆二年ニ相當時分、其以前之鳩目錢漸々相減、又候被鑄継候事共世譜ニ書載、自其五ヶ年目萬治三子九月、同王代首里城焼失有之、修築方之錢入過分ニ候処、前により鳩目者乏

敷被願置候一筋ニ而、此度者是非与被奉願趣有之、寛文二寅九月 寛陽院様達 貴聞、日本錢通用御免相成、于今其通と相見得、清朝典彙ニ、琉球市ハ用日本錢と書載せ候茂此事ニ可有御座候、

一 加治木錢之儀、 惟新様御代慶長十五六年頃、泉州境町人弓削屋九郎右衛門与申者加治木江罷下居、依願御國之錢鑄調方一手御免ニ而、加治木土江田新兵衛・神村大藏丞等へ錢作奉行被仰付、加世田士是枝利助与申者杯錢作ニシテ、於錢屋町明錢之洪武通寶ニ被為模擬候而、鑄出方為有之筋相見得、同十七年子正月比、加治木錢沓貫文ニ付銀子四匁相場ニ被相行候事共、其砌之舊籍ニ符合仕、其後寛永四五年ニ茂候半、御領内錢之善悪手本錢被差廻、諸所ニテ改方有之、錢之數九十七文ニ候処、算用六ツ數、九拾六文宛被召成候向之仰渡茂有之候、御座候然處同十三年子六月、寛永之新錢者江戸并江州坂本ニ而鑄方被仰付、右両所之外者何様惡錢ニ而茂一切不可鑄出旨、段々稠數 公儀御禁制被相定、其以前無御免許在々處々鑄出來り候加治木錢之類茂、

國主より不被為願候而難被為叶御時宜合成立、同十四年子二月 黃門様御代、於 御領内茂新錢被仰付度之旨御願出御座候処、同年三月十九日、御老中御奉書を以、國々所々茂以來者可被仰付候間、重而之御沙汰ニ被成尤候向ニ被仰渡、翌廿日朝阿部豊後守様より伊勢貞昌被召寄、於御國新錢被為鑄儀者先被相延、古錢如本召仕尤之由、以御談合被仰出候条、以其心得御國江可申遣向ニ御演説為有之趣、細々御問合有之、其項よりニ候半、加治木町之錢作共、生業無之故ニ茂御座候哉上方其外他方ニ罷越者有之、全駄御國江者無御免茂候処、惡錢なと作出候而者御難題可罷成与之御吟味ニ而、同十五年寅八月、右者共被召帰、可被及御沙汰向之仰出茂有之、左候處同廿年末二月、諸國新錢鑄候事堅御停止ニ候間、若相隠鑄出輩ハ訖度可申出旨 公儀より被仰出、同年三月右通從 公儀被仰渡候間、於御領内茂新錢鑄者於有之者見立聞立早速可遂披露旨、御家老衆御連判之御廻文を以訖与諸郷へ被仰渡、同五月寛永新錢之内、當國之古錢或永樂・古ひたる類召遣由候間、檢者を以被相撰候



条、諸所ニ檢者申付、右躰之惡錢訖与召遣間敷、就中  
 寬永之新錢ニ惡錢共於有之者、別而曲事ニ候、自然他  
 國より惡錢入來儀茂難計、又當國江隱置者茂可有之、  
 見立聞立於申出者相應御褒美可被仰付旨、御廻文を被  
 仰渡、其砌諸郷一統右躰錢之檢者被仰付、同年六月組  
 頭より茂惡錢取やり致すもの於有之ハ、不移時日鹿兒  
 嶋江可申出旨御廻達有之、其比錢上納之者ハ於御藏錢  
 多り衆相詰、惡錢者多り出候事、同廿一年申八月古帳  
 ニ相見得、前件檢者を錢多り衆共為唱ニ可有御座、又  
 高岡士中馬權左衛門与申者など、御法度之瀬戸内錢鹿  
 兒嶋へ持參候付、知行・屋敷被召上、寺領被仰付置、  
 其後御赦免ニ而半地為被返下事、明曆三酉九月御曳付  
 ニ有之、前文仰渡相背、他國より惡錢持入候御咎目ニ  
 御法度  
 可有御座、右次第御國之古錢難召遣折柄、萬治三子九  
 月琉球國司尚質代首里城及焼失、鳩目錢者之數時分、  
 別而  
 大粧成城普請何分難相調、無據訳筋を以、寛文元丑九  
 月羽地按司罷登、兼日奉願候京錢通用之義、此度者是  
 非と被願出趣有之、 寛陽院様達 貴聞、其通御免相

成、其以前國分士伊地知太郎兵衛与申者、琉球降服之  
 時分より和文通用之筆者ニ被相頼、数拾年滯國、御  
 糸荷發起之節共ハ横目とシテ致渡唐ニ付、姿茂琉人ニ  
 相成、倭琉之為メ段々勲勞仕、當麻村地頭迄為相成者  
 七拾歳罷成、餘命茂無御座ニ付、親類為見參上國仕候  
 砌、前文之通加治木錢等御國之古錢 公義法度相成、  
 過分之錢高乍有之難被召遣、莫大之御損亡ニ被為及候  
 折柄之故、何卒地金ニシテ琉國通用之鳩目錢成共為作  
 御為相成手筋ハ有之間鋪候哉、當麻江御沙汰有之、乍  
 老躰御受仕、即持下、其通取計、又候罷登、御勘定迄  
 為相遂之由、且同頃一向宗之佛具等過分御取揚相成居、  
 夫迄茂被相渡、鳩目錢ニ為鑄調事共、其身書置一冊ニ  
 是又  
 有之、但當麻事文祿四未年之生与同文中ニ書置、其通  
 候得者七拾歳者寛文四辰年ニ相當、大概事實茂符合仕、  
 殊ニ加治木錢之儀者抑洪武通寶を為擬錢ニ御座候由、  
 就而者其儘通用為致ニ可有御座、子細者享保以後渡來  
 之冊使等為書置傳信録ニ、琉球舊有洪武錢と書載せ、  
 或ハ國史略に琉球有私鑄、中國人茂不能辨時とシテ受

其欺与御座候類、決而於加治木被鑄出候御國古錢之洪武ニ可有御座、勿論洪武錢之通用ハ琉球計ニ無御座、今以御當地通用錢之内ニ茂多ク相雜居、時トシテ裏に治之字有之、加治木之印ニ茂候半欵、全躰琉球ハ右次第之形行ニ而、鳩目錢私鑄之儀自往古之仕来与相見得、清國より右躰之事共書置候計、何ぞ差構向ニ不被見受、又江戸より茂為何御沙汰之有無所見無御座、就中寛永廿年以来者新錢鑄候事、日本一統廢禁罷成居候得共、琉球者其後無間茂明曆二年鳩目錢之鑄繼茂有之、殊更當麻以佛具鑄繼候者、猶其以後ニ相當候得共、何篇國限之事ニ而勝手次第与相見得申候、左様御座候上、寛文二寅年日本錢琉球迄茂通用御免相成、其砌一往之御吟味欵ハ相知不申候得共、押通り當丑迄百九拾二年之間、倭錢を以年々琉物類買登之由御座候間、全躰日本遣用之<sup>(錢之)</sup>積年右通ニ付而者、御當地杯一入減少仕筈与奉存候、先前写集候分ニ而考合、大略右次第御座候、猶重而何様之事証可見當茂難計、何分御急キ之事与奉存、乍不束此段申上候、尤別ニ見出義茂御座候ハ、其

節可申上候、以上、

但先役川上平右衛門、天明八申年就六道錢之儀諸書拔等一冊、且新錢鑄調候儀ニ付しらへ留之扣當座江格護相成居、右書拔之内ニ者無據ケ条茂御座候間、若御用共於有之ハ、書寫差上候様可仕、外ニ寛永十三年より正徳年間迄米賣其外諸色直成或ハ銀錢相場之高下等為書留卷冊、嶋津内記家ニ有之、又寛永廿一年諸職人賃定并諸物直成定帳、或萬治二年海陸運上銀定帳之類我家ニ茂所持仕候、萬一御用茂御座候ハ、差上可申候、以上、

御記錄奉行

伊地知小十郎

丑七月十六日

鹿児島県史料編さん関係者

史料編さん  
顧問  
東京大学 史料編纂所 所長 黒田 日出男

東京大学 史料編纂所 教授 宮地 正人

尚古集成館 館長 芳 即正

鹿児島大学 名誉教授 五味 克夫

委員  
安藤 保晋 哲哉

原 口 泉 日隈 正守

三 木 靖 宮下 満郎

山 田 尚二 堂 満 幸子

鹿児島県歴史資料センター黎明館

館 長 今 吉 弘

調査史料室 尾 口 義 男

学芸専門員 久保 田 瑞 成

資料調査員 荒 田 邦 子

編集員 茶 圓 倫 子

瀨 田 亜樹子 盛 満 恵子

尾 形 ひろ子

鹿児島県史料 旧記雑録拾遺伊地知季安著作史料集二

平成11年1月10日 印刷

非売品

平成11年1月31日 発行

編集 鹿児島県歴史資料センター黎明館

発行 鹿児島県

印刷所 株式会社 きょうせい